大日本帝国召喚【リメイク版】

ゼロ総統

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある事情から、史実の歴史とは別の道を歩んだ大日本帝国。そんな大日本帝国が現代まで存続し、異世界に召喚されてしまう…そんなお話。

これは以前投稿していた『大日本帝国召喚』のリメイク作品となります。前作とは所々（というかかなり）変更された部分があります。

楽しんで読んでもらえたら幸いです。

目次

第1章　異世界転移
プロローグ――――1
第1話―接触―――9
第2話―動乱―――16
第3話―開戦！ロデニウス大戦―――22
第4話―鋼鉄の艦隊―――28
第5話―エジェイ攻防戦―――35
第6話―王都攻略戦―――42
閑話集①
閑話―もう1つの大帝国―――49
閑話―国内の動き―――54
閑話―王国の再興―――57
第2章　列強パーパルディア皇国
第7話―フェン王国と軍祭―――61
第8話―大帝国の接触―――69
第9話―日グ交渉―――76
第10話―アルタラス王国―――79
第11話―列強ムー―――84
第12話―ムーとの会談―――92
第13話―列強との衝突―――98
第14話―アルタラス島沖事変―――104
第15話―過ち―――113
第16話―窮地の出会い―――119
第17話―不穏な空気―――128

第１８話―予期せぬ奇襲―　――――――――――――135
第１９話―科学文明の怒り―　――――――――――――142
第２０話―開戦！フィルアデス大戦―　――――――――147
第２１話―フェン王国沖海戦―　――――――――――――152
第２２話―フェン王国の戦い―　――――――――――――160
第２３話―アルタラス島沖海戦―　――――――――――――167

第1章　異世界転移

プロローグ

～西暦２０１４年１２月３１日～

大晦日の深夜、間もなく今年が終わり、新年を迎えようと多くの国民が様々なイベントで盛り上がる、丁度その頃。

「福島の第６機動科連隊を除く全部隊の展開が完了しました。遅れている第６機動科連隊も、間もなく展開が完了するとのことです」

「第１、第２、第３艦隊の出撃準備完了、その他各艦隊は所定の海域にて待機中」

「全航空団が各基地にて出撃待機中、命令と同時に偵察飛行隊が出撃できます」

防衛省内に設置された特務作戦司令本部では、多くの職員がモニターを監視し、随時報告を挙げていく。その光景を難しい表情で見守るのは、大日本帝国国防軍全軍を指揮する藤堂（とうどう）　平九郎（へいくろう）統括司令長官その人である。

「いよいよだな…今回の件で、我が国は殆どの国からの信用を失ってしまった。だが、もし本当にあんなことが起きてしまうのであれば、我々は選択を余儀なくされるだろう」

藤堂は今日までの苦労を思い浮かべ、そしてこれからあるだろう多大な苦労を想像し、なんとも言えない表情を浮かべた、その時。

「何、それは本当か!?…了解した、すぐに伝える…横須賀基地より緊急電！横須賀基地所属の全艦隊がオーロラらしき現象を確認！そのオーロラは横須賀基地からも視認できるとのこと！原因は不明!!」

「同じ内容の報告が、大湊、舞鶴、呉、佐世保からも送られてきています!!」

「各種衛星との通信途絶！これより復旧作業に入ります！」

「韓国軍との通信途絶！繋がりません！」

「直ちに原因の解明を開始せよ。それと、すぐに官邸に連絡を！」
藤堂の迅速な指示により官邸に事態の報告が伝えられたが、官邸には他にも、外務省、国土交通省、気象庁等の省庁からも報告が上がっており、官邸は大混乱に陥っていた。
そもそも何故このようなことになっているのか。それを説明するには、少しだけ昔の話をさせてもらいたい。

～西暦１８８５年１２月２２日～

大日本帝国にて伊藤（いとう）博文（ひろふみ）が初代内閣総理大臣に任命され、第１次伊藤博文内閣が発足したその日の夜、彼は夢の中で本棚に囲まれた部屋の中に立ち、そこで不思議な少女と遭遇した。
少女は近くの本棚から１冊の本を取り出すと、伊藤に向き直り歩み寄ってきた。

ーようこそ、僕の世界へ。

頭の中に響く幼い声。目の前の少女の声なのだろうが、少女の口はまったくと言っていいほど動かされてはいない。ずっと微笑んだままだ。
「君は誰かね？それに、君の世界とはいったい…」
伊藤は当然とも言える質問をするが、少女は少しだけ考えるそぶりを見せるもその問いに答えることはなく、手に持った本を開いた。

ーえっと…今からこ日後、無人の貨物船１隻が東京湾内に出現します。輸送船には貴方達の役に立つ筈のものがいっぱい積載されているので、それを活用して頑張ってください。
「ま、待ってくれ！それはどういう…」
訳のわからず伊藤が問い詰めようとした時、ふわりと浮かび上がる

ような感覚に襲われ、気が付くと自室の布団の中で横になっていた。
何とも不思議な夢だったと内容を思い出す伊藤であったが、それから丁度2日後、なんと東京湾にて無人の貨物船が発見されたと海軍から報告が上がったのだ。
その後、海軍に貨物船の回収を指示を出した伊藤は、伊藤博文内閣の各大臣を集めて夢の内容を話すことにした。自分で話していながらも理解されないだろうなと思う伊藤であった…のだが。
「そ、それでは…総理もあの少女と会われたのですか!?」
「外務大臣のいう少女と一致するかはわかりませんが、子供と出会いました…ッまさか貴方も!?」
「ま、まってください！総理！その少女は、本棚に囲まれた部屋に居ませんでしたか!?」
「は、はい！その通りです！と言うことは、あなたもですか!?海軍大臣!?」
次々に発覚する事実。政府の要人全員が、全く同じ夢を見ていたのだ。流石に事が事なだけに、伊藤はこの事を報告すべく天皇陛下の下へ向かった、すると。
「朕は此度の事態を、2日程前より把握していた。そなたの申す、夢の少女によってな」
伊藤は目眩がした気がした。それもそうだ、政府の要人全員が見て、大日本帝国のトップである天皇陛下が見ない筈がないのだ。
その後、天皇陛下の御言葉を得て回収された貨物船を調査すると、貨物船からは大量の本や設計図らしき物等が発見された。
回収された本を各専門家に見せてみると、皆が皆一様に目を見開き、食い入るように本を読み進めていった。とある造船に関する専門家はこう語る。
「ここに書かれていることが事実であれば、我が国の造船技術は３０……いや、５０年は進むだろう」
とある軍事専門家はこう語る。
「これまでの常識が一切通じなくなる。これが実現できれば、我が国は強力な軍事国家へと発展するだろう」

これらの意見から、各種資料は厳重に管理され、大日本帝国はゆっくりと、それでも史実以上の発展を遂げることとなる。

～西暦１９０５年５月２７日～
日本海

あれから２０年の時が経った。大日本帝国海軍連合艦隊司令長官である東郷（とうごう）平八郎（へいはちろう）海軍大将は、自身の乗艦する戦艦〈三笠〉の艦橋から、バルチック艦隊のいると思われる方角を見つめていた。
「東郷司令、警戒中の味方潜水艦がバルチック艦隊と思われる艦隊を発見、艦隊はこちらに向かい航行中とのことです」
通信員の報告を受け、東郷は目を細めた。
「よもや、上層部の言う通りになるとはな…全艦第一種戦闘配備！」
東郷の指示を受け、各艦で乗員が慌ただしく行動を開始する。
「上層部の報告が全て正しいのであれば、敵の戦艦は前弩級クラスが８隻……対してこちらは超弩級クラス２隻に弩級クラス４隻の６隻。数でこそ劣りますが、質や練度はこちらが圧倒的上です」
「油断は禁物だ。戦場では何が起こるかわからんのだよ」
「はっ、失礼しました」
副官を窘める東郷であったが、東郷自身もまた、負ける気は微塵も感じていなかった。技術レベルは既に２、３０年近く離れており、今なおその差は開き続けている。
今回の海戦においても、こちらは最新鋭戦艦〈三笠〉を含めた連合艦隊５６隻に対し、敵は前弩級戦艦８隻を含むバルチック艦隊５８隻。数では劣るものの、負ける要素はほぼ見当たらない。
「敵艦隊、こちらの有効射程圏内に入りました！」
「砲撃よーい…撃ち方、始め!!」
東郷の合図と同時に、戦艦〈三笠〉自慢の３５．６㎝連装砲４基が火を吹いたのだった。

～西暦１９４１年１２月８日～
大英帝国　ポーツマス海軍基地

あれから更に時は流れ、大英帝国最古の海軍基地、ポーツマス海軍基地。ここには戦列艦ヴィクトリーや装甲艦ウォーリア等、著名な展示物が存在している。
現在ポーツマス海軍基地には大英帝国の誇る本国艦隊の他、太平洋艦隊の規模を縮小して、代わりに規模を増大したアメリカ海軍大西洋艦隊。そして、最新鋭艦艇を多数含んだ大日本帝国海軍欧州派遣艦隊の姿があった。
「素晴らしい…まさか生きている間に、これ程の艦隊をお目にかかれるとは…」
大日本帝国海軍が建造した最新鋭戦艦〈越後〉の艦橋から、派遣艦隊司令長官である山本（やまもと）　五十六（いそろく）海軍大将が軍港に停泊する艦艇群を眺めていた。
自国の建造した戦艦〈越後〉もさることながら、アメリカ海軍が建造した最新鋭戦艦〈コロラド〉や、イギリス海軍が建造した巡洋戦艦〈フッド〉など、各国の最新技術の詰まった艦艇を含んだ艦隊は、彼に大きな心強さを与えた。
「山本司令、間もなくお時間です」
「わかった…全艦出撃！目標、ドイツ第３帝国!!」
山本の号令と共に、欧州派遣艦隊は出航していく。ドイツ第３帝国を目指して…。

～西暦２０１３年４月１５日～

時代は代わり、時は現代。
第９６代内閣総理大臣に任命された今村（いまむら）　正治（まさはる）は、夢の中で不思議な少女と遭遇していた。

歴代内閣と天皇陛下の夢の中に現れると言い伝えられてきた夢の少女。今村も着任時に前任総理から引き継がれた話であった為、落ち着いた対応がとれていた。

「イズル様……ですね？」

イズル……呼び名のない少女を不憫に思った天皇陛下から送られた、少女の名前である。様付けなのは、初代から続く伝統のようなものだ。

ーこんばんは、新しい総理大臣、今村　正治さん。

少女（以後イズル）は今村を迎え入れた後、近くの本棚の一番下から一冊の本を取りだし、ペラペラと捲っていく。本の内容は今の立ち位置からでは見えないが、引き継がれた話を思い出す限り、あまりいい内容ではないだろう。

ふと、イズルの本を捲る手が止まった。

ー今村総理、落ち着いて聞いてください。

こちらを振り向いたイズルの表情は、今村を出迎えた時とは打って代わり険しく、真剣な眼差しを向けていた。

ー今より約2年後の1月1日、大日本帝国は地球上より消滅します。

「……はっ!!!??」

一瞬呼吸すらも忘れ、驚きの声をあげた。

消滅……2年後……地球……大日本帝国……消える……滅ぶ……戦争!!

「何処の国ですか!?　我が国の脅威になりそうなのはアメリカとソ連くらいしか……まさか中国が!?　それともこの3カ国が手を組んだとか!?」

ーお、落ち着いてください。別に大日本帝国が滅ぶわけではありませんよ。

ん？そうなのか。それではいったい、どういうことなのだろうか。
必死に頭を悩ます今村だが、答えは出てきそうにない。

ー信じがたいかもしれませんが…大日本帝国は2年後の２０１５年1月1日午前0時をもって、異世界へと転移します。

イズルの言葉に、今村の頭の中が真っ白になった。
異世界に転移、確かにイズルはそう言った。だがそんな現実離れしたことが本当にあるのだろうか。

ー今さらですね、既にこの空間で僕と出会ってるのに…。

言われてみればなる程、確かにその通りだなと理解する。さりげなく思考を読まれた事に気付かないことにした今村は、今後の方針を確認する。
「それでは、我々は転移に備えればよろしいのですね？」

ーはい。残念ですが、現在僕も転移先の世界の情報を持ち合わせておりません。転移後にあるいは……といったところですね。

「なんと……」
あのイズルすらも知らない、異世界への転移。運が悪ければ、中国みたいな覇権国家がごろごろ存在する世界に転移する可能性もある。
「かしこまりました。可能な限り準備を致します」
そう言うと今村は夢から覚め、自室のベッドで目を開いた。
起き上がった今村はすぐさまスーツ姿へと着替えると、閣僚会議の準備を開始した。

「残り時間は2年と無い、急がねば…」
そして時は約1年8ヶ月後、オーロラ出現時まで進む。

オーロラの出現により、全国各地に存在する駐屯地や基地では、隊員が慌ただしく行動を開始した。
とある陸軍駐屯地では。
「搭乗ーッ!!」
「我々の防衛目標は原子力発電所だ！　機体が稼働次第随時向かわせろ!!」
「既に第3戦車中隊が待機中！　合流してください!!」
とある海軍基地では。
「全艦隊の無事を確認させろ！　急げ!!」
「了解!!」
とある空軍基地では。
「偵察飛行隊、発進しました!!」
「気を緩めるな！　またすぐスクランブルが来るかもしれんぞ！　機体の点検を怠るなよ!!」
大日本帝国軍全軍が、事前に受けた指示通りに行動を開始した。陸軍は重要施設の警備、海軍は転移に取り残された艦艇がいないか確認及び周辺海域の警備、空軍は事前に編成した偵察飛行隊をスクランブル発進させる等、慌ただしく動き回る。
無論、それは軍に限った話ではない。現場では海上保安庁や各都道府県警察が、上では防衛省や外務省、国土交通省、気象庁など、どこもかしこも慌ただしい。
だが、これは始まりでしかないのだ。
これは、大日本帝国の……新たな戦いの物語。

第1話―接触―

～中央暦１６３９年1月1日午前８時―
クワ・トイネ公国軍第６飛竜隊

その日は快晴な青空が広がっていた。
クワ・トイネ公国軍第６飛竜隊所属の竜騎士マールパティマは、相棒のワイバーンと呼ばれる飛竜を操り、公国北東部の警戒任務に当たっていた。
公国の東側に国家は存在せず、青い海が広がるばかりで特に興味の引くものはないはずだった。しかし、ここ最近仮想敵国であるロウリア王国との緊張状態が続いており、軍船による奇襲が想定され、早期に探知、対策をとる為の哨戒任務として、彼は相棒を北東方面へと飛ばしていた。
「ん？……な、なんだあれは……？」
彼は自分以外にいる筈のない空で、何かを見つけた。最初は友軍騎かと思われたが、この時間帯に近くを飛行する友軍騎はいないことを思い出す。
ロウリア王国の可能性も考えたが、ロウリア王国のワイバーンでは航続距離が圧倒的に不足している。文明国以上には竜母と呼ばれる、ワイバーンを載せて運用する飛竜母艦が存在するらしいのだが、わざわざ蛮地と蔑まれているこの地にいるとは思えない。
やがて距離が近付くにつれ、それの正体がはっきりと見えるようになってくる。それは羽ばたくことなく、真っ直ぐこちらへと迫っていた。
『我、未確認騎を発見。これより要撃し、確認を行う。現在地……』
彼はすぐに通信用魔法具、通称魔力通信と呼ばれる通信方法を用いて司令部に報告する。幸いにも高度差は殆どない。
彼は一度すれ違ってから距離を詰めるつもりでいた。
ワイバーンの最高速度は時速２３５㎞。生物の中ではほぼ最速を誇り（三大文明圏には更に品種改良を加えた上位種が存在するらし

い)、直ぐに追い付ける……そう思っていたのだが、まったく追い付けない。
「な…バカな!?」
　未確認騎の速度に驚愕し、無茶を承知でワイバーンを加速させるが、それでも追い付けない。それどころか、ぐんぐんと距離が離されていく。
「くそっ！　なんなんだアイツは!!　司令部！　司令部!!　我、未確認騎を確認しようとするも、速度が違いすぎる!!　追い付けない!!
未確認騎は本土マイハーク方面へ進行。繰り返す、マイハーク方面へ進行した!!」
『落ち着いて、騎の特徴は？』
「白色で硬質な外装!!　巨大な翼を動かすことなく飛んでいる!!　しかも速い!!　このままだと直ぐにマイハーク上空に到達する!!」
　マールパティマは必死に魔信（魔力通信のこと）に叫んだ。すると思いが通じたのか、第６飛竜隊基地にて出撃待機中だったワイバーン１２騎が、透き通るような青い空めがけて羽ばたいていく。
「頼んだぞ……万が一にでも攻撃を受けたら、軍の威信に関わってしまう」
　第６飛竜隊基地司令はそんな願いを込めて、第６飛竜隊１２騎の飛び立った方角を見つめるのだった。

　丁度その頃、未確認騎改め大日本帝国国防海軍所属の９２式対潜哨戒機の機内で、数人の搭乗員が先程の光景について議論していた。
「機長！　今の見ましたか!?」
「あぁ、空飛ぶ蜥蜴だなんて、まるでお伽噺の世界に来てしまったかのようだ」
「機長、ここはもう異世界です」
　彼らは空飛ぶ蜥蜴……ワイバーンを見て、改めてここが異世界であると認識した。なお異世界転移の情報は、関係省庁上層部の他、陸海空軍の佐官以上並びに空軍の偵察飛行隊各機にのみ伝えられていた。

「機長！　前方に都市が見えます！」
　地上の撮影を行っていた乗員から報告が上がる。機長が目を凝らすと、確かに都市らしき建造物が見えた、だが……。
「前方より未確認機！　数は凡そ１２！　時速２３５㎞の速度で接近中!!」
「高度を上げるぞ！　地上の撮影が終わり次第、すぐに撤収する!!」
　それと同時に、多数の未確認機がこちらに向かってきている事を知り、即座に高度６，０００ｍまで上昇した。未確認機は高度４，０００ｍ付近まで上昇してくるも、そこから上昇してくることはなかった。
「未確認機、高度４，０００ｍ付近を飛行中です！」
「どうやらこの高度までは上がれないらしいな……撮影は終わったな？　これより帰投するぞ」

　マイハーク防衛騎士団団長イーネは、第６飛竜隊からの報告を受け、直ぐ様部下を武装させて町の四方にある監視塔に向かわせていた。
　イーネ自身も監視塔へ向かいながら、思考を巡らす。報告によれば、飛行物体はワイバーンをあっさりと置き去りにし、こちらに向かってくるようだ。
　一般的に、飛竜から地上への攻撃方法は口から吐く火炎のみとされている。それは、飛竜が存外、重いものを運ぶことができないからである。単騎で来るなら、攻撃されても大した被害は出ない。おそらく敵の目的は偵察と推測される。
　だが、生物の中でほぼ最速を誇るワイバーンを置き去りにするとは、敵はいったいなんなのか。
「来たぞーっ!!」
　東の監視塔に向かわせた騎士団員が、大声で叫ぶ。その直後、マイハーク上空に１騎の飛行物体が侵入してきた。
　その飛行物体は白い騎体で大きく、そして羽ばたかない翼には赤い

正円が描かれている。
「味方だ!!　第６飛竜隊が到着したぞーっ!!」
今度は西の監視塔に向かわせた騎士団員が叫ぶ。そちらの方向を見ると、第６飛竜隊所属のワイバーン１２騎が、マイハーク上空に到着した。
「頼むぞ……っ！」
イーネは第６飛竜隊の健闘を祈った……だが。
「な、なんだと!?」
近くにいた騎士団員が叫んだ。正体不明の飛行物体が、更に高度を上げたのだ。第６飛竜隊が必死に追いかけるも、途中で上昇をやめてしまう、限界高度まで上がったのだ。
イーネもこの光景に呆然とし、ただその飛行物体を見つめていた。
ワイバーンでは辿り着けない高度まで上昇し、ワイバーン以上の速さでマイハーク上空を旋回するその飛行物体は、暫くすると満足したのか、北東方面へと飛び去っていった。
「いったい……何が起こると言うんだ」
静まり返った空間に、イーネの呟きははっきりと響き渡った。

場所は変わり、クワ・トイネ公国政治部会。
国の代表が集まるこの会議で、首相カナタは悩んでいた。
今より3日程前、クワ・トイネ公国軍の防空網をあっさりと破り、マイハーク上空に侵入してきた所属不明の飛行物体。ワイバーンでは高度、速度共に追い付くことができず、飛行物体はマイハーク上空を旋回してから去っていったという。これは明らかな偵察行為である。
カナタは発言する。
「皆の者、この報告についてどう思い、どう解釈する」
情報分析部長が手を挙げて発言する。
「情報分析部によれば、同物体は三大文明圏の一つ、西方の第二文明圏の大国、ムー国が開発している飛行機械に酷似しているとのことです。しかし、ムー国において開発されている飛行機械は、最新の物で

も最高速力が時速３５０km前後との事で、今回の飛行物体は明らかに時速８００kmを超えています」
　政治部会の誰もが信じられないといった表情を見せる。もしその飛行物体がムー国のでなかった場合、ムー国以上の力を持った国家の所属と言うことになる。
「しかも、ムー国までの距離でさえ我が国から２０，０００km以上離れています。もし仮にムー国で極秘に造られていた物だとしても、今回の物体がムー国のものであることは考えにくいのです」
　会議は振り出しに戻る、結局解らないのだ。
　ただでさえロウリア王国との緊張状態が続き、準有事体制のこの状態で、頭の痛いこの情報は首脳部を更に悩ませた。
　その時、政治部会に外交部の若手幹部が息を切らして入り込んでくる。通常は考えられない、明らかに緊急事態であった。
「何事か!!」
　政治部会の１人が声を張り上げる。
「報告します!!」
　若手幹部が報告を始める。
　要約すると、つい先程クワ・トイネ公国の北方海域に全長約２００mクラスの超巨大船が現れたとのこと。
　付近を航行していた第２艦隊所属の軍船ピーマ船長ミドリが臨検を行ったところ、大日本帝国という国の特使が乗っており、敵対の意思は無いことを伝えてきた。
　捜査を行ったところ、下記の事項が判明した。なお、発言は本人の申し立てである。

　…大日本帝国という国は、突如としてこの世界に転移してきた。
　…元の世界との全てが断絶されたため、哨戒機により付近の偵察を行っていたところ、陸地があることを発見した。偵察活動の一環として貴国上空に進入しており、その際領空を侵犯したことについては深く謝罪する。
　…クワ・トイネ公国と会談を行いたい。

突拍子もない話に政治部会の誰もが信じられない思いでいた。
しかし、先日マイハーク上空にあっさり進入されたのは事実であり、２００ｍクラスという考えられないほどの大きさの船も報告に上がってきている。
国ごと転移などは神話には登場することはあるが、現実にはありえない。しかし、大日本帝国という国は礼節を弁えており、謝罪や会談の申し入れは筋が通っている。
まずはその外交官とやらを官邸に招致することを決定した。

本棚に囲まれた、小さな部屋。
そこは歴代内閣や天皇陛下が夢の中でのみ辿り着ける、少女の部屋。
部屋の中で1人、イズルは部屋中の本を引っ張り出していた。手に取った本が探している本でないと知るや後ろへと放り投げ、再び本棚から本を出していく。
その時、1冊の本が本棚の上段から滑り落ち、イズルの頭に直撃した。
頭を押さえて蹲り、痛みを堪えながら落ちてきた本に視線を移すイズルであったが、その本を見た途端に痛みなど無かったかのように飛び付き、本のページを捲っていく。
暫く読み進めていくと、本を捲る指が止まった。

ー……なるほど、神様も人が悪いや。

小さく息を吐いて呟く。
イズルは手に持つ本を本棚以外で唯一存在する机の上に置くと、部屋の惨状を見て頬を歪ませる。

ー……これ、僕がやったんだよね……はぁ。

もう一度小さく息を吐き、イズルは本を本棚に戻す…後片付けを始めるのだった。

第2話―動乱―

～中央暦１６３９年３月２２日午前～
クワ・トイネ公国

大日本帝国という国と国交を締結してから、３ヶ月近くが経とうとしていた。クワ・トイネ公国、そして同時に国交を結んだクイラ王国は、今までで歴史上最も変化した月日であった。

大日本帝国から食糧年間約６，５００万ｔというとてつもない規模の受注であったが、大地の神に祝福された土地を有するクワ・トイネ公国は、家畜にさえうまい食糧を提供できるほどで、種類によっては無理な部分があるも、なんとか大日本帝国側の受注に答えることができた。

クイラ王国も同じく、元々作物の育たない不毛の土地だが、大日本帝国の調査によれば地下資源の宝庫であるようで、鉱物や原油といった大量の資源を、クワ・トイネ公国と結んだ通商条約とほぼ同じ条件で輸出することを決定し、更に大日本帝国からの技術供与を受けて、採掘を開始していた。

一方、大日本帝国側はインフラ設備を始めとした様々な技術を輸出していた。

大都市間を結ぶ道路や鉄道設備、これらによって各国の流通が活発となり、今までとは比喩にならないほどの発展を遂げるとの報告も上がっていた。

いつでも清潔な水が飲めるようになる水道技術（もともと水道技術はあったが、真水ではとても飲めたものではなかった）、夜でも昼のごとく明るくでき、更に各種動力となる電気技術、手元をひねるだけで火を起こせ、かつ一瞬で温かいお湯を出すことが出来るプロパンガス、これだけでも生活はとてつもなく楽になる。

大日本帝国には新たに『新世界技術流出防止法』と呼ばれる法律が出来たため、一部を除いて中核的技術は貰えなかったが、その一部が手に入るだけでも大きい。

まだ3ヶ月近くしか経っていないが、すでに公都クワ・トイネや経済都市マイハークでは、多くの日本製品が目撃される。
「凄いものだな。大日本帝国という国は、明らかに三大文明圏を超えている。もしかしたら我が国も生活水準において、三大文明圏を超えるやもしれぬぞ」
クワ・トイネ公国首相カナタは秘書に語りかける。彼は古くからの友人であり、気軽に話せる数少ない存在である。
「生活水準のみでなく、恐らく国としても超えられるかも知れませんね」
秘書はカナタの手元に1つの報告書を置いた。表紙には『大日本帝国軍によるクワ・トイネ公国軍育成計画経過報告書』と書かれていた。
大日本帝国軍の軍事演習を見学した使節団の報告により、大日本帝国はかなり強力な国軍を保有することを知ったクワ・トイネ公国政府は、その軍事力の一部でも手に入らないかと求めてみたところ、相手側はなんと旧式ではあるが、兵器の輸出を認めてくれた。
さらにはクワ・トイネ公国内に兵器や弾薬等を製造するための工場や造船所までも建設を行ってくれている。
陸軍では大日本帝国が70年程前に使用してきた三七式自動小銃や一式改重機関銃といった、列強ですら保有していないであろう銃火器や、五七式戦車等の装甲車両を輸入、しかし現存する装甲車両は少なく、新たに製造するため、全ての部隊に配備するのは時間が掛かるだろう。
海軍では新たに軍船……軍艦の建造を依頼している。建設中の造船所が完成すれば我が国でも軍艦は建造できるだろうが、今はまだ大日本帝国に頼るしかない。現在は戦艦が1隻、正規空母が1隻、装甲艦（重巡相当）が3隻、軽装甲艦（軽巡相当）が8隻、駆逐艦が12隻、そして驚くことに、ミサイルを搭載した防空艦2隻が、我が国のために建造中とのこと。
流石に造船所が完成してもミサイル搭載艦は建造できないらしいが、その他は建造できるようになるらしい。
既に装甲艦1隻と軽装甲艦2隻、駆逐艦4隻が就役しており、海軍

では大日本帝国から派遣された軍事顧問団指導の下、運用が開始されている。
そして、クワ・トイネ公国では新たにクワ・トイネ公国空軍が設立され、今まで空の覇者とされていたワイバーンは全て対地支援用に再教育されることになり、今後は大日本帝国より輸入した三二式戦闘機が、海軍の三五式艦上戦闘機と共に、クワ・トイネ公国の空を守っていくこととなる。こちらも現在工場を建設中であり、航空戦力の増量はまだ先の話となる。
しかし、これら全てが直ぐに戦力化される訳ではない。大日本帝国から輸出されているのは、モスボール状態等で保管されていたものであり、動かす為には整備は必須。
航空機の運用にも長期の訓練期間を必要とし、元々竜騎士団に所属していた者は数カ月で終わるらしいが、それでもやはり数が少ない。
「蛮地と蔑まれた辺境国家が文明圏内国、敷いては列強すら凌駕する国に生まれ変わる……なんとも面白いじゃないか。私は年甲斐もなくワクワクしてしまっているよ」
「同感です。それに彼らは平和を愛する民族のようですから助かりました……彼らの技術力、国力で覇を唱えられたらと思うと、ぞっとします。彼ら相手では、神聖ミリシアル帝国でも相手になりませんから」
美しい夕日が、穀倉地帯の広がる地平線に落ちる。その向こうにはロウリア王国があった。
ロウリア王国、エルフやドワーフ、獣人などを迫害し続け、亜人を殲滅しロデニウス大陸統一を目論む、人間至上主義の国家である。しかし、近年では一般市民を中心に迫害を行う者は少なくなり、現在では一部を除いた王族や貴族階級の人間が、娯楽目的として迫害しているのだとか。
この情報はロウリア王国のとある人物からの情報ではあるが、その人物の立場上、その情報が真実である可能性がかなり高い。
「公国の未来を守るためにも、早く公国軍の近代化を進めないと……在鍬日本軍が居てくれるとはいえ、国防の全てを任せるわけにはいか

ないからな」
国軍の大規模な改編により、国防が困難になると言われていたクワ・トイネ公国であったが、そこへ大日本帝国が国防の肩代わりとして、一部地域の租借と軍の駐留許可を求めてきた。
当初は国内に他国の軍を駐留させることに否定的な政治部会であったが、自国のみでの国防は難しいと理解はしており、土地を租借と言う形であったことから、渋々ではあるが軍の駐留を認めたのだ。
協議の結果、ダイタル平野を租借した大日本帝国は、同平野にて中規模な在鍬日本軍エジェイ駐屯地を開設、第３０１混成連隊約３，０００人の隊員が駐屯することとなっている。
首相カナタは自国の発展を確かに感じ取りながら、沈む夕日を眺めるのだった。

ロウリア王国王都ジン・ハーク　ハーク城

ロデニウス大陸の西側半分を占め、人口約３，８００万人にも達する国家、ロウリア王国。
ロウリア王国の首都である王都ジン・ハーク。松明の焚かれる薄暗い城の一室、この部屋で国の行く末を決める重要な会議が行われていた。
ロウリア王国大王ハーク・ロウリア３４世を筆頭とし、
・宰相…マオス
・王国防衛騎士団将軍…パタジン
・三大将軍…パンドール
　　ミミネル
　　スマーク
・王宮首席魔導師…ヤミレイ
その他にも国の主要な幹部達も勢揃いしていた。
パタジンは自信に満ちた口調で作戦の説明を行う。
「説明致します。今回の作戦用総兵力は５０万人、本作戦でクワ・トイ

ネ公国に差し向ける兵力は４０万、残りは本土防衛用兵力となります。クワ・トイネ公国については、国境から近い人口約１０万人の都市、ギムを強襲制圧します。なお兵站についてですが、あの国はどこもかしこも畑であり、家畜でさえ旨い飯をたべておりますので現地調達いたします。

ギム制圧後、その東方５５kmの位置にある城塞都市エジェイを、総攻撃で一気に制圧します。

彼らの航空兵力は、我が方のワイバーンで数的にも十分対応可能です。それと平行して、海からは艦船４，４００隻の大艦隊を北方向に迂回させ、マイハーク港に強襲上陸し、経済都市マイハークを制圧します。

クイラ王国はクワ・トイネ公国を制圧してからでも遅くはありません」

パタジンの説明を聞いたハーク・ロウリア３４世は、満足そうにうなずく。

「数ヶ月ほど前に接触してきた、大日本帝国とかいう国はどうする」

「はっ！情報はありませんが……ワイバーンを初めて見たと言っていたことから、ワイバーンの存在しない蛮国であると思われます。我が国の脅威になるとは思えません」

「そうか……今宵は我が人生で一番良い日だ！余は、クワ・トイネ公国、クイラ王国に対する戦争を許可する!!亜人共とそれを匿う愚か者共を根絶やしにしてやれ!!」

「ははーーーっっ!!!」

「父上……もう、戻れないのですね」

その光景を物陰から1人の少女…ロウリア王国第1王女である、ローラ・ロウリアは悲しそうな表情で、父親であるハーク・ロウリア３４世を見つめていた。

彼女は他の王族と異なり、亜人の殲滅は不可能であり、無意味であると判断しており、密かに連行された亜人達を匿っていた。匿われた

亜人達は、ローラと志を同じくする少数の貴族の下で静かに暮らしている。
「大日本帝国……列強以上の国力を持つ、極東の大帝国か」
ローラは商人を通じて、大日本帝国の情報を入手していた。クワ・トイネ公国とクイラ王国、どちらの国も大日本帝国と国交を締結してから、劇的な発展を遂げたらしい。
「……まぁなんにせよ、あの計画の為にも、クワ・トイネ公国とクイラ王国、大日本帝国には頑張ってもらいたいな」
そう言い残し、ローラはその場を後にするのだった。

クワ・トイネ公国日本大使館

「ほ、本当ですか!?」
クワ・トイネ公国側の外交官ヤゴウの喜びを含んだ声が響き渡った。
本来ヤゴウはロウリア王国が公国に侵略してくることがほぼ確実となり、食料の輸出が困難になることと、可能であれば援軍を送ってほしいことを伝えにやって来たのだが、田中大使の口から彼の望んだ答えが帰ってきたのだ。
「はい。我が大日本帝国政府は友好国であるクワ・トイネ公国とクイラ王国が侵略の危機に瀕していることを知り、友人を守るべく、既には派遣の終えている第３０１混成連隊に加え、陸軍１個師団及び海軍１個任務艦隊、空軍１個航空団を増援として派遣いたします」
ヤゴウは大日本帝国に使節団として派遣されたときに日本軍の強さを見ているため、これ程の数でも公国は救われると安堵の笑みが零れる。
この事はすぐさま公国政府に伝えられ、首相カナタはクワ・トイネ公国軍全軍に対し、大日本帝国軍を全力で支援するよう指示を出すのだった。

第３話―開戦！ロデニウス大戦―

～中央暦１６３９年４月１１日午前～
クワ・トイネ公国　ギムの町　西部方面騎士団

ロウリア王国との国境境に位置する町、ギム。そこでは現在、町の住民達が次々と軍用トラックに乗り込んでいく光景が、多数見受けられた。

大日本帝国軍第３０１混成連隊所属の軍用トラックを総動員した民間人の集団疎開を見守りながら、西部方面騎士団団長のモイジは魔力通信士に尋ねる。

「ロウリア王国側からの通信はないか？」

「現在のところ、返信はありません。確かに届いている筈なのですが、依然無視され続けています」

「そうか…司令部への増援要請に対する回答はどうなっている？」

「『現在非常招集中、現有戦力で対処せよ』とだけしか…具体的な回答はありません…」

その回答にモイジは拳を握りしめ、壁に拳を打ち付けた。その手からは血が滲み出ている。

「クソッ!!　のんびりしている暇はないと言うのに……!!　現有戦力で対処しろだと!?　敵は我が方の１０倍以上だぞ!!　日本軍の部隊が到着しているとはいえ、合わせて４，０００にも満たない。このままではギムを放棄することになるぞ!!」

ギムの町を拠点とする西部方面騎士団は歩兵２，５００、弓兵２００、重装歩兵５００、騎兵２００、軽騎兵１００、飛竜２４騎、魔導師３０。

準有事体制のため、クワ・トイネ公国軍の総力から考えるとかなりの兵力が割かれているが、国境沿いに張り付いている敵兵力はこれを遥かに凌駕している。

大日本帝国側からの増援部隊も、元は住民の避難を目的とした救出部隊であり、今この場で戦力になるのは普通科隊員約１００名のみで

ある。
　モイジが焦燥感に駆られていると、1人の騎士団員が司令室に入室する。
「失礼します。先程日本軍の部隊より、住民の避難が完了したとの報告がきました。それと……」
「それと、なんだ？」
　騎士団員は少しだけ言いづらそうに言葉を濁すが、モイジが尋ねるとすぐに答えた。
「それと……日本軍はギムの町を放棄し、後方の城塞都市エジェイまで後退することを伝えてきました。その際、我が騎士団はどうするかを尋ねてきています」
「なっ！　こ、ここを放棄するだと!?」
　候補の中には出ていた選択肢ではあるが、いざ放棄するとなると抵抗が残る。
「時間がありません。将軍、ご決断を」
「クッ……わ、わかった。我々も後退するぞ」
　モイジは城塞都市エジェイまで後退することを決断した。この事は大日本帝国側にも伝えられ、可能な限りクワ・トイネ公国軍兵士を軍用トラックへと乗せていく。乗りきらない兵士は、申し訳ないがと馬車で移動することとなった。
「住民のみならず、我々まで運んでくださるとは……誠に感謝いたします」
　車両に乗り込む前に、モイジは増援部隊の部隊長である熊田に頭を下げた。
「頭を上げてください、モイジ将軍。我々にはこれくらいしか出来ませんから」
　モイジが頭を上げ、車両に乗り込むのを確認した熊田は、無線機を手に取り指示を飛ばした。
　目標、エジェイ駐屯地……と。

～中央暦１６３９年４月１２日早朝～
クワ・トイネ公国　ギムの町　ロウリア王国東方征伐軍東部諸侯団

「クソッ！　亜人共はどこに消えたぁ!!」
ロウリア王国東方征伐軍先遣隊の任を任された副将アデムが、ものぬけの殻となったギムの町を見て、怒りに震えていた。
人一倍亜人嫌いなアデムは、この町で沢山の亜人を虐殺する予定を考えていたため、更に怒りは激しいものとなっていた。
それでも幾分かは理性が残っていたようで、副官に指示を飛ばす。
「ワイバーンを半分ほど飛ばせ!!　恐らく奴等は城塞都市エジェイに向かった筈だ!!」
指示を受け、ワイバーン７５騎が大空へと飛び立った。彼らは城塞都市エジェイへと続く道を辿っていく。
斥候の報告が正しければ、２日前までは確かにギムの町に敵の姿はあったらしい。だとすれば、敵はそう遠くまでは逃げられないだろう…そう思われていた。しかし、それから2時間程経過したとき、彼らは一向に見当たらない敵に違和感を感じた。
「おかしい……ここまで来たら、もうとっくに追い付いても良さそうなのに」
竜騎兵の１人がそう呟く。他の竜騎兵も同じ考えなのか、不思議そうに辺りを見渡している。
実はこの時、ギムの住民と西部方面騎士団を乗せた車列は途中で道を逸れ、在鍬日本軍エジェイ駐屯地へと向かった為に、ワイバーンに発見されなかったのだ。
そんなことは知らない彼らは、ひたすらワイバーンを飛ばし続けた。
「これ以上はエジェイの竜騎士団と鉢合わせするかもしれんな……引き返そう」
指揮を執る竜騎兵が指示を出そうとしたとき、先頭を飛んでいた竜騎兵が何かを指差し、叫んだ。
「おい！　あれはいったい…」

だが、その叫びが最後まで続くことはなかった。前方から槍のような何かがその竜騎兵目掛けて飛翔し、ぶつかる寸前で爆発したのだ。
爆発に巻き込まれた竜騎兵はワイバーンと共に地表へと墜落していく。
「な、なんだ今のは!!　……ッ前方から何か来る!!」
「さっきのと同じやつだ!!　回避いいぃ!!!」
さらに前方から、先程竜騎兵を落としたのと同じものが多数、こちらに向かってくるのが確認できた。竜騎兵達はすぐさまワイバーンを操り回避しようとするが、槍のようなものは軌道を変え、異常な速さでワイバーンに突き刺さっていく。
「お、追いかけてくる?!　逃げられない!!」
「くそっ!　くそっ!!」
次々と落とされていくワイバーン。僅か数分もしない内に、こちらは２０騎の竜騎兵が落とされてしまった。部隊換算すれば、既に２個部隊を失ったと言える。
「ちぃっ!　退け!　退けぇ!!」
指揮を執っていた竜騎兵は、残った竜騎兵を引き連れ自軍の陣地へと引き返していった。
その様子は、迎撃に上がった９９式戦闘攻撃機〈隼〉２機を通じて、在鍬日本軍エジェイ駐屯地司令部へと送られた。
『敵航空目標、引き返していきます』
「了解、帰投せよ」
「何とか追い返せたか……主力の到着まで後１０日、それまでは現有戦力で持ちこたえるぞ。機動科部隊と機甲科部隊には、何時でも出撃出来るよう準備させておけ」

〜中央暦１６３９年４月２４日午後〜
大日本帝国　東京都　防衛省特務作戦司令本部

ギムの町から民間人並びに西部方面騎士団が撤収し、追跡に出たワ

イバーンと迎撃に上がった９９式戦攻機〈隼〉が交戦してから、１２日が経過した。
　ここでは現在、大日本帝国軍統括司令の藤堂をはじめとした主要メンバーが集まっていた。
「現地の状況はどうなっている」
　藤堂の問いに、職員の１人が答えた。
「先程、派遣した陸軍第７師団がエジェイ駐屯地に到着したとの報告が上がりました。現在第３０１混成連隊と共に、防衛陣地を構築中とのことです。同時に、空軍の混成航空団も、エジェイ駐屯地に到着したそうです」
　その報告を受け、藤堂は増援部隊の派遣が間に合ったことに安堵する。だが安心するのはまだ早い、藤堂は気を引き締め直した。
「海軍の方は？」
「はい。派遣した第３１任務艦隊ですが、当初はマイハーク港に入港、クワ・トイネ公国海軍と合流した後に出航の予定でしたが、ロウリア王国から４，４００隻もの大艦隊が出航したとの情報が入ったため、マイハーク港へ寄らず、海上で合流した後に敵艦隊の撃退に向かいます」
「そうか……そうだ、ついでに観戦武官の派遣も要請しておいてくれ」
　了解と職員が返事をしたところで、藤堂の隣に立つ大柄な男、大日本帝国国防軍統括司令副長、芹沢（せりざわ）虎鉄（こてつ）が藤堂に声をかける。
「しかし藤堂、いくら敵の数が多かったとはいえ、艦隊に戦艦を加える必要はなかったのではないか？　この程度のレベルなら、戦闘巡洋艦でも十分だと思うが」
　芹沢が手に持つ資料に目を通しながら尋ねる。確かに４，４００隻と聞けばとてつもない数だが、その中身は斬り込み戦を想定した木造帆船である。中には大砲を搭載した戦列艦が混じっているようだが、それでも戦艦どころか旧式のミサイル駆逐艦、下手すれば海上保安庁の巡視船でも対処可能である。
「戦場では何が起こるかわからん。念には念をと思ってな」
「そうか……全く、お前と言うやつは」

藤堂の説明に、芹沢は呆れたと言わんばかりにため息をついた。
「無人偵察機からの情報によりますと、両艦隊は明日の午前に会敵すると思われます」
「そうか。何事もなければいいのだがな」
藤堂はロデニウス方面を見据え、静かに祈るのだった。

第４話―鋼鉄の艦隊―

～中央暦１６３９年４月２５日～
ロデニウス大陸近海　日鍬連合艦隊

ロウリア王国艦隊約４，４００隻の出港の報告を受け、これを撃退すべく、大日本帝国海軍第３１任務艦隊は、クワ・トイネ公国海軍第と艦隊と共に航行していた。

大日本帝国国防海軍第３１任務艦隊
伊勢型航空戦艦：〈伊勢（いせ）〉※旗艦
雲龍型航空母艦：〈雲龍（うんりゅう）〉
村雨型ミサイル巡洋艦：〈村雨（むらさめ）〉〈阿武隈（あぶくま）〉
磯風型ミサイル駆逐艦：〈磯風（いそかぜ）〉〈浜風（はまかぜ）〉〈天津風（あまつかぜ）〉〈晴風（はれかぜ）〉
クワ・トイネ公国海軍第４艦隊
カーマ級装甲艦：〈カーマ〉※旗艦
ブアラ級軽装甲艦：〈アラタ〉〈クワタ〉
ラー級駆逐艦：〈ラー〉〈ユショウ〉〈ネヨズマー〉〈プケッチャ〉

以上両艦隊合わせた戦闘艦１５隻、その他補助艦艇数隻の艦隊は、約１６ｋｔの速度でロウリア王国艦隊のいる海域へと向かっていた。
「岬艦長、旗艦〈伊勢〉より入電。本艦は先行して敵艦隊に降伏勧告を行い、可能であればそのまま引き換えさせよ。不可能であれば威嚇射撃を行い、それでも尚進行を続けるのであれば、主力到着まで敵を可能な限り押し留めよ……とのことです」
女性士官の報告を受け、艦長の岬（みさき）明乃（あけの）はゆっくりと息を吐き、命令を下した。
「了解！　機関出力上げ！　これより、本艦は先行し敵艦隊と接触する！」
明乃の号令を受け、〈晴風〉は速力４４ｋｔまで上昇し、艦隊から離れていく。その様子を確認すると、明乃は〈晴風〉に乗艦するゲスト

へと向き直った。
「大丈夫ですか？　ブルーアイさん」
「は、はい。なんとか……」
　クワ・トイネ公国海軍から観戦武官として派遣されたブルーアイ。本来であれば前衛に出ることはない〈雲龍〉か、或いは重装甲、長射程を持つ〈伊勢〉のどちらかに乗艦する予定だったのだが、本人たっての希望により、先行する〈晴風〉に乗艦することとなったのだ。
　もっとも、これはブルーアイの本心ではなく、クワ・トイネ公国政府からの要請で敵に近づく〈晴風〉に乗艦したに過ぎないのだが。
「ははっ……しかし速いですねぇ」
「はい！　本艦を含め、磯風型は新型のガスタービンエンジンを採用しており、前級の秋月型を凌駕する最高速５４ｋｔを記録しています！　勿論、性能面でも秋月型を大きく上回っており、この世界の艦艇では何百何千、或いは何万と来ようと負けません！」
　自慢げに胸を張る明乃だが、ブルーアイは今の説明で放心状態となっていた。
（さ、最高速５４ｋｔ!?　そんなのパーパルディア……いや、ムーやミリシアルでも不可能だぞ!?　大日本帝国の軍艦は化け物揃いなのか!?）
　ブルーアイの考えは、あながち間違ってはいなかった。
　旧世界の大戦時から現役で運用されるも、依然として諸外国への影響力が高い伊勢型航空戦艦。
　原子力航空母艦程ではないが、決して少なくない数の艦載機を搭載でき、主に対潜能力に特化した雲龍型航空母艦。
　優秀な対地攻撃能力を備え、安定した艦隊防空能力を持つ村雨型ミサイル巡洋艦。
　従来の艦艇を越えた５４ｋｔの速力を誇り、最新鋭の天照武器システムを搭載した磯風型ミサイル駆逐艦。
　その他にも原子力空母や伊勢型を越えた戦艦など、多数の艦艇が存在するが……それを知らないブルーアイはまだ幸せなのだろう。

～中央暦１６３９年４月２５日～
ロデニウス大陸近海　ロウリア王国東方征伐艦隊

「いい景色だ。美しい」
美しい大海原を進む、４，４００隻もの大艦隊。
その大艦隊を指揮する男、海将シャークンはその光景を眺め、呟いた。
約６年もの準備期間、列強の支援を受けてようやく完成した大艦隊。
従来の軍船を始め、魔導砲を搭載した戦列艦と呼ばれる軍船、ワイバーンの運用を目的とした竜母と呼ばれる軍船が、この艦隊には含まれている。
とはいえ、未だ従来の軍船が主力であり、戦列艦や竜母の数は少ない。
だが、文明圏外国家相手なら過剰すぎる戦力である。
「クワ・トイネ公国とクイラ王国に、この艦隊は止められまい」
シャークンの心中にある、確かな自信。彼は東の海を見据え……そして、何かを発見した。
ワイバーンではないその物体は、羽ばたくことなく此方に近付いてきた。その速度はワイバーンでは考えられない程に速い。
『こちらは大日本帝国海軍です！　あなた達はクワ・トイネ公国の領海へと侵入しています！　速やかに転進し、自国に引き返しなさい！　繰り返します！……』
その物体から女の声が響き渡る。女の声は自らを大日本帝国と名乗った。
大日本帝国……数ヶ月前に接触してきた新興国家。
外務局の話では、ワイバーンの生息しない未開の蛮族であり、例え此度の戦争に参戦してきたところで、脅威にならないというのが軍部の見解だった。
ここでシャークンは先日、ローラ第１王女と面会した時のことを思

いだした。
曰く、彼の国は中央世界を越えた技術力、経済力、軍事力を有していると。
曰く、彼の国と戦争になれば、我が国に勝ち目はないと。
曰く、彼の国に降伏する際は、白旗を掲げよと。
何故これ程の情報を持っていたのかはわからないが、上空を飛ぶ無機質な物体を見る限り、本当にそうなのではと錯覚しそうになる。
すると、付近を航行していた数隻の戦列艦から幾つもの砲弾が打ち上げられた。しかし砲弾が物体に届くことはなく、重力にしたがって落下し、その下にいた軍船に直撃して大きな穴を空け、運の悪い軍船はその穴から浸水してそのまま沈んでいくのもあった。
「な、何をやっているのだ！」
目の前で起きた惨劇に頭を抱えていると、物体は東の方向へと飛び去っていった。
あれはいったい何だったのか…その答えが出る前に、新たな情報が入った。
「シャークン海将！　前方に小さい島が見えます！」
「島だと？　この辺りに島はない筈……」
見張りの示す方向へ視線を向けると、確かに島らしきものが……いや、あれは船だ！
『最後の警告です！　速やかに引き返して！』
先程と同じ女の声が、その船から聞こえてきた。まさか先の物体はこの船から飛んできたのだろうか。
その時、敵船のもっとも近くにいた1隻の４０門級戦列艦が取り舵をとり……砲撃を開始した。
片面２０門から発射された２０発の砲弾は、警告の為に近付いてきた〈晴風〉付近に着弾した。
この時、水柱によって見えなかったが、その内の1発が〈晴風〉の側面に命中していた。しかし、それによるダメージは装甲が微妙にへこむ程度でしかなかった。
「だ、誰が攻撃命令を出した！　砲撃止め！　砲撃止め!!」

シャークンは必死に砲撃を止めさせるよう叫ぶが、既に〈晴風〉艦内では砲撃に対する答えが出ていた。
「敵の攻撃を受けた！　敵に撤退の意思なしと見ゆ！　これより攻撃を開始する！　主砲発射用意！」
明乃の指示を受け、〈晴風〉の前部甲板に設置された６５口径１２．７㎝単装砲が動きだし、敵艦へと向けられた。
「目標を捕捉！　照準よし！」
「主砲、攻撃始め！」
明乃の号令に合わせ、主砲から砲弾が発射された。
放たれた砲弾は寸分違わず目標の戦列艦へと向かっていき、そして直撃。
ロウリア王国の使う球形砲弾とは異なり、大日本帝国の砲弾はしっかり爆発する。結果、直撃した戦列艦……皮肉にも一番最初に攻撃を仕掛けた４０門級戦列艦……は大きな爆発と共に、僅かな時間で海底へと沈んでいった。
「敵艦爆沈！」
「攻撃一時中断！　敵艦隊の動きを見る！」
いっそこれで怖じ気づいて引き返してくれたら……そんな淡い希望を持った明乃だが、現実は非情であった。
「敵艦隊、依然として此方に接近中！」
「……わかった……スゥ……攻撃再開!!」
再度攻撃の号令が下り、砲撃を開始する。
〈晴風〉の主砲が砲撃を行う度に、戦列艦又は軍船が大爆発し、中には火薬庫に砲弾が命中し、木っ端微塵に吹き飛んでいく。
「敵艦隊後方より、航空目標接近！　その数１００！」
「大陸方面からも敵航空目標接近！　数は２５０！　増援のワイバーンと思われます！」
「対空戦闘！　ＶＬＳ解放！　優先攻撃目標、敵艦隊上空のワイバーン！　６式対空誘導弾、攻撃始め!!」
〈晴風〉の前後甲板に設置されたＶＬＳから、同時に８発の６式艦対

空誘導弾（史実のＳＭ―６に相当）が発射される。
　発射されたミサイルは敵艦隊上空を通過、こちらに接近するワイバーンに向け飛翔し、命中する。
「敵ワイバーン８機撃墜！」
「攻撃の手を緩めないで！　主砲、短ＳＡＭ攻撃用意！」
　音速を越えたミサイルを迎撃するために開発された６式艦対空誘導弾の前に、時速２３０㎞前後のワイバーンはいい的でしかない。
「後方よりミサイル接近！　これは……友軍の６式です！」
　〈晴風〉の上空を味方の６式対空誘導弾が通過し、敵ワイバーンへ向け飛翔していく。
「敵艦隊方面から来た敵ワイバーンの全滅を確認！　敵ワイバーン残り２００！」
「主砲、短ＳＡＭ、攻撃始め！」
　今度は主砲が、短ＳＡＭが攻撃を開始した。
　ＶＬＳから０５式短距離誘導弾が発射され、マッハ４．５の速さでワイバーンに突き刺さる。
　主砲からは毎分２５発の速さで砲弾が撃ち出され、１騎１騎確実にワイバーンを撃ち落としていく。
　そして、最後のワイバーンが落とされた。
「敵ワイバーン全機撃墜！」
「対空戦闘用具納め！　続いて、対水上戦闘用意！」
　喜ぶ暇もなく、次の行動に移る。その状況を眺めるしかできないブルーアイは、その光景に圧倒されていた。
　３５０騎ものワイバーンを一方的に蹴散らし、敵の軍艦の射程外から決して外れることのない、正確無比なアウトレンジ砲撃。
（これが、彼らの戦争……）
　自身の常識が、音をたてて崩れ落ちていくのを、ブルーアイは確信した。すると、遠くから大きな爆発音が聞こえてきた。その音は先程から聞こえている〈晴風〉の発砲音よりも大きい。
「旗艦〈伊勢〉が砲撃を開始しました」
「やっぱ戦艦はひと味違うね～」

艦橋の外を見ている明乃の視線を追いかけると、その先にはこの艦隊の旗艦であり、戦後となった今でも幾度の改修を受け現役で活躍する戦艦、〈伊勢〉の姿があった。

（戦艦、か……）

その後、合流した日鍬連合艦隊による一方的な攻撃を受け、ロウリア王国東方征伐艦隊は降伏。４，４００隻もの大艦隊は約２００隻を残し壊滅。

海将シャークンの乗船していた戦列艦は、〈晴風〉の砲撃を受け沈没、シャークンは〈カーマ〉によって救助された。

後に、『ロデニウス沖海戦』と呼ばれる海戦が幕を閉じた。

第５話―エジェイ攻防戦―

～中央暦１６３９年７月２６日～
クワ・トイネ公国　城塞都市エジェイ　西部方面師団及び西部方面騎士団

過日、ロウリア王国と緊張がまだ高まりつつあった頃。クワ・トイネ公国はロウリア王国との全面衝突に備え、国境から首都までの侵攻ルートを食い止めるべく、要所として城塞都市エジェイを設置した。

城塞都市エジェイはクワ・トイネ公国の絶対防衛圏とされており、クワ・トイネ公国陸軍の主力である西部方面師団が置かれ、その戦力は公国軍全体の５分の３にもなる戦力であり、この場所の重要性も理解できるだろう。

そんな西部方面師団も、大日本帝国との交流により、近代化が進められていた。

新たに配備されるようになった三七式自動小銃や三五式軽機関銃と呼ばれる銃火器を装備した銃装歩兵隊が設立され、来年には既存の歩兵は全て銃装歩兵となる予定だ。

その他にも、大日本帝国から輸入した三八式機動７５㎜野砲を装備した機動砲兵団や、五七式戦車を装備した戦車部隊が設立され、城塞都市エジェイの戦力は以前とは比べ物にならないほど高くなっていた。

現在の城塞都市エジェイの戦力は以下の通りである。

対地支援用ワイバーン５０騎、騎兵１，８００、銃装騎兵１，２００、弓兵５，５００、銃装歩兵３，０００、歩兵１８，０００、機動砲兵団６００、戦車部隊２００、高射部隊２００。

これに西部方面騎士団３，５００が加わり、合計３３，５００人ものクワ・トイネ公国陸軍人が、ここ城塞都市エジェイに集結した。

城塞都市エジェイの作戦司令本部では、西部方面師団の将軍ノウと、西部方面騎士団団長のモイジ以下主要幹部が集まり、会議を開いていた。

「……以上が、我々の把握している全てです」
　モイジが己の知る全てを話し終えると、ノウは小さく唸った。
「敵の数は数万を越え、我が方は日本軍を含め1万と約3，000……少し前であれば、負け戦にしかならなかっただろうな」
　ノウの呟きに、モイジ達は同意するように頷いた。特にモイジ達西部方面騎士団は、日本軍がいなければ皆殺しにされていたかもしれないのだ。
「敵の動きは？」
「はっ！敵はここより5km程離れた地点に陣地を構築しており、数日前より頻繁に敵の偵察騎が確認されております。恐らくは……」
「衝突するのも時間の問題か……」
　モイジの呟きに、司令部内が一瞬静まり返るも、すぐにその静寂をノウが振り払った。
「案ずるな、我々には新兵器が……心強い味方がおるのだぞ」
　ノウの言葉を聞いたモイジを含めた幹部達は、確かにその通りだと納得する。
　その時、司令部にエルフの男性が入室してきた。
「失礼します。日本軍の大内田将軍がお見えになりました」
「おぉ、そうか。通してくれ」
　エルフの男性が部屋を出てしばらくすると、扉が開かれ1人の男が入室してきた。
「大日本帝国陸軍第7師団、師団長の大内田です」
　緑の斑模様の服を着た男……大内田陸将を初めて見た幹部が戸惑う中、モイジとノウは大内田へと歩み寄っていく。
「大内田殿！　此度の増援、誠に感謝いたします」
「頭をあげてください、ノウ将軍。友人の危機に駆けつけるのは当然です」
「おぉ！　我らを友と呼んでくださるか！」
　目に涙を浮かべるノウに代わり、モイジが大内田に尋ねる。
「本日はどのようなご用件でしょうか」
「実は先程、我が軍の偵察機が敵の出陣を確認しましたので、その報告

と相談に参りました」
「なんと！　もう出てきたのか!?」
　ロウリア王国の早い動きにクワ・トイネ側の幹部たちはざわつき出した。時間の問題かと構えていたが、まさかその時がこんなすぐに打って出るとは思っていなかったのだ。
「して、大内田殿はどのようにお考えですかな？」
「我々は野戦特科の長距離砲撃を持って敵の大部分を殲滅し、生き残りは機甲科、機動科、普通科による追撃戦を行います。そして、その勢いに乗じてギムの町を奪還します」
　大内田の作戦内容を聞い幹部の１人が手を挙げた。
「我々は何をすればよろしいのでしょうか？」
　幹部の質問に、大内田は少しだけ考える素振りを見せてから答えた。
「……これはまだ貴国政府に通達されていないのですが……貴軍には部隊を編成していただき、ギムの町奪還後に我が軍と共同でロウリア王国の首都への侵攻を要請する予定です」
「ろ、ロウリア王国……それも首都への侵攻!?」
　これにはさすがにノウもモイジも開いた口が塞がらなかった。ロウリア王国への逆侵攻など、考えたこともなかったのだ。
「う、うまくいくのですか？」
「はい。我々はそれを実現させるに十分な戦力を保有しています。勿論、あなた方もそれを実行するだけの戦力は、既に保有していますよ」
「わ、我々も……」
　その後、大内田より詳しい作戦内容を説明された彼らは、すぐに準備を始めるのだった。
　その時がくる前に……。

～中央暦１６３９年７月２６日～
クワ・トイネ公国　在鍬日本軍エジェイ駐屯地

「これ……持ってきてたんだ……」
ある隊員が呟く。
彼の視線の先には、本土防衛用に製造され、本土から出ることは無いと思われていた兵器か鎮座していた。
『１５式自走１５５㎜電磁投射砲』。
横須賀統合軍事工場が開発したこの自走砲は、最大射程１６０㎞もの長射程を誇り、一発の威力は通常の１７５㎜榴弾約８０発分にも昇るという。
反面、補給や整備性、運用面の観点から、この自走砲の生産数は２５門までとされ、本土防衛用として国内でのみの運用が行われる筈だった。
しかし、今回の敵は総合的に見ても負ける筈がなく、帝国政府はこの戦場で１５式自走砲の試験運用を決定したのだ。
１５式自走砲５門の他、９６式自走１７５㎜榴弾砲１５門は砲門を西に向け、既に射撃準備を完了していた。
駐屯地の正門付近では、戦車大隊所属の９６式戦車がエンジンを吹かして、出撃の時を今か今かと待ち望んでいた。
そして、戦車の隣に立つ大きな影。これこそ、国防陸軍に新設された兵科、機動科の保有する人型汎用兵器『１３式機動甲冑』通称〈黒鉄（くろがね）〉である。
本来車両では通れない悪路や山岳等での運用を主としており、今回のように未知の環境での運用が行われている。
その〈黒鉄〉も現在、すでに殆どの機体が稼働を完了させており、いつでも出撃できるよう武器の最終点検を行っていた。
そんな中、１台の戦車に向かう１人の女性の姿があった。その女性は戦車の側まで来ると、車上で最終点検を行っていた女性に話しかけた。
「準備の方は大丈夫か、みほ」
「あっ、お姉ちゃん」
みほと呼ばれた女性は、戦車から飛び降り姉の下へと駆け寄った。
その表情はどこか嬉しそうでもある。

「もう出撃準備は完了したよ。後は命令を待つだけ……どうかしたの？」
「そうか……いや、一応最後にみほの顔を見ておこうかと思ってな」
その後も姉妹の仲睦まじい会話が行われた、そして……。
「西住隊長、間もなく作戦開始時間になります」
「もうそんな時間か……みほ、くれぐれむも無茶はしないようにな」
「大丈夫だよ。私達が無茶する前に、特科の人達が殆ど終わらせてくれると思うから」
２人は最後に軽く抱き合い、姉の方……西住まほは部下を連れて本部のある建物へと向かっていった。
それからすぐのことだった。
『全門砲撃開始!!　繰り返す、砲撃開始!!』

～中央暦１６３９年７月２６日～
クワ・トイネ公国　城塞都市エジェイ近郊　ロウリア王国軍東方征伐軍東部諸侯団

ロウリア王国東部諸侯団クワ・トイネ先遣隊約２万の兵は、特に敵勢力と遭遇することなく城塞都市エジェイの西側約５㎞の位置まで進軍していた。ギムの町ではいい思いが出来なかった兵士達は、エジェイでこそはと疲れを乗り越え、城壁の見える距離まで近づいていた……その時。
シュイーン……。
突然興奮していた頭が冴える。波のない湖に一滴の水滴が落ち、波紋がすぅっと広がっていくかのような不思議な感覚が、東部諸侯団を指揮するジューンフィルアの脳に痺れをもたらした。
（これは……死の予感!!）
ジューンフィルアが進軍を停止させようとした次の瞬間、隊列の中央が爆発し、土煙が上がる。その威力は凄まじく、爆裂魔法の使い手が１００人いたとしても、決してこれ程の威力は出せないであろう。

しかも、その爆発は1度だけではなく、その後も立て続けに何度も……何度も爆発が起こり、その場の土とそこにいた兵士達を吹き飛ばしていく。
「な、何が……何が起きている!!?」
現実離れしたその光景を前にジューンフィルアは叫ぶも、答える者は誰もいない。その間にも爆発は続く。
今まで共に戦ってきた戦友、歴戦の猛者、優秀な将軍、家族ぐるみの付き合いのあった上級騎士、共に強くなるために汗を流した仲間達……。
すべてが……虚しくなるほど、あっさりと死んでいく。いつの間にか爆発は止んでいたが、ジューンフィルアはそれに気付くことなく、その場に膝をついて呆然としていた。
暫くすると、東から低い唸りを上げて、角ばった体に角を生やしたものや、人とは思えないほどに大きな鋼鉄の巨人がこちらにやって来るのが見えた。
「あんなもの……勝てるわけ無いではないか……」
ふとジューンフィルアは周囲を見渡す。目に見える範囲に動く影は殆どなく、傷付いた兵士の呻き声が微かに聞こえる程度だった。
「……これまでか……降伏しよう」
その後、ジューンフィルア以下１２０名の兵士が降伏を申し出ると、大日本帝国はそれを受諾。これで、エジェイ攻防戦は幕を閉じるのだった。

〜中央暦１６３９年７月２６日〜
クワ・トイネ公国　ギムの町　ロウリア王国軍東方征伐軍本隊

丁度その頃、ギムの町に駐屯していた東方征伐軍本隊は、エジェイ駐屯地から飛び立った８７式戦略爆撃機の編隊による広域爆撃を受けていた。
冷戦時代に開発されたこの爆撃機は、約１０ｔもの爆弾を搭載で

き、場合によっては１２発の対艦ミサイルを搭載して対艦攻撃を行うことができる爆撃機である。
冷戦の集結と軍縮に伴い、稼働機数こそ減っているものの、現代でも少なくない数が運用されている。
そんな８７式戦略爆撃機の編隊１２機は、合計約１２０ｔもの無誘導爆弾を投下し、無慈悲に東方征伐軍本隊を吹き飛ばし、ギムの町の建築物を粉砕していく。
超高高度で侵入してきた爆撃機を止める術を持たない東方征伐軍本隊は、瞬く間にその数を減らしていった。
「こんなものは戦争なんかではない……只の虐殺ではないか……」
将軍パンドールは絶望の表情を浮かべ、空を我が物顔で飛び回る爆撃機を眺めていた。だが死神は彼だけを見逃すようなことはなかった。
ゆっくりと自分の人生の終わりを告げる片道切符が、あの世が近づく。
そして次の瞬間には灼熱の業火が彼を襲う。
それは一瞬の出来事だった。
将軍パンドールは光と共にこの世を去った。
将軍パンドールは戦死、ロウリア王国東方征伐軍本隊は壊滅し、生存者は偵察任務に付いていたため爆撃を免れた竜騎士ムーラ他数名の竜騎士のみであったという。

第６話―王都攻略戦―

～中央暦１６３９年８月１日～
クワ・トイネ公国　公都クワ・トイネ　政治部会

この日、軍務卿からの要請を受けたカナタは首相権限を使い、政治部会役員を集め緊急会議を開こうとしていた。議題はもちろん、対ロウリア王国戦についてである。

「大日本帝国の活躍により、エジェイは守られ、ギムの町は奪還されました。また、現在に至るまで我が国民の被害はゼロとのことです」

軍務卿が報告を終えると、会場がざわざわと騒がしくなる。ここにいる一部を除いた全員が、流石にあり得ないのではと疑心暗鬼になっているのだ。

「今から配る資料に目を通してほしい」

カナタがそう告げると、職員が議員達のもとに資料を配布していく。その資料の表紙を見た議員達の反応は様々で、大まかにいえば難しい顔をする者や興奮気味にページを捲っていく者に分けられる。

『ロウリア王国首都攻略作戦案』

その資料の表紙にはそう書かれていた。

カナタが説明を続ける。

「大日本帝国は我が国と共同でロウリア王国の王都ジン・ハークを制圧、ロウリア国王を捕らえてこの戦争を終わらせるつもりのようだ。現在城塞都市エジェイでは、ノウ将軍指揮の下、侵攻部隊が編成されている」

カナタの説明に、会場は再びざわつき始める。

「ふむ……我々にも華を持たせてくれると言うのだな」

「我が方の軍が活躍できるのか……」

「別に良いのではないか？我らからすれば得しかないのだし」

その後、政治部会は満場一致で日本の提案を受諾、城塞都市エジェイに駐屯する西部方面師団に対して侵攻部隊の出撃を指示した。

それと同時に、残された兵士達は大日本帝国陸軍第７師団隷下の施

設科大隊と共に、ギムの町の復興作業が命じられ、ギムの町はそれなりに短い期間で復興を果たしたのだとか…。

〜中央暦１６３９年８月２０日早朝〜
ロウリア王国　王都ジン・ハーク　大日本帝国陸軍第７師団及び西部方面師団

陸軍第７師団並びに西部方面師団は、特科連隊を除き、ロウリア王国北側城壁から約４km離れた位置に展開していた。
「陽動作戦で敵から見える位置まで近づかなきゃいけないとはいえ、距離４kmは流石にストレス溜まるなぁ……」
９６式戦車の車上から城壁を眺める女性……西住みほが、苦笑しながら呟く。
「地球での感覚からすれば、近すぎて緊張が絶えませんね」
「そうですね……おっ？　西住隊長、作戦指揮班から通信入ってます」
「こっちに繋げて」
そう言うとみほは首回りに装着された機械を操作し、チャンネルを繋げた。
「ＣＰ、こちら１号車、送れ」
『１号車、こちらＣＰ、１号車は前方の城壁へと接近し、敵の攻撃を誘発せよ、送れ』
ＣＰからの指示に、みほ達の動きが止まる。
「あー……ＣＰ、その命令に間違いはないか、送れ」
『こちらＣＰ、今の命令に間違いはない、送れ』
どうやら聞き間違いとかではないようだ。今の通信を傍受していた班員達が顔を強張らせている。
「……１号車了解、これより前進する。送れ」
『こちらＣＰ、前進を許可する……一部野党を納得させる（黙らせる）にはある程度の口実が必要なんだ。すまない』
「ＣＰ、こちら１号車、問題ありません。通信終わり」

通信を切ると、通信担当の班員が呟いた。
「やれやれ、野党さんもまた面倒なことを……」
「こら！　そういうこと言わないの！」
みほが軽く注意する。これだけ軽口が言えるのなら、士気に問題はないだろう。
「それじゃ、そろそろ行きますか」
「そうだね、それじゃあ……パンツァーフォー!!」
お決まりの号令と共に、９６式戦車が前進を開始する。車上から壁上を見上げると、ロウリア兵が慌ただしく動き回っているのが見えた。
「向こうは相当慌ててるみたいだねー」
「ねー……じゃないですよ西住隊長！　早く車内に入ってください!!」
「えー……まだいいじゃん」
「よくありません!!　西住隊長に何かあったら、自分等死にますよ!!わりと冗談抜きで!!」
班員達の頭の中に、鬼の形相で迫る西住まほの姿が浮かび上がる。それだけは勘弁願いたいと。
その後、近くにいた隊員がなんとかみほを車内に戻した……次の瞬間、戦車の付近に大型の矢が突き刺さった。
どうやら壁上に設置された大型弩弓バリスタから発射されたようだが、大型の矢は戦車を掠めることなく地面へと突き刺さっていく。
「当たらないね……」
「本来なら嬉しいはずなんですけどねぇ」
操縦手が苦笑しながら呟く。確かに本来なら幸運なのだろうが、今回の目的を考えると不運である。
そんな時、戦車の車上から『カンッ』と軽い音が響いた。どうやら敵は普通の弓に切り替えたらしく、先程よりも数が多い。
「攻撃を受けた！　これより一時後退する！　全速後退!!」
みほが叫ぶと、戦車は一瞬その場に止まり、急速に後方へと下がっていく。

「ＣＰ、こちら1号車！　敵の攻撃を受けた！　損害不明！　送れ！」
『こちらＣＰ、これより特科が射撃を開始する。至急退避されたし。おくれ』
「1号車了解！　通信終わり！」
　通信を切ると、いつの間にか音がしなくなった車上のハッチを開けて車上へと乗り出した。既に敵の射程距離からかなり離れたようだ。
　暫くすると、特科の９６式自走砲が放った１７５㎜榴弾が命中し、強固な城壁が音をたてて崩れていく。
　その後もしばらく砲撃は続き、大きな瓦礫は細かく砕かれ、戦車でも通れるような道が出来上がった。
「作戦指揮班から通信！　これより機甲科と機動科、並びに西部方面師団が第1城壁内部へと侵入する！　1号車は部隊と合流し、第1城壁内部へと侵入せよ……とのことです！」
「了解！　さぁ、もう一回行くよ！」
「しかし、これ……絶対特科の連中張り切りすぎたでしょ……」
　一人の隊員が、粉々に砕け落ちた城壁を見て、呟く。
「……そんなこと言わないの……」
　車内がなんとも言えない空気に支配され、1号車は後方から来た味方戦車と共に再び前進を開始した。
　丁度その頃、第1空挺団精鋭中隊を乗せた3式輸送ヘリと、その護衛の１０式対戦車攻撃ヘリが、ハーク城上空に侵入していた。
　あらかじめ作戦で定められていた場所まで移動し、ヘリから空挺隊員が速やかに降下する。
「ハーク城に侵入した。これより目標の確保に向かう」
　中隊長の中野が無線で作戦指揮班に連絡する。その後部下を引き連れ、王がいると思われるエリアへ向け前進を開始するのだった。

～中央暦１６３９年８月２０日～
ロウリア王国　王都ジン・ハーク　ハーク城　王の控え室

ハーク・ロウリア３４世は絶望していた。
屈辱的な条件を飲んだ末に受けた列強の支援。旧式とはいえ戦列艦も何十隻と手に入れ、ワイバーンもかなりの数を揃えた。５０万もの陸上戦力を揃えるのも苦労した。
だが、それらはすべて、大日本帝国というデタラメな強さを持つ国の参戦により、壊滅的被害を受けた。
４，４００隻の艦隊は先の海戦で殆どが沈められ、残りも港で日本の巨大軍船に全て沈められた。なんとか揃えたワイバーン部隊も全滅した。
あの時、大日本帝国の使者を丁重に扱っていれば……もっとあの国を調べておけば……そんな思いが駆け巡る……だが、もう遅い。
敵はもうそこまで来ている……もう、どうしようもない。
その時、部屋の扉がゆっくりと開かれた。
遂に来たかと扉の方へ視線を向けると、そこにいたのは敵の姿ではなく、無き妻が残した一人娘……ローラの姿があった。
その後ろには、護衛の兵士達の姿が見える。
「ろ、ローラ！　無事だったのか！」
ロウリア王は娘の無事を喜ぶが、ローラの表情は険しい。
何があったのかと尋ねようとロウリア王が立ち上がると、ローラの後ろにいた兵士達が剣を抜き、ロウリア王へとその剣先を向けた。
「何をする！　無礼であるぞ！」
「父上……ここであなたを拘束します」
「なっ!?」
ロウリア王はローラの言葉に言葉を失う。大事に育ててきた筈の愛娘……それが自らを拘束すると宣言したのだ。
「な…なぜ……」
「父上、もうここまでです。あなたは大日本帝国の強さを見誤った。それが軍の壊滅、大多数の兵士達の死という結果に繋がりました。これ以上の犠牲が出ないうちに、私は彼の国に降伏することを決めました」
「……そうか……そうか……」

それだけ呟くと、ロウリア王はそれ以降なにも話すことはなく、ローラが連れてきた兵士達に拘束された。
その後ローラはすぐさま王都で戦闘を行っている全部隊に戦闘の停止と武装解除を指示。王城内でもローラの息のかかった兵士達によって近衛隊の武装解除が行われる中、突入した第1空挺団精鋭中隊はというと…。
「こちらになります」
「あ、はい。どうも…」
彼らはメイドの案内を受け、王の間へと向かっていた。
「中隊長、当初の予定が大分……いや、もう殆ど意味を成していないのですが…」
「う、うーん。なんと言えばいいのやら……」
事情を知らない彼らは、当初王城内での激戦を想定した作戦を綿密にたて、いざというときの脱出プランまでもを計画していたのだが、突入と同時に目の前にいたメイドに止められ、突破しようとしたところメイドの後ろで武装解除されていく近衛の姿が目に留まり、その後メイドの説明を受けながら王城内部を進んでいた。
「こちらが王の間となります」
たどり着いたのは大きな扉の前。どうやらこの先に国王がいるのだろう。端に立っていた兵士によって扉が開かれ中野達が中に入ると、1人の女性が彼らを出迎えた。
「はじめまして、異界の勇者達よ。私はロウリア王国第1王女、ローラ・ハウリアと申します」
「御初に御目にかかります、王女殿下。私は大日本帝国陸軍第1空挺団中隊長の中野と申します」
お互いの簡単な自己紹介を終え本題へと移る。
「殿下、我々はこの戦争を終わらせる為に、ロウリア王の身柄を確保するつもりで、この場に参りました」
「事情は分かっています。父上は、この先の王の控え室にて拘束しています」
ローラの言葉を聞き、中野は数名の部下に指示をだし、王の控え室

へと向かわせた。ロウリア王の身柄を確保できれば、この戦争は速やかに終わる。
「御協力感謝します、殿下。これでこの戦争は直に終結するでしょう」
「いえ……父上を止められなかった、私にも責任はあります」
そう言うとローラはその場に跪き、ドレスが汚れるのも気にせず深々と頭を下げた。
「お願いします！　私はどうなろうと構いません。どうか……どうかっ！　国民に対する御慈悲を……っ！」
ローラの突然の行動に中野達は度肝を抜かれ、周りにいた兵士達やここまで案内してきたメイドが慌ててローラを止めようとする。しかし、それでもローラは頭を上げることなく、さらに続ける。
「私にできることなら何でもします！　首を寄越せと言うのでしたら差し上げます！　性奴隷になれと言うのでしたらこの身尽きるまで御奉仕します！　ですのでどうか……ッ！……どうか国民だけは!!!」
「姫様ぁぁあ!?!!」
「ち、ちょっと待ってください！　どうか落ち着いて!!」
その後、とんでもない事を口走りながら暴走するローラを止めようと、中野達とロウリア兵達（＋メイド）が協力して説得するという事態に陥ったが、ロウリア王の身柄が確保されたため本来の目的は達成。これにて、数ヵ月に及ぶロデニウス大戦が幕を閉じたのであった。

閑話集①
閑話―もう1つの大帝国―

～中央暦１６３９年○月□日～
グラ・バルカス帝国　通称『第八帝国』　情報局

並べられた電気式受信機に、電子音が連続して鳴り響く。現代の者がその音を聴けば、信号形式は違えど、モールス信号と間違う事だろう。

「閣下、ロデニウス大陸の情報について、現地から報告が届きました」

きらびやかではあるが、スッキリとした黒い制服の男が報告を始める。

「概要は？」

「はっ！　ロウリア王国のクワ・トイネ公国並びにクイラ王国への侵攻は、大日本帝国の介入により失敗した模様。王は失脚、齢１６歳の王女が女王として君臨し、今後は大日本帝国の傀儡国となると思われます」

「……そうか」

いつもは概要を聞くだけで納得し、仕事は部下に任せ、責任は自分が取る閣下と呼ばれた将軍が深く息をはいた。

「予言どおり……ですね」

「そうだな……まぁ、あの御方が予言において、間違えることはあり得ん話だ」

将軍は手元に置かれた紙に何かを書き込むと、それを封筒に入れて男に手渡した。

「いつも通りこれを帝王府に届けてくれ。頼んだぞ」

「はっ！　了解しました」

男は封筒を受けとると、敬礼をして部屋を退出する。それを見届けた将軍は深く椅子に座り直し、冷たくなったコーヒーを口に含んだ。

「やれやれ……次の休みはいつ取れるだろうな」

～中央暦１６３９年〇月□日～
グラ・バルカス帝国　帝都ラグナ　皇城

「この世界は我々に何を求める？」
帝王グラルークスは、まるで自問自答するように呟いた。
国ごと異世界に転移するなどという、バカげたことが現実となった。
前世界『ユクド』と呼ばれた星で、最大の勢力を誇ったグラ・バルカス帝国。
前世界では始世の国、エーシル神を祀りし『ケイン神王国』と世界を二分し、戦争を行っていた。
資源力、生産力、そして軍事力。そのどれを比べても、グラ・バルカス帝国が勝利することは、誰の目にも明らかだった。
だが、その背景には少々特殊な事情が存在していた。
それは、グラ・バルカス帝国の皇女が代々受け継いできた異能の力、『預言』と呼ばれる力によるものであった。
『予言』の力を持つ皇女の助言を受け、グラ・バルカス帝国はケイン神王国との戦争を有利に進めてきたのだ。
グラルークスには1人の娘がいた。
第2皇女ルナアーク、グラルークスの娘にして、預言の力を引き継いだ少女である。
そんなルナアークはある日、突然こんなことを言い出した。
「帝国は他の惑星に転移します……直ぐに植民地軍を本土に戻すべきです」
グラルークス初め、娘の言葉を疑った。そんなことがあり得るのかと。
しかし、娘はこんな見え透いた嘘を言う子ではないことを理解しており、グラルークスは半信半疑のまま植民地軍を随時撤収させるよう

指示した。
当然と言うべきか、議会からは反対の意見が多数寄せられたが、帝王の権限でそれらすべてを無視してきた。
議会の反乱も近いだろうと思われていたその日の深夜、グラ・バルカス帝国全域をまるで昼間のような明るさが包み込んだ。
突然のことに理解できなかったグラルークスであったが、娘の言葉を思いだしすぐさま軍部に周辺海域の調査を命じた。すると……。
・隣国の離島が消失している。
・海流の流れが変化しており、捕れる魚の種類が変わっている。
等、普通ではあり得ないことが幾つも報告として上がってきたのだ。
その後は議会を緊急召集し、臨時の会議を行ったりとバタバタしたが、結果としては娘の言う通り、帝国は他の惑星へと転移してしまったのだ。
決して少なくない数の植民地軍がユグドに取り残されてしまったが、何もしなかったらもっと多くの植民地軍が取り残されていた可能性がある。それが避けられたのは大きかった。
その時、自室の扉がノックされる音が聞こえてきた。
「お父様……私です」
「ルナアークか……入りなさい」
扉が開かれると、ルナアークが入室してきた。
まだ14歳と幼いが頭脳明晰であり、帝国軍特務参謀として活躍している秀才である。
「して、何ようか」
「……新たな預言を得ました」
ルナアークの言葉にグラルークスは硬直する。この世界でも預言の力は現役であり、先日のパカンダの時も預言があったお陰で、皇族の中では特別親しいハイラスの特別顧問としての参加を取り止めさせることができたのだ。
ルナアークは話しを続ける。
「第三文明圏に現れた転移国家……極東の島国……その名を、大日本

帝国。彼の国は我が国を凌駕する超大国である……敵対することなく、友好的に接触せよ……とのことです」
「ふむ……」
極東の島国……否、超大国。それも前世界において世界最強と言わしめた我が国を凌駕するほどの国と言われ、グラルークスの興味を引いた。
「よくぞ伝えてくれた。ルナアークの予言には、何時も助けられる」
「ありがとうございます。ですが、実はその預言に関しまして、一つ気掛かりなことが」
娘の言葉に、不思議そうな表情を浮かべながら、グラルークスが尋ねる。
「なにかね」
「はい。私は預言を得た際に、美しい金色の髪色を持つ少女と対面することが殆だったのですが……今回私が出会ったのは、異国風の顔立ちをした、黒髪の少女でした」
「ふむ……」
グラルークスは顎を撫でながら、一人考える。
金髪の少女の話は、歴代皇女の証言とも一致しているため、そこまで悩む話ではない。
しかし、今回現れたのが異国風の黒髪少女と言うのが気になってしまう。
(もしかしたら、転移したことで、預言の力にも影響が出ているのやもしれん)
そう仮説を立てたグラルークスであったが、今考えても仕方がないとして、その話を後回しにする。
そして、グラルークスが室内に設置された鈴をならすと、スーツを纏った初老の男が入室してきた。
「お呼びでしょうか」
「あぁ。直ちに極東に現れた国……大日本帝国に使節団を送り、接触せよ。預言の通りか、その力を確かめさせるのだ。場合によっては、大日本帝国との同盟も視野に入れてよい」

初老の男は驚いたような表情を見せたが、すぐにこの事を伝えるべく動き始めた。

数日後、グラ・バルカス帝国使節団は、ある程度の海上戦力を護衛につけて、大日本帝国に向けて出発した。

閑話―国内の動き―

～中央暦１６３９年８月３０日～
大日本帝国　帝都東京都　防衛省

「しかし、政府は随分と思い切った決断をしたものだな」
防衛省勤務の職員が、プリントされた書類に目を通しながら呟いた。

・既存艦隊の再編成
既存の艦隊編成では費用面等多くの問題でこの世界の紛争／戦争への対処が難しく、艦隊の再編成は急務である。

・補給艦等の補助艦艇の増量
ロデニウス大戦時の輸送力の低さを問題とされ、補助艦艇の増量。

・陸軍の増員
新世界では覇権国家の存在が多く確認され、海外派遣の可能性が高まることから、現在の９個師団６個旅団体制から、１２個師団１０個旅団体制へと増量。

・新型機動甲冑の開発
新世界では今後、超大型魔獣との戦闘が予想され、全長１５～２０ｍクラスの機動甲冑を要する。

・核兵器の再配備
自国と同程度の技術力を持った敵対国が現れたときの抑止力として、核兵器制限条約にて失った核兵器の再配備を行う。

この他にも多くの項目が存在し、そのどれもがすぐには難しいような内容であった。
「これらすべて終えるのに、どれだけ時間がかかることやら……」
職員は１人、深く溜め息をついた。

～中央暦１６３９年９月１日～
大日本帝国　帝都東京都　首相官邸

ロデニウス大戦が終結してから暫くしたある日、大日本帝国政府はこの世界の世界情勢についてを確認していた。
「国連や赤十字のような国際組織が存在せず、国際法に類似したものは列強間でのみしか適応されていないとは……」
手に持った資料を読みながら、今村は目元を押さえて深く溜め息をついた。他の閣僚も似たようなもので、全員が溜め息をついていた。情報源は主にロデニウス大陸に出稼ぎで来ていた商人達であったが、似たような報告が相次いだため、その情報が正確であると仮定して話を進めていた。
「これは可及的速やかに、国際協力組織を立ち上げる必要があるかと思われます」
「しかし、我が国が転移してから、まだ1年も経過していません。先のロデニウス大戦も、諸外国から見れば文明圏外国家同士の小競り合い程度にしか思われていないようです」
５０万人以上の死傷者を出した大戦が、たかが文明圏外国家というだけで、単なる小競り合いとしか見られていないというこの世界の常識に、今村内閣の閣僚全員が再度深い溜め息をついた。
その後も会議は続いたが、現状ではどうにもならないとの結論を出し、次の議題へと移っていった。
「現在海軍では、既存艦隊の大規模な再編成を行っており、有事に備えて2個臨時戦隊を編成しておりますが、暫くは海上防衛力の低下は避けられません」
「陸軍でも現在、人員の増員に伴った駐屯地の新設や装備の増量、新隊員の教育等を行っておりますが、それらすべてを終えるには少なくとも後3年は必要です」
「同じく空軍では、対地上攻撃用の新型攻撃機を開発中です。ですが、予算の関係上、〈隼〉から〈疾風〉への更新が進んでおりません」
陸海空軍各幕僚の報告を受け、今村は難しい表情を浮かべた。
「陸軍で時間が必要なことはあらかじめ想定されていたことなので問題はありません。空軍に関しましても、この世界では旧式化し始めた

〈隼〉でも十分通用するので暫くは大丈夫でしょう。ですが……やはり海軍は難しいですね」
　大日本帝国は海に囲まれた海洋国家である。その為、貿易の殆どが海運であり、いざというときに国防海軍が動けないのは痛手でしかなかった。
「戦隊の編成は？」
「はい、戦隊は金剛型戦闘巡洋艦1隻又は雲龍型航空母艦1隻、村雨型巡洋艦1隻、磯風型駆逐艦4隻の計6隻で編成されております」
「それは……厳しいですな」
　2個戦隊合わせて12隻、それだけでは、大日本帝国の広大な領海全てを護ることは不可能である。
　一応、動かそうと思えば他の艦艇を動かすことは可能ではあるのだが、やはりそれでは効率が悪すぎる。
「もう少し増やせませんか？」
「不可能です。既に殆どの艦が移動を開始しており、今からではなんとも……暫くは海保や空軍の哨戒機が頼りになります」
「負担が大きすぎます。海保だって、少なくない数の巡視船が、ロデニウス大陸本面に派遣されているのですよ」
　その後、会議は深夜まで続くのであった。

閑話―王国の再興―

～中央暦１６３９年○月□日～
ロウリア王国　王都ジン・ハーク　ハーク城

「本当ですか!?」
ここは、ハーク城内に置かれた前ロウリア王の一人娘、現ロウリア王国女王ローラの執務室。現在ここには、王国の内政を請け負う各大臣達が集まっていた。
ロウリア王国内閣府、内閣総理大臣に任命された男性リュイが報告する。
「はい。彼の国大日本帝国は、先の戦争で捕虜となった海将シャークン氏を始め、将官のみならず全ての兵士を、条件付きではありますが、返還する用意があるとのことです」
その言葉を聞いたローラは、嬉しそうに頬を綻ばせた。他の大臣達も、嬉しそうな表情を浮かべる。
それもそうだ。彼らの中には、戦争に参加して帰ってこなかった家族や兄弟がいる者もいる。帰ってきてくれるかもしれないと、期待が膨らんだのだ。
「しかし条件ですか……一体どのような条件ですか?」
大臣の一人が尋ねる。それを聞いた他の大臣達の視線が、リュイへと注がれる。
「お手元の資料１３Ｐをご覧ください」
各々が事前に配られていた資料を手に取り、ページを捲っていくと、そこには大日本帝国側からの条件が記載されていた。

①ロウリア王国は、クワ・トイネ公国及びクイラ王国との関係改善に努めること。
②ロウリア王国は、国内に大日本帝国軍の駐留を認めること。
③ロウリア王国は、大日本帝国が新たに発足する連合組織へと加盟し、第三文明圏全体の平和維持活動に貢献すること。

④ロウリア王国は、連合組織加盟にあたり、既存の陸海空軍その他軍事組織を新編すること。その際、生産や建造等が起動に乗るまでの間、兵器や弾薬類は大日本帝国並びにクワ・トイネ公国、クイラ王国が負担する。

⑤ロウリア王国は……。

「それでは、皆さんの意見をお聞かせください」

一通り読み終えたローラが、大臣達に話しかけた。

「これはまた、なんとも……」

「他国の軍隊を招き入れることは、到底認められるものではありません」

「まぁ、土地に関しても租借と言う形ではありますが、問題はその期限です。１００年というのはどうも……」

難しい顔をする大臣達。それもそうだろう。

他国の軍隊を自国に招き入れて、いい気分はしないだろう。史実の日本国でも、在日米軍基地問題等、いろいろとあったのだから。

だが中には、前向きに捉えられる者……主に若手大臣達がいた。

「現在我が王国軍は殆どが壊滅状態であり、新編事態はそこまで難しくはありません」

「兵器等は連合組織加盟国は全て統一し、補給や製造を容易にですか……まぁ、そこまで悪くはないと思われます」

「ここは、彼の国を信じてみるのもよろしいかと」

「……わかりました」

こうしてロウリア王国政府は大日本帝国側の条件を受諾。捕虜となった将兵は返還され、ロウリア王国の再建に従事することとなった。

あれから時は流れ……。

～中央暦１６３９年○月□日～
ロウリア王国　王都ジン・ハーク　ハーク城

「ここも、ずいぶん変わりましたね」
ローラはリュイ総理と共に、ハーク城の窓から変わり行く街並みを眺めていた。
石畳の道は繋ぎ目のないコンクリートの道路へと代わり、石造りの家も新しく日本式の家へと立て替えられているところがちらほらと目に入る。
水道技術や電気技術も導入され、夜になれば街灯が、夜の王都ジン・ハークを明るく照らす。
他にも、新しく新編された新生ロウリア王国警備軍では、クワ・トイネやクイラにも配備されてると言う自動小銃や戦車、野砲といった機械兵器が王都の陸上警備軍基地に配備され、大日本帝国からの軍事顧問団によって実用化され始めている。
海軍は名前を海上警備軍と変え、鋼鉄製の軍船……軍艦が配備され始めていた。
先日も、新たにクワ・トイネから、カーマ級装甲艦を元に建造された装甲艦〈パンドール〉が1隻配備された。自国でも建造できるようになるらしいが、それがいつになるかはまだわからない。
流石に航空警備軍はまだ時間がかかるようだが、それは仕方がないだろう。そもそもクワ・トイネ公国やクイラ王国でもまだ航空機の数が足りないのだとか。

そして、日本側から条件として提示されていた軍の駐留だが、何とか海に面した土地を提供することができた。
そこには自国の軍港を凌駕するほどの規模の軍港が建てられるそうだ。いずれは連合組織、大東亜共栄圏の連合艦隊が拠点とするのかもしれない。
「陛下、そろそろお時間です」
「わかりました、今向かいます」

リュイの言葉を受け、ローラは最後に街並みを一眺めした後、部屋を後にするのだった。

第2章　列強パーパルディア皇国

第7話―フェン王国と軍祭―

～中央暦１６３９年９月２日～
フェン王国　首都アマノキ

武士の国、フェン王国。この国に魔法はない。
この国では国民全員が、必修教育として剣を学ぶ。
剣に生き、剣に死ぬ。どんなに見下されるような出生でも、強い剣士は尊敬され、どんなに見た目が良くても、剣が使えない者、弱い者はバカにされる。
所謂、実力至上主義の国である。
和風な建築物が建ち並ぶ首都アマノキに、大日本帝国の使節団は訪れていた。外交官の島田は、いつも以上に落ち着いた態度を心がける。
「なんというか……身が引き締まるな」
国中の空気が張りつめているような、厳格な雰囲気が漂っている。まるで『武士の治める国』、というのが使節団職員の持った感想だった。生活水準は低く、国民は貧しい。しかし精神の発達は高く、誰もが礼儀正しい。日本の武士道のようなものがそこにはあった。
その後、使節団は王城の一室へと案内される。
「剣王様が入られます」
側近が声をあげ、襖を開いた。使節団の職員は立ち上がって礼をする。
飾らない王、それが剣王シハンに対する最初の印象だった。
（……隙がないな）
陸軍から派遣された護衛の小林1等陸尉は、剣王の身のこなしから、かなりの実力者であることを見抜いた。もし仮に剣王の相手をするのなら、空挺団員や上級レンジャー隊員でないと勝ち目はないだろう。

「そなた達が、大日本帝国の使節か」
「はい…貴国と国交を締結したく、参りました。ご挨拶として、我が国の品をご覧下さい」
剣王と側近達の前には、様々な品が並ぶ。
日本刀、着物、お椀、扇、運動靴…。
シハンは日本刀を手に取り、鞘から抜いた。
「ほう、見事な剣だ。貴国にも優秀な職人がおられるようですな」
気をよくしたシハンは、大陸共通語で書かれた文書を確認し、大日本帝国からの通商条約締結における提示条件と、書類に間違いがないか、口頭でも確認していった。
「……失礼ながら、私はあなた方の国、大日本帝国とやらをよく知らない。しかも、国ごとの転移などは、とても信じられない気分だ」
「それは、我が国に使者を派遣していただければ」
「いや、我が目で確かめたいのだ。貴国には海軍なる水軍があると聞いた」
「ええ、確かにありますが……」
「その中から艦隊を作り、親善訪問として我が国に派遣してくれぬか？今年は我が国の水軍から廃船が４隻出る。それを敵に見立てて攻撃してみてほしい。要は力が見たいのだ」
「そ、それは……わかりました、本国に問い合わせてみます」
この事は直ぐに本国外務省にありのままを報告された。

～中央暦１６３９年９月２５日午前～
フェン王国　首都アマノキ

今日はフェン王国が５年に１度開催する軍祭が行われる日。多くの文明圏外各国の武官も多数参加し、武技を競い合い、自慢の装備を見せる。各国の軍事力を見せることで、他国を牽制する意味合いもある。
そんな中、沖合には各国武官の乗ってきた帆船とは異なる異質な船

が浮かんでいた。

大日本帝国臨時親善訪問艦隊
村雨型ミサイル巡洋艦：〈村雨〉※旗艦
磯風型ミサイル駆逐艦：〈天津風〉〈太刀風（たちかぜ）〉
ひまわり型巡視船：〈なのは〉〈さくら〉

力が見たい、と言うシハンの要求を聞いた大日本帝国政府が悩みに悩んだ末に派遣された、海軍と海上保安庁の連合艦隊である。
「あれが大日本帝国の戦船か……まるで海に浮かぶ城だな」
シハンの感想に、武将マグレブが頷いた。
「私も何度かパーパルディア皇国へ行ったことはあり、その際に彼の国の戦船を見たことはあります。しかし、これ程の大きさの船は見たことありません。まして、金属製など初めてです」
彼らの視線か海軍の軍艦を捉えていた所に、配下の武士が声をかけた。
「剣王様、間もなく我が国の廃船に対する、大日本帝国の戦船からの攻撃が始まります」
剣王シハンが直々に日本の使節団に頼んだ『日本の力を見せてほしい』という依頼。その回答が今、示される。
訪問艦隊のさらに沖合いに、フェン王国の廃船である４隻が、標的船として浮かんでいた。
距離は艦隊から４kmも離れている。シハンは望遠鏡を覗きこむ。今回はムラサメと呼ばれる船が攻撃を行うらしい。
〈村雨〉の前部甲板に搭載された、７０口径２０．３cm単装速射砲が旋回を始める。
レーダーで標的との距離を正確に計測し、砲の初速、弾道をコンピューターが正確に割り出す。砲安定システムにより、揺れる海上においても砲身を安定させ、主砲が寸分違わず標的をとらえる。
ダンッ…ダンッ…ダンッ…ダンッ…。
４回、振り分けられた目標の数と同じ数の音だけが鳴る。

直後、標的船は木っ端微塵になり、海面から水しぶきを上げ、船の残骸が空を舞った。
標的船４隻は原型を留めないほど爆散し、わずかな時間で轟沈した。
「……凄まじいな、これは」
「そんなバカな!!」
「信じられん!!」
シハン以下フェン王国の中枢は、自分達の攻撃概念とかけ離れた威力を目の当たりにして、唖然としていた。
「如何でしたでしょうか。我が帝国海軍の実力は」
「島田殿……直ぐにでも貴国と国交を開設する準備に取りかかろう。不可侵条約はもちろん、安全保障条約も結ばせてもらいたい」
「わかりました。後日詳細をお伝えします」
「感謝する……因みに聞いてみるが、あの戦船の技術を、一部でもよいから我が国に輸出してもらうのは無理だろうか」
シハンは訪問艦隊の方に目をやり尋ねた。
流石に無理だろうとフェン王国の中枢達は考え、シハン自身もいい答えは聞けないと思っていた。
「中核的技術に関しましては、新世界技術流出防止法によって不可能ですが、旧式の装備に関しましては輸出が可能です。現在はロデニウス大陸に殆どを輸出しているため、暫く時間は掛かってしまいますが」
「なんと！　それはまことか!!?」
シハンは断られると思っていたため、素直に驚いた。日本の武器兵器があれば、例えパーパルディア皇国に攻められたとしても、少なくとも負けることはなくなるだろう。日本と安全保障条約が結ばれれば、勝つことだってあり得る。
「おや?あれは……」
ふと島田が上空を見上げて呟いた。
シハンもつられて上空を見上げると、こちら……王城に向かって急降下を開始するワイバーンロードの姿が目に入った。

「い、いかん!!」
隣国ガハラ神国に風竜が住み着いているため、この付近にワイバーンは寄り付かない。軍祭に参加している各国がワイバーンを連れてきたと言う報告はない。
次の瞬間、10騎のワイバーンロードが放った火球が王城の天守に着弾し、木造の王城が炎上する。
「なっ!?」
突然の事態に驚愕の声を上げる島田、護衛である小林もいきなりの襲撃に驚くも、速やかに艦隊へと無線を飛ばしていた。
そこに、シハンのもとに1人の武士が駆け寄ってきた。
「報告します！　あのワイバーンの所属が判明しました！　あれは……パーパルディア皇国の竜騎士団です！」
その光景は艦隊の方でも確認していた。
「天ノ樹城炎上！」
「いきなり攻撃だと!?　一体何が起きている！」
「国籍不明ワイバーン10騎！　〈なのは〉に急速接近……っ攻撃しました！　〈なのは〉被弾!!」
「なんだと!?　くそっ、対空戦闘開始！　〈なのは〉を守れ!!」
直後、〈村雨〉〈天津風〉〈太刀風〉の主砲が上空を向き、ワイバーンロード目掛けて発砲した。
〈なのは〉を襲ったワイバーンロード10騎は瞬く間に全騎撃ち落とされ、天ノ樹城を襲ったワイバーンロードが仇と言わんばかりに艦隊へと突撃するが、3隻から放たれる対空砲火を抜けることができずに全滅した。

〜中央暦1639年9月25日〜
パーパルディア皇国　皇国監査軍東洋艦隊

フェン王国王宮直轄水軍を難なく沈めたパーパルディア皇国監査軍東洋艦隊は、フェン王国首都アマノキを目指して進んでいた。

空は快晴。比較的乾いた風が気持ちいい。
「……!?」
提督ポクトアールは遠くの水平線に何かを見つけ、望遠鏡を構えた。それと同時に、頭上の見張員が声を上げた。
「艦影と思われるものを発見！　こちらに接近してきます！」
城のように大きく、おそらく船と思われる物体。だが、それは常識から考えると規格外な大きさだ。
（な、なんてデカさだ！　しかも速い！）
正体不明の巨大船はパーパルディア皇国監査軍東洋艦隊に接近すると、艦首を反転させ、並走しながらなおも近づいてきた。それもたった1隻のみで。
「提督、どうしますか？」
副官に問われたポクトアールは冷や汗を流していた。少なくとも、あの船はパーパルディア皇国の同盟国の艦ではないだろう。民間船でないことも確実だ。
おそらく敵と思われる艦は1隻のみ、いずれにせよフェン王国方面から来たのだ。フェンの関係国所属艦に違いない。
列強パーパルディア皇国の意思を示すため、ポクトアールは攻撃を決意した。
「砲撃用意！　あれとの距離1．5kmで砲撃を開始せよ!!」
ポクトアールの指示を受けて、魔導砲の砲撃準備が行われる。列強の魔導砲は2kmの長射程を誇る。1．5kmまで近付けば、それなりに当たる距離だ。
敵の船と思われる巨大な艦1隻は、並走しながら距離を1．5kmまで詰めてきた。
敵の巨大砲は前を向いたままである。
「阿呆め。魔導砲、撃てぇぇぇ!!」
フェン王国王宮直轄水軍を、赤子の手を捻るが如くあっさりと葬り去った列強パーパルディア皇国監査軍東洋艦隊戦列艦22隻は、大日本帝国海軍ミサイル巡洋艦〈村雨〉に牙を剥いた。

「敵艦発砲！　砲弾は……命中しません！」
弾道計算が速やかに行われ、砲弾が命中しないことを確認する。
パーパルディア皇国監査軍の一斉射は命中することなく、海面に着弾し付近に水柱を上げた。
「最大戦速！　主砲発射用意！　目標は、敵戦列艦の動力であるマストを狙え！」
「了解!!」
〈村雨〉の前部甲板に搭載された２０．３㎝単装砲が動き出す。砲安定システムで砲を安定させ、戦列艦のマストに照準を合わせた。
「目標捕捉！　照準よし!!」
「撃ち方始めっ!!」
射撃指示と同時に、主砲から砲弾が発射された。発射された砲弾は正確に戦列艦のマストに命中し、折れたマストが海面へと落下していく。
更に砲撃を続く。１隻、また１隻とマストを破壊していき、僅か数分で敵艦隊の半数である１１隻を航行不能にした。
暫くすると敵艦隊は航行不能になった戦列艦を曳航して、来た方向へと戻っていった。
「……ふぅ、退いてくれたか」
〈村雨〉艦長の島（しま）　大悟（だいご）の言葉に、乗員達も安堵の表情を見せる。
「これで一安心ですな」
「あぁ……これより艦隊と合流する」
〈村雨〉は親善訪問艦隊と合流すべく、進路を来た方向へと戻した。
大日本帝国とパーパルディア皇国の初の海戦は、大日本帝国側の圧勝で終わった。パーパルディアの艦隊に重傷者は出たものの、当世界の歴史上唯一『死者を出さずに勝敗を決した海戦』となり、有名となった。
この海戦は『フェン沖海戦』と呼ばれ、後世に語り継がれることとなる。

～中央暦１６３９年９月２５日午前～
フェン王国　首都アマノキ

話は同日昼まで遡る。
パーパルディア皇国のワイバーンロード部隊を軽々と片付けた、大日本帝国国防海軍。その力を見て、軍祭に参加した文明圏外各国の武官は、放心状態となっていた。
「な……なんだ！　あの凄まじい魔導船は!!」
「列強のワイバーンロードが、まるで相手にならなかったぞ!!」
自分達の常識とかけ離れた力を持つ灰色の巨大船に恐怖を覚えると共に、味方に引き入れることはできないかと皮算用を始める。
フェン王国がパーパルディア皇国の領土租借案を蹴ったと聞いたときは、フェンが焼き尽くされるのではないかと誰しもが思ったが、あの船の国と友好関係にあるのであれば、フェンが強気に出るのも理解できた。
パーパルディア皇国以上の国が現れたかもしれない。その認識のもと、各国の武官は魔信で本国に報告するのだった。
『フェン沖海戦』の後、大日本帝国にやってくる時代がかかった船が増えていくことになった。国交締結を求める文明圏に属さない国々の大使たちを乗せて日本まで来訪したのである。そのせいで海上保安庁は国防海軍に協力を要請して、２ヶ月ほどは日夜問わずに巡視する羽目になった。
今までは日本側から各国まで出向き、現地を調査してから国交を申し込んでいたが、今回は大使たちが詳細な資料を携えていたために手間が省け、次々に国交を結んでいくことができた。どうやら各国間で情報共有がなされているそうだ。
彼らは友好的で礼儀正しく、概ね国交締結に支障はなかった。
その後、第三文明圏外国家群（ロデニウス大陸国家、フェン王国、トーパ王国等）では、日本を中心に第三文明圏外国家群の共存共栄が掲げられ、それは後に大東亜共栄圏と呼ばれることとなったという。

第８話ー大帝国の接触ー

～中央暦１６３９年１０月１８日～
ロデニウス大陸南西部　近海

穏やかな波と暖かく気持ちのいい風が吹く海域で、ロウリア王国海上警備軍第１海上警備艦隊と、先日異動が完了した大日本帝国海軍第８艦隊による合同演習が行われていた。
本来予定されていたより多くの艦艇が大日本帝国側より格安で提供されたことにより、ロウリア王国の海上戦力は瞬く間に回復へと向かっていったことが、今回の合同演習のきっかけの１つとも言えた。
本来であればクワ・トイネ公国とクイラ王国も参加する予定だったのだが、両国の都合により不参加となっている。

大日本帝国国防海軍第８艦隊
金剛型戦闘巡洋艦：〈摩耶〉〈鳥海〉
雲龍型航空母艦：〈滅龍〉※旗艦〈極龍〉
村雨型ミサイル巡洋艦：〈鈴谷〉〈熊野〉
磯風型ミサイル駆逐艦：〈原風〉〈北風〉〈夕風〉〈村風〉〈陸風〉〈坂風〉
ロウリア王国海上警備軍第１警備艦隊
カルロス級飛竜搭載母艦：〈カルロス〉※旗艦
カーマ級装甲艦：〈パンドール〉〈ホワート〉
ブアラ級軽装甲艦：〈ラーク〉〈メビウス〉
ラー級駆逐艦：〈ロバリオ〉〈ロングレー〉〈ロンデン〉〈ロイ〉

大日本帝国国防海軍第８艦隊司令の水野屋は、〈滅龍〉の艦長に話しかけた。
「カルロス級飛竜搭載母艦、通称竜母か……最初に聞いたときは驚いたものだ」
「同感です。ですが、一概に不要とも言えないものですね」
そもそもロデニウス大陸各国で建造されている空母は第二次世界

大戦までに大日本帝国海軍が保有してきた正規空母の資料を下に建造されている。空母とは航空機を運用することを想定した軍艦であって、ワイバーンの運用を想定していない。ワイバーンは生物であることに変わりはなく、下手に扱おうものなら体調不良で飛べなくなることもあるそうだ。

幸いというべきか、ロウリア王国はかつてパーパルディア皇国からの支援を受けており、その中には竜母に関する情報も含まれていた。

その情報と正規空母の資料を照らし合わせて建造されたのが、カルロス級竜母である。

制空権が確保されている状況で木造船相手であれば、爆弾を数発しか搭載できない艦上爆撃機よりも、何度も火炎弾を発射できるワイバーンの方が効率がいいのだ。

とはいえ、艦上爆撃機が不要かと聞かれれば、そうではない。

いずれは世界各国も木造船ではなく、鋼鉄製の軍艦を扱うようになるだろう。そのときに備え、早い段階で艦上爆撃機の配備は必須であった。無論、艦上攻撃機もである。

今後の課題は、空母と竜母をどう使い分けるかとなるだろう。そう考えていた、その時だった。

「水上レーダーに感あり！　方位２３０！　数およそ２３！　速力１６ｎｔにて接近中!!」

「全艦第１種警戒体制!!　航空隊は発艦準備!!　ロウリア艦隊にも伝えろ!!」

レーダー員の報告を受け、水野屋はすぐさま艦隊に指示を飛ばした。

現在日ロ両艦隊がいる海域はロウリア王国の領海内であり、現在航行規制が掛かっている海域でもあった。

「ロウリア艦隊旗艦〈カルロス〉よりワイバーン３騎、発艦します！」

水野屋の視線の先、〈カルロス〉からワイバーンが３騎上がっていくのが見えた。

ワイバーン３騎は上空で編隊を組むと、所属不明艦隊のいるであろう方向へ向け飛んでいった。

～中央暦１６３９年１０月１８日～
ロデニウス大陸南西部　近海　旗艦〈カルロス〉飛竜隊所属第３飛竜小隊

〈カルロス〉飛竜隊所属の第３飛竜小隊ワイバーン３騎は、大日本帝国第８艦隊から送られてきた方角を警戒しながら飛んでいた。
「小隊長！　敵はなんだと思われますか!?」
新米竜騎士の質問に、小隊長のムーラは少し考えてから答えた。
「まだ敵だと決まったわけじゃないぞ。それより！　お前たちは逸れないよう、しっかり俺について来い！　わかったか!!」
「了解!!」
新米竜騎士たちの返事を聞いて、ムーラは再び考え始めた。
（しかし、一体どこの国だ？文明圏外国家なら通達してあるから近寄らないだろうし……まさか、パーパルディア皇国が!?）
ムーラが最悪を想定して顔を青ざめたとき、新米竜騎士の１人が声を上げた。
「小隊長！　前！　前!!」
「っ!?」
我に返ったムーラが前を注視すると、こちらに向かう３つの黒点が確認できた。
相手の姿が確認できる距離まで来ると、新米竜騎士だけでなくムーラも驚愕に目を見開いた。
「戦闘機だと!?　しかも、我が国で運用予定の艦上戦闘機に似ている!!」
接近してきた物体は、大日本帝国からの技術支援を受け製造している次期主力艦上戦闘機に酷似していた。
所属不明機はムーラたちの近くまで来ると、速度を落として飛行する。
「し、小隊長！」

「狼狽えるな！　どうやら敵対の意思は無さそうだ！」
ムーラはいきなり戦闘に突入することはなさそうだと胸を撫で下ろした。もしも戦闘となった場合、時速５００㎞を超えた飛行機械相手に、ワイバーンでは対処できないのは目に見えている。
その後も所属不明機はこちらを攻撃するような素振りを見せず、それどころかこちらを誘導するかのような飛び方をしていた。そして……。
「小隊長！　前方に艦影！　数は２３！　戦艦空母含む大艦隊です!!」
新米竜騎士が指差す方角を見ると、そこには戦艦や空母を含んだ大艦隊が、ロデニウス方面へ向け進んでいた。特に中央の戦艦はロデニウス大陸国家で建造されている戦艦よりも巨大に見える。
すると、周りの戦闘機が一隻の戦艦へと向かい、その戦艦を中心に飛び始めた。
「戦艦か……よし。俺はあの戦艦に降りる。お前たちは上空で待機しろ！」
「了解！」
新米たちを上空に残し、ムーラは単身中央の戦艦へと向かう。ロウリア王国竜騎士団の中でも数少ない垂直離着陸（艦）が行えるムーラは、難なく戦艦の後部甲板へと降り立った。
そこへ、武装した軍人に護衛された一団が近づいてきた。
「初めまして。私はロウリア王国海上警備軍所属の竜騎士ムーラと申します。当海域は我が国の領海です。貴方達の目的をお聞きしたい」
「私はグラ・バルカス帝国極東派遣団代表のシエリアと申します。こちらは副官のダラスです。我々の目的は、この先にあるとされる大日本帝国へと向かうことであり、意図せずとはいえ貴国の領海を侵犯したことは謝罪します」
聞き覚えのない国名に首を傾げるムーラだが、すぐに自分の職務を遂行すべく動き出す。
この事は至急大日本帝国政府へと伝達され、グラ・バルカス帝国極東派遣団は大日本帝国国防海軍の監視を受けながら、大日本帝国本土

へと向かうのだった。

〜中央暦１６３９年１０月２０日〜
大日本帝国南東部　旧太平洋海域

帝王グラルークスの特命を授かったグラ・バルカス帝国極東派遣団を乗せた護衛艦隊は、大日本帝国とロウリア王国の艦艇に続いて航行していた。
途中、第８艦隊はロウリア王国内に建てられた朝日基地へと帰ってしまったので、今目の前にいるのは横須賀基地を母港とするミサイル駆逐艦〈晴風〉と〈雪風（ゆきかぜ）〉である。
護衛艦隊の旗艦である〈グレード・アトラスター〉の艦橋で、艦長のラクスタルと数人の参謀・幹部、そしてシエリアとダラスが、目の前に映る艦隊について考察していた。
「海軍の専門家として、両国の艦艇を見た感想は？」
シエリアがラクスタル達に尋ねると、若手幹部が答えた。
「まずロウリア王国の艦艇ですが……竜母はともかく、その他３種類の軍艦は我が国と同程度の性能があると推定されます。もし戦うのであれば、航空隊による飽和攻撃が妥当かと思われます」
「そうか、では大日本帝国の軍艦はどうだ？」
「はい。戦艦こそ保有しているようですが、主砲が３０㎝クラスと、オリオン級でも対処可能です。また、巡洋艦は砲を１門しか搭載しておらず、その意図が読めません。ですが、空母に関しては脅威です。このグレード・アトラスターと同等の船体を有していますから、その搭載量は我が国の正規空母並と予測されます。相手するのなら、圧倒的航空戦力護衛の下に戦艦を軸とした艦隊決戦が有効かと」
若手幹部の言葉に、熟練参謀が首を横に振った。
「そうとも言い切れません。大日本帝国の艦艇には見たことのない装備が複数見受けられます。彼らはおそらく、砲以外にもなにか強力な兵器を保有しているのかもしれません」

「まさかそんな……」
若手幹部が否定的な言葉を呟く中、シエリアは先日のことを思い返していた。
本国を出発する前日、彼女は外務省事務次官であるバルゲールに呼び出されていた。
彼曰く、大日本帝国は祖国を凌駕する力を持ち、彼の国との国交開設は祖国のためであり、敵対は祖国の終焉を意味するという。しかもそれは皇族であり、預言の力を持つルナアーク皇女殿下のお言葉であると。
（果たして、本当に我が国を凌駕するほどの力があるのか……？）
軍事にあまり詳しくないシエリアだが、大日本帝国の艦艇には違和感を覚えていた。
戦艦はともかく、巡洋艦の主砲が１３０㎜クラスと小口径であり、たった１門しか搭載していない。これでは命中率はあまり期待できないのではないだろうか。
そんな彼女の思考は、見張員の報告により止まることとなった。
「ぜ、前方に陸地を発見！　恐らく、大日本帝国の本土であると思われます！」
報告を受け、隣に立つ艦長のラクスタルは双眼鏡を覗き込み、そしてその動きを止めた。
「艦長……？」
「……」
シエリアが声をかけるも、ラクスタルは微動だにせず、ただ双眼鏡を覗き込んでいた。
そんなラクスタルを不審に思ったシエリアだったが、陸地へ近づいていくにつれて、彼が微動だにしなくなった意味を理解した。
自国の帝都以上に栄えた町並み、１００ｍ以上もの高層建築物群、そしてなにより、軍港と思われる区域に停泊する艦艇群が、シエリアたちを待ち受けていた。
大日本帝国国防海軍は有する横須賀基地。そこにはグラ・バルカス帝国極東派遣団を誘導してきた巡洋艦（〈晴風〉と〈雪風〉）と同クラ

スの巡洋艦が多数停泊しており、中には先日見た物よりも巨大な超大型空母も停泊していた。そんな中、一際目立つ戦艦の姿があった。

その戦艦の名は、〈大和（やまと）〉。

大日本帝国国防の要であり、最新の技術を多く搭載した彼女は、他にはない圧倒的な破壊力を有している戦艦である。

「……我々は、一体何処に来てしまったのだろうか……」

シエリアの問いに、誰も答えることができなかった。

第９話―日グ交渉―

～中央暦１６３９年１０月１８日～
大日本帝国　横須賀基地

大日本帝国に到着した〈グレード・アトラスター〉含む艦隊は、誘導に従い軍港へと停泊した。
「それでは行ってくる。艦長、留守は頼んだぞ」
「お任せください。お気をつけて」
ラクスタルと参謀幹部たちに見送られ、シエリアはダラスを含む数人の技術者や護衛と共にタラップを降りていく。降りた先には、青い斑模様の服を着た軍人と思われる集団に護衛された、スーツ姿の男が待っていた。
「初めまして、私は外交官の真壁と申します。ようこそ大日本帝国へ。心より歓迎致します」
「ご丁寧にどうも。グラ・バルカス帝国極東派遣団代表のシエリアです。突然の訪問を受け入れて下さり、感謝します」
まずはお互いの自己紹介から始まった。
「長旅でお疲れでしょう。ホテルの手配をさせていただきました。本日はそちらでお休みになった後、明日の朝９時より帝都東京までご案内致します」
シエリア達は真壁の案内を受け、横須賀市にあるホテルで宿泊することになった。
その日の夜、シエリアはホテルの一室にダラス達を集めて話し合っていた。
「お前達はこの国をどう見る？」
シエリアの問いに、同行した技術者が答える。
「まだ初日ですので多くは言えませんが、我が帝国の技術力を遥かに超えていることは確かでしょう。自動車の性能、道路交通インフラ、数百ｍ超えの高層ビル群、どれをとっても我が国を凌駕してます」
「軍事力に関してですが、正直まだなんとも……我が国のグレード・ア

トラスターを超える超巨大戦艦を保有しているにも関わらず、巡洋艦はたった1門の主砲しか搭載していないのが気がかりです。また、港に停泊していた超巨大空母は脅威です。少なくとも、１００機近く艦載機を搭載できるのではないでしょうか？」

技術者の報告を聞き、シエリアは腕を組んで考える。確かに超巨大戦艦には驚いたが、それだけで帝国の軍事力を上回るとは思えなかった。

「失礼ですが、ルナアーク様の預言が外れたということは……」

「貴様！　ルナアーク様を愚弄する気か!!」

軍人の1人の発言に、ダラスが怒鳴り散らした。彼は良くも悪くも皇族盲信者である。ルナアーク様の預言は神の声であると言わんばかりの言動が目立つが、あながち間違えではないので黙認されている。

「ダラス、少し冷静になれ。そんな調子だと明日の会談に障るぞ」

「はっ、失礼しました」

「しかし、この国はつくづく不思議だ。やはりこの国も、我が国と同じく転移国家なのだろうな」

翌日、ホテルを出発した一行は新幹線と呼ばれる高速列車に乗り、大日本帝国の首都東京へと向かった。

「おぉ、何という都市だ」

「横須賀と呼ばれる都市も凄かったが、ここは更に凄いな」

車へと乗り換えたシエリア達は、東京の町並みに圧倒されながら会談の場所へと到着した。

「お疲れ様でした。間もなく担当の者が参りますので、こちらでお待ちください」

応接室へと案内されたシエリア達は、会談へ向け気合を入れ直した。そこへ、数人のスーツを着た人達が入ってきた。

「お待たせしました。大日本帝国外務大臣の国平です」

「極東派遣団代表のシエリアです」

まさか外務大臣が出てくるとは思わなかったシエリアは驚きを顔に出さないように自己紹介を行い、会談へと映った。

「我が国は貴国、大日本帝国との安全保障条約を含む、国交開設を考えております」
「そうですか。ですが、貴国と我が帝国ではかなり距離が離れておりますが…」
「問題ありません。必要とあらば、国内に貴国の租借地を作ることも視野に入れています」
「なぜ、そこまで我が国に拘るのでしょうか」
「それが、皇帝陛下の御意思であり、ルナアーク様の願いですから」
その後、大日本帝国とグラ・バルカス帝国との間に安全保障条約を初めとした各種条約の締結が行われ、更に大日本帝国側から一部通信技術をグラ・バルカス帝国へ提供され、両国間の連絡を容易化していった。

第１０話―アルタラス王国―

～中央暦１６３９年１１月５日～
アルタラス王国　王都ル・ブリアス

フィルアデス大陸南方に位置する島国、アルタラス王国。第三文明圏外側に位置するため文明圏外国家に分類されているが、国内に世界有数の魔石鉱山を有する豊かな国で、人口およそ１，５００万人を抱える等、通常の文明国並みの国力と文明水準を持つ、文明圏外国家の中では最強クラスの大国である。

そんなアルタラス王国の王城アテノール城の一室にて、国王であるターラ１４世が苦渋に満ちた表情をしていた。

「これは……正気か？」

そう呟いた彼の持つ外交文書には、普通では考えられないようなことが書かれていた。

パーパルディア皇国から毎年送られてくる要請文であるが、『要請』とは名ばかりの命令文書であるのが現実だ。

ターラ１４世は再び外交文書に目を通す。

・アルタラス王国は魔石鉱山シルウトラスをパーパルディア皇国に献上すること。

・アルタラス王国王女ルミエスを奴隷としてパーパルディア皇国へ差し出すこと。

以上の２点を２週間以内に実行することを要請する。出来れば武力を使用したくないものだな。

この要請文に、ターラ１４世は頭を抱えた。

魔石鉱山シルウトラスはアルタラス王国最大の魔石鉱山であり、王国経済を支える大鉱山である。これを失えば王国経済は大打撃を受け、国力の低下は免れない。

更に王女ルミエスの奴隷化。これに関してはパーパルディア皇国

に全く利益が無いものであり、明らかにアルタラス王国を怒らせるためだけにあるようなものだ。どう考えても戦争に持ち込もうとしているようにしか思えない。
　パーパルディア皇国の先代皇帝が崩御した後、現皇帝のルディアスは国土の拡大、国力増強を掲げて各国に献上を迫っているのは知っていた。だが、毎回指定されるのは無難な場所であったり、双方に利益がある場合が多い。
　また、皇帝ルディアス本人もかなりの手腕の持ち主であり、このような下劣な要求をしてくるようには到底思えなかったが、このような要請文が届いている以上、その認識を改める必要があった。
　今まで屈辱的とも言えるパーパルディア皇国からの要請の数々を受けてきたが、今回の内容はアルタラス王国に全くの利益が存在しない。全く意味がわからない。
　ターラ１４世は外務大臣を連れてパーパルディア皇国第３外務局アルタラス支部へと出向き、事の真相を確かめる事にした。
　パーパルディア皇国第３外務局アルタラス支部に到着すると直ぐに大使の下まで案内された。
「待っていたぞ、アルタラス国王！」
　パーパルディア皇国第３外務局アルタラス支部大使カストが椅子に座り、足を組んだ状態でターラ１４世を呼びつける。
（なんと無礼な……）
　ターラ１４世は憤りを抑えながら話し始める。
「あの文書の真意を伺いに参りました」
「その内容のとおりだが？　それともあれか？　皇帝陛下の意思に逆らうとでも？」
　カストは何を当たり前のことをと言うかのように手を広げ挑発する。
「逆らうなど、とんでもない。では、我が娘のルミエスの事ですが、何故このようなことを？」
「あぁ、あれか。王女ルミエスは中々の上玉なのだろう？俺が味見をするためだ」

「「……は？」」
一瞬意味を理解できなかったターラ１４世と外務大臣を見て、カストは酷く厭らしい表情で答えた。
「俺が味を見てやろうというのだ。まぁ飽きたら淫所にでも売り払うがな」
カストの発言に、ターラ１４世から表情が消えた。
「……それも、ルディアス陛下の御意思なのですか？」
「あぁ!! なんだ!? その反抗的な態度は！ 皇国の大使である俺の意思は即ち！ ルディアス陛下の御意思だろうが!! 蛮族風情が！ 誰に向かって口を利いていると思っているのだ!!」
ターラ１４世は無言でカストに背を向ける。
「おい！ 話は終わってないぞ！ 無視するな！」
カストから発せられる罵声を一切無視して、ターラ１４世は大使室を後にした。

「あの馬鹿を皇国へ突き返せ！ わしの直筆はいらん、外務省から国交を断絶すると伝えよ！ 我が国での皇国の資産も凍結しろ！」
怒りの収まらないターラ１４世は、文官、武官を全員集め、吠えるように次々と指示を飛ばす。
既に要請文と大使の態度を伝え聞いていた政務官たちも、国王と同じように激怒していた。王室の忠義に厚い彼らは、たとえ列強相手でも断固として戦い抜く覚悟を決めていた。
さらに、この要請文の内容が国民にも公表されたことで、国民感情が反皇国派へと急激に傾いていった。
「外務大臣、急ぎ大日本帝国の外交官を呼んでくれ。必ず彼の国の力が必要となる」
「かしこまりました」

～中央歴１６３９年１１月１１日～
大日本帝国　東京都　首相官邸

アルタラス王国外務省からの要請に対し、緊急会議が開かれていた。
「パーパルディア皇国はこの地域を支配する列強と呼ばれる国家です。現状は外交官を派遣している状態であり、下手に応じて即開戦なんてなれば国民からの突き上げも懸念されます」
「だが同盟国を見捨てるなんてなったら、それこそ国民が現政権から離れていくぞ」
「総理、ここは同盟国への技術提供を強め、各国の軍事力の引き上げを行っては如何でしょうか」
「駄目だ。それだけじゃあの国の数に押されかねんぞ」
「各国の現状は、良くても重巡が完成した程度であり、戦艦や空母の就役にはまだ時間が掛かるぞ」
「ではどうする？　このままだとアルタラス王国が陥落する恐れがあるぞ」
「ではいっそ、合同演習を名目に艦隊を派遣。アルタラス島近海を警戒させ、アルタラス王国に対する武力行使が確認でき次第、安保条約に基づく行動に移させると言うのはどうでしょうか」
「なるほど、悪くはないな」
「だが、それで国民が納得するかどうか……」
会議が始まってから、既に一時間が経過した。各々の意見がぶつかり合い、そして遂に、今村は決断を下した。
「アルタラス王国の要請を受理、海軍のみ派遣を決定します。ですが、パーパルディア皇国に派遣している外交官はそのまま交渉を継続させてください。念の為、外交官の護衛に、特戦群の派遣を行います」
「特戦群をですか!?」
特戦群……正式には特殊作戦群と呼ばれる彼らは、大日本帝国軍の誇る特殊部隊であり、任務成功率は驚異の１００％を誇る、国内最強の部隊である。
「彼らなら、例え少数でも外交官を護衛できます」
「そうですな……パーパルディア皇国に派遣した外交団に連絡してお

こう」

こうして、大日本帝国はアルタラス王国海軍との合同演習を名目に佐世保基地に配備されている第４艦隊を派遣することを決定した。

それから一週間後、第４艦隊はアルタラス王国へ向け出航した。それと同時に、アルタラス王国王女ルミエスが武装商船タルコス号に乗船し、大日本帝国を目指して出航したのだった。

第11話―列強ムー―

～中央暦１６３９年１１月１７日～
第二文明圏　列強ムー
大日本帝国政府がパーパルディア皇国との武力衝突に備えている頃、遠く離れた第二文明圏最強の国、列強ムーに二組の来訪者の姿があった。
一組は白地に赤丸の描かれた旗を掲げる白い船に乗ってやってきた国家、『大日本帝国』。
もう一組は、短期間で列強レイフォルを滅ぼした未知の国家、『グラ・バルカス帝国』。
謎の多い２ヵ国の来訪に、ムー国政府は非常事態宣言を発令すると同時にムー統括軍に出動待機命令を下した。

～中央暦１６３９年１１月１７日～
列強ムー　空軍基地アイナンク空港

技術士官マイラスは、軍を通じて伝えられた外務省からの急な呼び出しに困惑していた。
上司からは行けばわかる、とだけ説明を受けているマイラスは、通された控室で呼び出された意味を考える。
（まず思いつくのは大日本帝国とグラ・バルカス帝国だが……しかし、なぜ空軍基地に呼ばれるんだ？）
大日本帝国とグラ・バルカス帝国の船がムーに来ていることは知っているマイラスだったが、だとすれば余計に疑問が残る。
呼び出された場所は空軍基地が併設されているアイナンク空港であり、なぜ軍港ではないのか、と。
マイラスが窓辺に立ってぼんやりと考えていると、控室の扉が開かれ、３人の人物が入ってきた。
１人はマイラスの上司である人間種の男性で、他の２人は外交用礼

服を来た人間種の男性だった。
「待たせたね、マイラス君……彼が技術士官のマイラス君です。我が軍1の技術士官であり、この若さにして第1級総合技将の資格を持っています」
「初めまして、技術士官のマイラスです」
慣れない笑みを浮かべて、マイラスは2人の外交官と握手を交わす。
「かけたまえ」
一同はそこそこ上等そうなソファに腰掛け、上役らしき外交官が話を切り出す。
「なんと説明しようか……今回君を呼び出した理由は、とある国の技術水準を探ってほしいのだよ」
「それは、大日本帝国とグラ・バルカス帝国のことですか？」
頷く外交官を見て、マイラスは先日のことを思い出した。
今亡き列強レイフォルの首都、レイフォリア襲撃の際に魔写（魔導写真撮影）された、グラ・バルカス帝国の超大型戦艦『グレード・アトラスター』。
ロデニウス沖海戦直後に魔写された、空母と戦艦を掛け合わせたような大日本帝国の軍艦『イセ』。
その2隻の分析を担当していたマイラスは、この時点で2ヵ国がムー以上に発達しているのではと考察していた。
更に外交官の話によると、この2ヵ国は機械動力船でやって来て、飛行機械までも実用化しているらしい。
今回は大日本帝国の飛行機械で一緒にやってきたらしいが、その飛行機械は時速３８０㎞と自国の最新鋭戦闘機マリン以上の速さで飛べるらしく、先導した空軍パイロットに「空戦したら勝てるか」と聞いたところ、「負けるとは思わないが、勝つのも難しい」と答えたそうだ。
「会談は1週間後に行われる。それまでの間に、我が国の技術力の高さを見せつけると同時に、両国の技術水準を探ってほしい」
「……わかりました、やってみます」

このところ情報分析ばかりだったマイラスは、久々に技術者魂が震えるのを感じた。
そして、マイラスは逸る気持ちを抑え、早足で空港東側へと向かっていった。

～中央暦１６３９年１１月１７日～
列強ムー　ホテル

「なんという技術だ……っ!!」
本日何度目かになるセリフを呟くマイラスは、今日見た出来事を思い出していた。
まず始めに、マイラスは大日本帝国の飛行機械を調べるために格納庫へと足を運んだ。
そして、格納庫に鎮座する大日本帝国海上保安庁のヘリコプター、あきたか1号を見て冷や汗を流した。
「一体どれだけの出力が必要なんだ……こんなもの、今のムーじゃ実現は不可能だ」
空軍詰め所の応接室へ向かうマイラスの足取りは、先程と比べて重かった。
「どうなることやら……」
マイラスは内心不安を抱えたまま、大日本帝国とグラ・バルカス帝国の使節が待つ応接室の扉をノックした。
――コンコン。
「どうぞ」
ゆっくりと扉を開けると、異なる軍服を着た2人の人間種の男性と、外交用礼服と思われる服装を着た人間種の男女が出迎えた。
「初めまして。会談までの1週間、ムーをご紹介させていただきます。マイラスと申します」
出来るだけ丁重に挨拶するマイラスに、外交官と思われる男女が返答する。

「大日本帝国外務省より参りました、御園です。今回はムー国をご紹介頂けること、大変嬉しく思います。こちらは国防省より派遣された護衛の前原です」
「私は、グラ・バルカス帝国外務省より派遣された外交官のシルビアです。こちらは軍部より派遣された護衛のベック。どうぞよろしくお願いします」
　文明圏外の国とは思えないほど、落ち着いた態度と丁重な言葉遣いに、マイラスは少しだけ安堵する。
「長旅でお疲れでしょうから、本格的にご案内するのは明日からとして、本日はここ、アイナンク空港をご案内した後に、首都にあるホテルへとご案内します」
　そう言って、マイラスは御園たちを連れてアイナンク空港を案内した。
　途中、整備中の最新鋭戦闘機マリンを紹介したところ、両者からは……。
「複翼機ですか。このレトロな感じが素晴らしいですね」
「我が国では数年前まで現役でしたので、あまり懐かしさはありませんが……いい機体なのはわかります」
　との評価がされていた。
　どうやら両国にとって複翼機は時代遅れの産物であり、大日本帝国にいたっては１００年以上昔の骨董品の価値しかないらしい。
　しかも、話を聞けば大日本帝国の戦闘機は音速を超えるようで……頭が痛くなってくる。
　明日は歴史資料館と海軍基地を案内する予定となっているが、はたして両国にどれだけ反応を与えられることやら……。
「……よし、もう寝よう」
　軽い現実逃避をしながら、マイラスは布団へと潜り込んだ。

〜中央暦１６３９年１１月１８日〜
列強ムー　海軍基地

早朝から移動を始めたマイラスたちは、数時間かけて海軍基地へと辿り着いた。
「ご覧ください。こちらに停泊しているのが、戦艦ラ・カサミとその同型艦であるラ・エルドです。既に旧式の艦艇に分類されていますが、依然として艦隊の主力を担っている艦艇になります」
マイラスが示す先、前弩級戦艦に分類される艦艇が２隻、停泊していた。
一行は更に進む。
「そして、こちらが我がムー統括海軍の保有する最新鋭戦艦、ラ・チエゴになります！」
マイラスが自身を持って紹介したのは、先程のラ・カサミ級よりも一回りも大きい戦艦だった。
４４口径３０．５cm連装砲を背負式で４基搭載し、２０mm機銃をハリネズミのように設置したその戦艦に、御園たちは「ほぉ……」っと声を漏らした。
「弩級をすっ飛ばして超弩級かぁ。でも主砲は３０cmクラスかな？」
「魔法文明が支配するこの世界で、よくこれほどの成長が出来ましたね」
思っていたより薄い反応に、マイラスはふと報告書の内容を思い出す。
「東のことをお聞きしますが、確か貴国らも戦艦を保有していると、第３国経由でお聞きしたのですが」
嘘である。
この男、諜報員が上げた報告書で知ったのである。
「えぇ。我が国には最強と名高いグレード・アトラスターを始め、３０隻以上の戦艦を保有しています」
グレード・アトラスター。
列強レイフォルを単艦で滅ぼした戦艦だけでも脅威なのに、それに近い戦艦が３０隻以上も存在すると考えたマイラスは軽い目眩を感じた。

「そ……それは凄いですね……大日本帝国はどうでしょうか？」
「はい。我が国は７０年以上前から現役で活躍する伊勢型戦艦と、近年建造された大和型戦艦、合計４隻を保有しています」
御園の説明に、マイラスは小さく安堵する。
いくら技術水準がムーより高くとも、戦艦の保有数が少ないなら脅威度は低いと考えたのだ。
だが、そんなマイラスの思いは破られた。
「でもあなた方にとって、戦艦の保有数なんて関係ないじゃないですか」
「ええ、まぁだいたい戦艦の射程に入る前に、対艦ミサイルで終わりますからね」
「た、対艦みさいる？」
聞いたことのない兵器に首を傾げるマイラスに、御園が簡単に説明する。
「要は誘導式のロケット弾です。最大射程は大体２００km前後になるので、主砲は主に自衛用として扱われます（大和型のは自衛用の域を越えてるけど）」
「に、２００km……そ、それはとんでもないですな……」
自身の常識を逸脱した情報に、マイラスは考えるのをやめた。
「そ、それでは、次は歴史資料館をご案内します……」
一行は軍港を離れ、歴史資料館へと向かう。

～中央暦１６３９年１１月１８日～
列強ムー　歴史資料館

ムーのあらゆる歴史が集まる歴史資料館。
ロビーの休憩スペースを陣取り、マイラスが説明を始める。
「まず始めにお伝えすることがございます。他国にはなかなか信じてもらえないのですが、我々のご先祖様はこの星の住人ではありません」

「「え？」」
　御園とシルビアの驚いた声が重なる。
「遡ること1万2千年前、大陸大転移と呼ばれる現象が起こりました。これにより、ムー大陸の殆どがこの世界に転移しました。当時の記録も、この歴史資料館に保管されています」
　そう言ってマイラスは、地球儀を取り出して机の上においた。
「世界が球体であることはご存知ですよね。これは前世界の「地球だ！」……え？」
「ちきゅう？」
　シルビアが首を傾げ、マイラスが驚きの表情を浮かべる中、御園は地球儀に釘付けになる。
「これは……地軸の位置が少し違うのか？　む、南極大陸がこの位置にある？」
「え、ええ。この大陸は『アトランティス』と言いまして、ムーとともに世界を二分するほどの力を持った国家でした。ムーがいなくなった今、おそらく全世界を支配していることでしょうね」
「少しよろしいでしょうか？」
　御園がマイラスの解説に割って入った。
「我が国を紹介するのに、一番いい方法があります」
「はい？」
　前原がバッグから2冊の地図を取り出し、御園に手渡した。
「我が大日本帝国も転移国家です。同一次元にあった星かは不明ですが、おそらくあなた方が昔いた星から転移してきたものと思われます。因みに、この4つの島が我が国になります」
　御園が指差した4つの島が集まった場所を見たマイラスは、地球儀と地図を何度も見直しながら目を見開いた。
「こ、この国は『ヤムート』と言いまして、我が国一の友好国だったそうです。いや、まさかそんな……」
「我々の元いた世界にも、『1万2千年前に突如として海に沈んだ大陸がある』と、言い伝え程度ですが残されています」
　御園とマイラスの視線が交差する。

「は……はは……あなた方大日本帝国とは、個人的には友好国になりたいものです……この後直ぐに、上に報告します」
「私も、同じ気持ちです」
この歴史的大発見が、後に大日本帝国とムーの関係を良い方向へと導いていくこととなる。

因みに……。
「別に……仲間はずれが寂しいとか……全っ然思ってませんけど？……グスッ」
その後、歴史資料館の一室で、シルビアに対して必死に頭を下げる御園とマイラスの姿があったとかなかったとか。

第12話―ムーとの会談―

～中央暦1639年11月24日～
列強ムー　首都オタハイト　外務省応接室

ムー国外務省の応接室にて、3国による会談が始まろうとしていた。
「初めまして、ムー国外務省のオーディグスと申します。以後、お見知りおきを」
マイラスは、今回の会談に列強担当部課長が出席したことに驚いていた。
「本会談が、3国にとって良いものであることを願います。まず始めに、我が国への来訪目的を教えて下さい」
オーディグスも理由はわかっていたが、公式の場での記録と、確認の意味合いを込めて尋ねた。
「我々大日本帝国は、多くの国家との友好関係を望んでいます。貴国と友好関係を築きに参りました」
「わかりました。大日本帝国に関しましては、こちらでもお話を聞いております。ですが……」
オーディグスの視線が、シルビアに向けられる。
「我がグラ・バルカス帝国も同様です。現在我が国と友好関係にあるのは大日本帝国のみ。友人は多いに越したことはありませんから」
「それでは、何故レイフォルを攻め滅ぼしてしまわれたのか、ご説明願えますかな？」
シルビアは少しの間を開けて、ゆっくりと口を開いた。
「まず始めに謝罪を。これから話す内容の一部には、守秘義務が課せられていますので」
「わかりました。その辺りは考慮いたします」
「ありがとうございます……それではお話します」
そして遂に、シルビアの口から真実が告げられる。
グラ・バルカス帝国と列強レイフォルの間に、何が起きたのか……。

〜〜

この世界に転移してから、1ヶ月が経過した日のことでした。

まず始めに、グラ・バルカス帝国はパルス王国との接触に成功しました。

パルス王国では丁重な対応を受けましたが、まずは列強であり宗主国であるレイフォルとの関係を構築するよう依頼されました。

これは後に判明したことですが、当時のパルス王国は、独自の外交権を持っていなかったそうです。

次に帝国は、列強レイフォルへと訪れましたが、窓口で追い返されてしまったそうです。

彼の国曰く、文明圏外国家はパガンダ王国を通せ、と言われたそうです。

そして最後に、列強レイフォルと衝突する切っ掛けとなった国、パガンダ王国と接触しました。

帝国がパガンダ王国を通さずにレイフォルに直接交渉に行ったことに腹を立てたらしく、帝国を「礼儀を知らない下等な蛮族」と罵り、莫大な賄賂を要求してきました。

それに対して、帝国使節団の代表がたしなめたところ、パガンダ王国は「下等な蛮族が列強レイフォルの筆頭保護国であるパガンダ王国を侮辱した」として、帝国使節団の代表を不敬罪で即日処刑。同行していた女性外交官を人質に……帝国に対して非常識な額の賠償金を請求してきました。

一連の出来事に私はもちろん、帝国臣民は激しい怒りを感じ、パガンダ王国との戦争に踏み切りました。

帝国の誇る精強な陸海軍は、僅か7日でパガンダ王国全土を焦土と化し、パガンダ王国は滅亡しました。

そして、パガンダ王国を滅ぼした帝国に対してレイフォルが宣戦布告、戦争状態に入りました。

戦争とは言っても、実際に行った戦闘は2回、戦艦グレード・アトラスターとレイフォル艦隊による海戦と、同戦艦によるレイフォリアへの艦砲射撃だけになります。
その後、生き残ったレイフォル軍部が無条件降伏し、レイフォルは滅亡することとなりました。
〜〜

「以上が、帝国がレイフォルを攻め滅ぼした経緯となります」
シルビアの説明が終わり、静寂が応接室を支配する。
理由を尋ねたオーディグスも、どう声をかけるかを悩んでいた。
(これは……自業自得、としか言えないだろ)
保護国の管理を怠ったレイフォル側に失態、というのが、その場にいる全員の感想だった。
「では、貴国も初めは戦争を起こすつもりは無かったと?」
「はい。我が帝国も、当初は平和的外交での交流を模索していました」
「……わかりました。このことは上に報告させて頂きます……ところで、人質となっていた女性外交官は、無事に救出されたのですか?」
オーディグスの質問に、シルビアは唇を小さく噛み締め、震える声で答える。
「人質にされていた女性は……パガンダ王族に酷い辱めを受けていたらしく……救出された数日後に……自殺しました」
「それは……大変失礼いたしました」
オーディグスは表情を歪め、深く頭を下げた。
すると、これまで静かにしていたベックが、小さい声で御園たちに伝える。
「自殺した女性外交官は、シルビア様の実の姉君でした」
「っ!?」
実の姉が酷い辱めを受けて自殺した。
それが一体どれ程の苦痛であるか……想像するだけでも、御園は胸が締め付けられるような気持ちになる。

「……本日の会談はここまでにしましょう……シルビア殿、今日はゆっくりとお休みください」
「ズッ……すみません……失礼します」
ベックに連れられ、シルビアが退室する。
その後ろ姿を見送った大日本帝国とムーの代表は、深く息を吐いた。
「……あれに比べたら、我々はどれ程恵まれていたのかを痛感します」
大日本帝国が転移当初に接触したクワ・トイネ公国とクイラ王国。
温厚な国民性の両国と早い段階で友好的な国交を結べた大日本帝国は、グラ・バルカス帝国に比べれば遥かに恵まれていただろう。
（今の話は列強間で共有せねば。決して、グラ・バルカス帝国側に全ての非があった訳ではないと）
オーディグスは、心の中で決意を固めた。
「さて、本日の会談も終わったことですし、御園殿もお休みになられては如何ですか？」
「そうですね。それでは我々もそろそろ……」
失礼します、と言いかけたところで、前原の持つ無線機に通信が入る。
「失礼……私だ……あぁ、今終わったところだが……なに、それは本当か!?　……分かった。直ぐに伝える」
何やら焦りを見せる前原に、御園とオーディグスは怪訝な表情を浮かべる。
「何かありましたか？」
御園の質問に、前原は一度深呼吸をして答えた。
「本国からの緊急連絡です。つい先程、アルタラス王国沖合にて、我が国の艦隊と第三文明圏の列強、パーパルディア皇国の艦隊が、武力衝突を起こしたそうです」

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　大日本帝国海軍第４艦隊

時は、少しばかり遡る。
アルタラス王国の要請を受けて派遣された国防海軍第４艦隊１２隻は、白い航路を引いてアルタラス王国海軍との合流地点へと向かっていた。

☒大日本帝国国防海軍第４艦隊☒
伊勢型航空戦艦：〈扶桑〉※旗艦
雲龍型航空母艦：〈白龍〉
村雨型ミサイル巡洋艦：〈球磨〉〈那珂〉〈広瀬〉〈多摩〉
磯風型ミサイル駆逐艦：〈追風〉〈松風〉〈涼風〉〈夏風〉〈江風〉〈時津風〉

「はぁ、不幸だわ」
第４艦隊司令長官の高嶋は、己の不幸を呪った。
「司令、口は災いの元。本当に不幸になりますよ」
「これ以上の不幸があるとでも？」
〈扶桑〉艦長の荻原に窘められた高嶋が、ムッとした表情で睨みつける。
「はぁ、何でよりによって第４なのよ……第１と第７も、再編は終わっているでしょう？」
「大和型や飛龍型を組み込む艦隊が、そう簡単に本土から離れるとは思えませんが」
「……わかってるわよ」
虚ろな視線を彷徨わせる高嶋に、荻原は深い溜息をつく。
「司令たちは相変わらず……ん？」
高嶋と荻原のやり取りを聞いて笑っていた観測官は、レーダーに映る光点に目が止まる。
（おかしい、合流地点はまだ先の筈だが……まさか!?）
光点の正体に気付いた観測官が大声で報告する。
「レーダーに感あり！　その数１００……いや、１１０……１２０……まだ増えていきます！」

「全艦、第一種警戒配置！」
素早く高嶋が指示を飛ばし、乗員が各々の配置に移動していく。
「ほら、現実になった」
「煩いわね、全く……」
高嶋は帽子を深く被り、前を見据える。
「駆逐艦『松風』に打電。先行して艦隊の所属を確認させなさい」
「了解（普段もこの調子なら良いのに）」
こうして艦隊は、着実に準備を勧めていく。

第１３話―列強との衝突―

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　洋上

晴れた空、暖かく南国を思わせる積乱雲が広がり、風は殆ど無い。
海は凪であり、海鳥たちがのんびりと浮かんでいる。
そんな平和な海を多数の船が白い航跡を引き、南西方向に向かっていた。
パーパルディア皇国『皇軍』主力第５艦隊である。
中央世界を基準とすると、東側に位置する第三文明圏において、他に追従を許さないほどの圧倒的戦力。
１００門級戦列艦を含む砲艦２１１隻、竜母１２隻、更に揚陸艦１０１隻を加えた合計３２４隻の艦隊は、アルタラス王国を滅するため、南西方面へと向かっていた。
「間もなく、アルタラス王国軍のワイバーン飛行圏内に入ります」
水兵からの報告に、将軍シウスは海を眺めたまま頷く。
戦略家であり冷血、無慈悲な将軍と言うのが、部下たちのシウスに対する評価であった。
「まだ来ぬか……対空魔振感知器に反応が出たら、竜母から１００騎程を発艦させ、艦隊上空の直掩に当たらせろ。以後の指揮は各大隊長に任せるが、深追いはするな」
ワイバーンを視覚外で発見するために開発された『対空魔振探知機』に反応があれば、ワイバーンロード隊を発艦させるよう指示を出す。
アルタラス王国艦隊は、既に皇軍から約１７㎞先の水平線に目視できる距離まで迫っている。まだ距離があるので、戦闘に突入するまでは時間がかかる。
最小の被害で最大の効果を。シウスは決して敵を侮ることなく、船影の彼方を睨みつけた。
「対空魔振探知機に反応！　アルタラス王国軍のワイバーン約１２０

騎を探知！」
　レーダー員から報告が上がる。
「ようやくか……事前の指示通り、行動を開始せよ！」
　シウスの命令を受け、各竜母からワイバーンロードが発艦していく。
　アルタラス王国とパーパルディア皇国の初戦は、上空で始まろうとしていた。

～中央暦１６３９年１１月２４日～
　アルタラス王国北東海域　アルタラス王国北方沿岸警備竜騎士団

　アルタラス王国北方沿岸警備竜騎士団長のザラムは、配下のワイバーン１２０騎を率いて、北東方面に展開するパーパルティア皇国皇軍第５艦隊に一撃を加えるため、編隊を組んで飛行していた。
『全小隊に通達！　事前の指示通りに散会し、突入せよ！　各個撃破に気をつけろ！　各小隊、士長の指示に従え！』
　アルタラス王国竜騎士団は散会し、パーパルディア皇国皇軍第５艦隊へと向かっていく。
「おかしい……敵のワイバーンロードは何処だ？」
　異変に思ったザラムは、直ぐに気付くことができた。
「しまった！　上だ……ッッ!!」
　対空魔振探知機にかからないよう低空から近付いたことが仇となり、積乱雲に隠れてワイバーンロードが迫っていた。
『上空斜め後方！　太陽を背に突っ込んでくるぞ！　総員回避行動に移れ!!』
　咄嗟にザラムが指示を飛ばすが、既に発射体制に入っていたワイバーンロードから導力火炎弾が発射され、すれ違いざまに約６０騎のワイバーンが撃墜されてしまう。
「畜生っ!!」
　ザラムは必死に食らいつこうとするが、速度差もあり追いつけな

い。
　それを理解しているワイバーンロード隊は、一撃を加えたら速やかに離脱し、距離を取ってから再び上昇して急降下、導力火炎弾を発射してワイバーンを撃墜していく。
　その後すぐにザラム自身も導力火炎弾に焼かれて絶命、僅か３０分ほどでアルタラス王国竜騎士団は全滅した。
　皇軍のワイバーンロード隊の損害は、ゼロであった。

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　アルタラス王国海軍連合艦隊

　アルタラス王国海軍の全軍艦を掻き集めた連合艦隊を率いる海軍長ボルドは、竜騎士団の全滅を聞いて拳を握りしめた。
「早いな……もう全滅してしまうとは……」
　部下に不安を見せまいとするボルドだったが、内心は不安に満ちていた。
　敵は砲艦だけでも２００隻を越える大艦隊に対し、こちらは連合艦隊６４隻、中には旧式の手漕ぎ軍船の姿もある。
「大日本帝国は間に合いませんでしたか……」
　ボルドの隣に並ぶ参謀が、悔しそうに俯く。
　王国海軍司令本部からの話では、大日本帝国海軍の艦隊が、アルタラス王国に向かっているらしいのだが、今この場にその姿はない。
「本来は我が国だけで立ち向かう筈だったのだ、贅沢は言えん。それに……まだ負けたわけではない」
　そう諭すボルドの視線は、戦列艦の艦首に搭載された１門の大砲に向けられる。
　大日本帝国が各国に輸出している兵器の１つ、米式３７㎜対戦車砲である。
　最大射程６．５㎞、パーパルディア皇国の保有する魔導砲を越える性能を持っていた。

「敵艦隊、対戦車砲の最大射程に入りました！」
「まだだ！　対戦車砲の有効射程距離まで引きつけろ！　１発たりとも無駄にはするな！」
５．５km……５km……両艦隊の距離が縮まっていくにつれ、緊張が高まっていく。
そして、その時は訪れた。
「敵艦隊との距離、約４kmに到達！」
兵士の報告に、ボルドは目を見開いた。
「全艦、撃ち方始めぇ!!」
米式３７mm対戦車砲を搭載した戦列艦１５隻から、３７mm砲弾が発射された。

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　パーパルディア皇国皇軍第５艦隊

アルタラス王国からの砲炎は、パーパルディア艦隊からも視認できた。
「敵艦隊、発砲！」
「まだ４kmも離れているぞ。何の儀式だ？」
「威嚇のつもりでしょうか？」
アルタラス王国の行動に、シウスと副官は相手の意図を測りかねた。
アルタラス王国が文明圏国家から魔導砲を購入しているとの情報は入っている。
しかし、文明圏国家が製造する魔導砲の最大射程は約１km、こちらの半分程度しかない筈……そう考えた時だった。
ドドドドーン!!
複数の水柱が、味方戦列艦の周辺に立ち上がった。
「何事だ！」
「て、敵の砲撃です!!　敵の砲撃がここまで届きました!!」

「な、何だと!?」
ありえない事態に、シウスは驚愕する。
列強パーパルディア皇国の保有する魔導砲を越える大砲を、文明圏外国家であるアルタラス王国が保有している。
その事実に、兵士たちの間に不安が広がる。
「せ、戦列艦〈バラス〉〈アルガード〉轟沈!!」
「戦列艦〈ワーミング〉に至近弾！　転覆します！」
次々と味方戦列艦が被害を受けていく光景に、シウスは拳を握りしめた。
「お、おのれぇぇぇ!!　ワイバーンロード隊は対艦攻撃を開始せよ!!」
シウスの指示により、ワイバーンロード隊が敵艦隊に襲いかかる。
「クソっ！　クソッ!!」
本来は戦列艦だけでアルタラス艦隊を蹴散らすつもりでいたシウスは、悪態をついた。

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　アルタラス王国海軍連合艦隊

大した防空装備を持たないアルタラス艦隊は、ワイバーンロードの放つ導力火炎弾によって次々に沈んでいく。
「味方損耗率、９８％!!」
旗艦以外の全艦が沈められたにも関わらず、ボルドの目は諦めていなかった。
「１発でも多く敵にお見舞いしてやれ!!　我々はまだ、負けていない!!」
ボルドの激励と同時に、３７㎜砲弾が発射される。
しかし、砲弾はパーパルディア艦隊の手前に着弾した。
「次弾装填!!」
「海軍長！　残弾がありません!!」

遂に、搭載していた３７㎜砲弾が尽きてしまった。
残るは射程の短い旧式魔導砲と、アルタラス王国が独自に開発した『風神の矢』だけである。
「敵艦隊転進!!」
視線を向けると、パーパルディア艦隊の戦列艦が側面を向け、魔導砲の発射体制に移ったのが見えた。
「この距離で届くのか……皆すまない。我々は……」
「敵艦隊発砲!!」
ボルドが謝罪を口にしたとき、パーパルディア艦隊から砲撃が開始された。
いくら散布界があらがろうと、十数隻から放たれた砲弾は避けようがない。
（ここまでか……）
迫りくる砲弾がゆっくりと見える。
自身の最後を悟ったボルドは意識が途切れる瞬間、『ボオオオオオッ!』という力強い音が聞こえた気がした。

第１４話―アルタラス島沖事変―

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　大日本帝国海軍第４艦隊　先遣艦〈松風〉

「間に合わなかったか……」
駆逐艦〈松風〉艦長の室伏は、沈んでいくアルタラス王国海軍の旗艦を見て、拳を握りしめた。
「艦長……」
「わかっている。本隊に連絡、アルタラス王国艦隊は全滅。これより本艦は、大東亜条約に基づき、アルタラス王国の警備行動に入る」
駆逐艦〈松風〉は速度を上げていく。

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　パーパルディア皇国皇軍第５艦隊

「なんだ、あの船は……」
警笛を鳴らし、接近してくる〈松風〉にシウスが疑問を浮かべる中、〈松風〉の姿を見た副官が若干顔色を悪くして口を開いた。
「し、シウス将軍！　あれはおそらく、神聖ミリシアル帝国の保有する魔導船、或いはそれに近いものであると、愚考致します！」
「なんだと!?」
副官の発言に、シウスは目を見開いて驚いた。
神聖ミリシアル帝国とは、全世界が認める最強の国家である。
五大列強国第１位の文明力を誇り、列強第２位であるムーでさえ、単独で戦えば勝てないだろうと言われている。
そんな国の魔導船が、何故第三文明圏、それも文明圏外国家であるアルタラス王国の領海付近に居るのか。
そうシウスが考えていると、魔導探知機を操作していた水兵が慌て

た様子で報告する。
「将軍！　あの船からは魔力を探知できません！　あれは恐らく、機械動力式の船と思われます！」
「機械動力式……つまりムーの連中か。奴らめ、一体何を考えている」
シウスは苛立ちを露わにしながら、接近してくる〈松風〉を睨みつける。
神聖ミリシアル帝国よりも劣るとはいえ、ムーは列強第２位の位に君臨する超大国であり、パーパルディア皇国よりも格上の存在である。
ムーの戦艦一隻に対して、パーパルディア皇国側は数十隻もの戦列艦を差向けねばならないと言われており、敵の規模によっては、少なからず損耗した第５艦隊では対処出来ない可能性があった。
そんな時、ワイバーンロード隊を率いている竜騎士隊長から魔信が入る。
『不明船の後方に艦影確認！　数は１１隻！　あり得ない速度でそちらに向かっている！』
「クソっ！　ムーの奴らめ！　我々の邪魔はさせんぞ！」
接近する日本艦隊をムーの艦隊と誤認したシウスは、魔信に向かって叫んだ。
「ワイバーンロード隊は全騎、対艦攻撃を開始せよ！　竜母から残りのワイバーンロードを全て上げろ！　戦列艦は３０隻を揚陸艦隊の護衛に残し、全艦突撃！　敵船を包囲せよ！」
シウスの命令を受け、竜母艦隊から残りのワイバーンロードが次々に発艦していく。
そして、アルタラス艦隊との戦闘で損傷した戦列艦１６隻と無傷の１４隻を残し、残存する１５７隻が日本艦隊に向け、突撃を開始した。

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　大日本帝国海軍第４艦隊　旗艦〈扶桑〉

パーパルディア艦隊の動きは、先行する〈松風〉を通して旗艦〈扶桑〉へと届けられていた。
「所属不明艦隊、〈松風〉に向かっていきます！　また、上空の所属不明機も多数、〈松風〉に向かいます!!」
レーダー員の報告を受け、高嶋はすぐさま指示を飛ばす。
「全艦対空、対水上戦闘よーい！　本国に打電！『我、所属不明武装勢力ニヨル攻撃ヲ受ケ、コレト交戦ス』！　以上！」
「了解！」
高嶋の命令は素早く各所に伝達され、戦闘準備が整っていく。
そして、全ての準備が完了した時、先行する〈松風〉から通信が入る。
「〈松風〉が交戦許可を求めています！」
「許可しなさい！　私達も、〈松風〉を援護します！」
高嶋が許可を出すと、すぐさま先行する〈松島〉から複数のミサイルが発射されるのが遠目で確認できた。
そして、〈扶桑〉を始め、〈白龍〉を除く他９隻の艦艇からも、６式対空誘導弾を始めとした各種対空ミサイルが発射される。
「誘導弾全弾、目標着弾まで、後１０秒！」
「主砲発射用意！　本艦は全速力で〈松風〉と合流する！　最大せんそーく!!」
〈扶桑〉は〈松風〉と合流すべく、最大速４５ｋｔへと増速する。
その他の艦艇は、空母である〈白龍〉と護衛の〈追風〉〈江風〉を残し、〈扶桑〉の後を続いていく。
「まさか、退去勧告を行う暇もなく、攻撃を受けるとは……」
「外交官の報告だと、パーパルディア皇国は産業革命一歩手前レベルの文明力だそうよ。列強とはいえ、文明力に差があると、こういった事態が起こることも、容易に想像できるわ」
「そうですか……しかしこの数相手は、実弾演習にもってこいですなぁ」
荻原の発した冗談で、艦橋内に笑いが起こる。
その様子を見た高嶋も、薄っすらと笑みを浮かべながら注意する。

「そうね。あなた達も肩の力を抜いて、かつ油断することないよう、気をつけなさい」
「お任せください、司令長官殿。我々の実力、見せつけてやりますよ」

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　大日本帝国海軍第４艦隊　先遣艦〈松風〉

本隊が現場へ急行している時、先行する〈松風〉は単艦、敵の猛攻撃を引き受けていた。
「航空目標１０、本艦右舷より低空で接近！」
「主砲、撃ちぃ方始め！　各機関砲手！　各個に撃て！」
目まぐるしく戦況が動いていく中、室伏が指示を飛ばしていく。
〈松風〉に搭載されている２５㎜近接防御火器（CIWS）２基が接近するワイバーンロードを跡形もなく消滅させ、給弾の為に停止した隙を、レーダーと連動した３５㎜機関砲４基４門が埋めていく。
更には、後方から飛んでくる対空ミサイルの支援もあり、迫りくる航空攻撃を撃退することには成功していた。
「航空目標、残り１０機です！」
「よし！　航空目標を殲滅した後、対水上目標へと切り替える！　敵艦隊の動きは!?」
室伏の質問に、レーダー員が答える。
「敵艦隊、本艦を半包囲するつもりのようです！　既に、敵艦隊の殆どが配置についたものと見られます！」
「流石に無視しすぎたか……対水上戦闘！　主砲、撃ち方よーい！」
ワイバーンロードに向けられていた１２．７㎝単装砲が、パーパルディア艦隊の戦列艦に向けられる。
生き残ったワイバーンロードがそれに気が付き、突撃を開始するが、給弾を終えたＣＩＷＳの弾幕を前に全滅した。
「航空目標、全機撃墜！」

「これで上を気にする必要は無くなった！　主砲、撃ちぃ方、始め!!」
〈松風〉の主砲が、パーパルディア艦隊に牙を向く。

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　パーパラディア皇国皇軍第５艦隊

「そんな……バカな!?」
シウスは目の前で起きた出来事が信じられずにいた。
第５艦隊の有するワイバーンロード全てを動員して行われた対艦攻撃が防がれ、逆に全騎撃墜されるなど、シウスの想像を遥かに上回っていた。
シウスの隣に立つ副長も同じようで、顔色を悪くしながら、震える声で呟いた。
「まさか、そんな……シウス将軍！　あれは、古に伝わる、誘導魔光弾ではないでしょうか!?」
「な、なんだと!?」
誘導魔光弾……それは、古の魔法帝国と呼ばれるラヴァーナル帝国が運用していた誘導爆弾であり、神聖ミリシアル帝国でも実用化されていない超兵器である。
そんな兵器が目の前で使用されたという憶測に、シウスは青ざめる。
「まさか……古の魔法帝国が復活したとでもいうのか!?」
そんなシウスの言葉に、幹部の一人が答える。
「しかし、シウス将軍。敵船からは魔力反応が無いとの事ですし、もしかしたら、ムーが古の魔法帝国の遺産である誘導魔光弾をどこからか調達し、使用しているとの可能性もあります」
「そ、そうか……そうだな。その方が辻褄が合う」
幹部の推測に、シウスは落ち着きを取り戻していく。
確かに、敵船から魔力反応が無い以上、ムーの艦隊であることは間違いない。

もしかすると、誘導魔光弾というものは、使用するまで魔力反応が出ない兵器なのかもしれない。
「航空支援が無くなった以上、艦隊決戦で決めるしかない……全艦、陣形を維持したまま突撃せよ！　可能であれば、敵船を鹵獲する！」
ムーの軍艦を鹵獲出来れば、自国の軍事力向上に繋がると考えたシウスは、全艦に新たな命令を下した。
風神の涙をふんだんに使用した艦隊は、最大速１６ｋｔにまで増速し、〈松風〉に迫っていく。
その時、一人の幹部が〈松風〉の変化に気が付いた。
「シウス将軍！　敵船の大砲に動きがあります！」
「なんだと？　まだかなり距離があるに、敵は何を考えているんだ？」
「さぁ……もしや、威嚇のつもりでしょうか？」
シウス達が〈松風〉の動きを不審に感じていると、〈松風〉の主砲が発砲したと同時に、先頭を進んでいた戦列艦が爆発した。
「せ、戦列艦〈ラディア〉被弾！　あぁ……沈みます！」
「なんだと!?」
〈ラディア〉の方を見ると、そこには船体が真っ二つにへし折れ、水兵が海に飛び込んでいる姿があった。
そして、火の手が弾薬庫に到達したのか、再度大きな爆発と共に、〈ラディア〉は海の底へと沈んでいく。
「まさか……まさかそんな!?　たった１発で当てたというのか!?」
「そんな！　あり得ません！　そんな芸当が出来る筈は……」
シウス達が狼狽えている間にも、〈松風〉の主砲が攻撃する度に、味方の戦列艦が沈んでいく。
百発百中の射撃を目の当たりにし、シウス達は勝ち目のない戦いに挑んでしまったと後悔した。
「我が艦隊の損耗率、５０％を超えます!!」
「ぜ、全艦離脱!!　後方の揚陸艦隊、竜母艦隊にも伝えろ！　このままでは犬死だ！」
シウスが撤退の指示を出した瞬間、上空から無数の破片が艦隊に降り注いだ。

「戦列艦〈バルト〉〈ローム〉〈ディアントロ〉轟沈！」
「今度は一体何なんだ!!?」
最早泣き声に近い叫びを上げるシウスであったが、次の瞬間、彼の乗艦する戦列艦に敵の砲弾が直撃し、シウスは意識を手放した。
旗艦が沈められた事で、艦隊は陣形を崩壊させながら、散り散りに撤退を開始するが、駆けつけた大日本帝国海軍第４艦隊の攻撃を受け、全滅した。
後に、『アルタラス島沖事変』と呼ばれるこの戦いは、戦列艦１８１隻喪失、ワイバーンロード隊全滅という結果で幕を閉じることとなった。
しかし、生き残った揚陸艦隊と竜母艦隊生存者の証言によって、パーパルディア皇国はある決断を下そうとしていた。

～中央暦１６３９年１１月２４日～
アルタラス王国北東海域　大日本帝国海軍第４艦隊　旗艦〈扶桑〉

パーパルディア艦隊を退けた大日本帝国海軍第４艦隊は、洋上に浮かんでいた僅かなアルタラス・パーパルディア両国の生存者を救出した後、アルタラス王国東部の軍港へとやって来ていた。
アルタラス王国東部に位置するこの軍港は、将来的に大日本帝国やロデニウス大陸国家から購入した軍艦の母港とする予定であった為に拡張工事が行われており、大日本帝国の艦艇であっても問題なく寄港することが出来ていた。
「司令、各艦の残弾状況が纏まりました」
荻原が報告書を高嶋に手渡す。
報告書を受け取った高嶋は暫く読み進めた後に、小さく息を吐いた。
「やはり、〈松風〉の消耗は激しいわね」
「ええ。敵の攻撃を一身に受けたのですから、仕方がありません」
他の艦艇が３割近い消費に落ち着いている中、〈松風〉は８割近い弾

薬を消費しており、補給艦を派遣するか、本国に一度帰港させねばならない状態になっていた。
もし仮に、同じような戦闘が勃発した場合、〈松風〉は撃沈まではいかずとも、重大な損傷を受ける可能性もあった。
「……まぁ、そこは上の判断に任せるわ。それより……今は、彼らを守れたことを喜びましょう」
高嶋の視線の先には、アルタラス王国の軍港に押し寄せるアルタラス王国民の姿があった。
彼らの表情は明るく、祖国の窮地を救った日本艦隊と褒め称えている。
その反面、高嶋達大日本帝国軍人の表情は暗い。
何せ、後一歩のところで、戦友の危機に間に合わなかったからである。
高嶋は艦外マイクを手に取り、静かに話し始める。
「この放送を聞く全ての者達に告げる。我々は当初の予定通り、アルタラス王国の存亡をかけた戦いに勝利した。しかし……我々は、祖国を護らんとその身を捧げた、誇り高き勇者達を喪った」
その言葉を聞いた荻原が、悲痛そうに表情を歪める。
確かに戦闘には勝利した。しかし、アルタラス王国海軍連合艦隊将兵の殆どが、帰らぬ人となったのも事実である。
彼らにも家族は居ただろう。
家族のため、愛する者のために命を散らした勇敢な戦士達。
荻原と同じような表情を浮かべる大日本帝国軍人、そしてアルタラス王国民が、高嶋の次の言葉を待った。
「私は彼らの誇り高き献身に、敬意を表するものである。よって、警笛の後に1分間の黙祷を捧げるものとする。そして、胸に刻んでほしい。我々は彼らの思いを受け継ぎ、この美しきアルタラス王国を守り抜くのだと！　この放送を聞く者達に告ぐ。私の思いに賛同する者は、その答えを示せ！」
次の瞬間、〈扶桑〉の周囲に展開していた大日本帝国海軍第4艦隊全艦が、警笛を鳴らした。

それに留まらず、軍港に押し寄せる民衆から高らかな歓声が響き渡る。
艦内からも、高嶋の思いに賛同した大日本帝国軍人の雄叫びが聞こえてくる。
「……ありがとう……ッ警笛を鳴らせ！　黙祷っ!!」
高嶋の号令と同時に、戦艦〈扶桑〉の警笛が、歓声に包まれた軍港内に響き渡った。

第１５話―過ち―

～中央暦１６３９年１１月３０日～
パーパルディア皇国　皇都エストシラント　皇宮パラディス城
大会議室

「それではこれより、御前会議を始めたいと思います」
重苦しい空気に包まれた中、御前会議が開かれた。
まず始めに口を開いたのは、皇国軍最高司令長官であるアルデだった。
「えぇ……今回のアルタラス王国侵攻に関しましてですが……派遣した皇軍第５艦隊は戦列艦１８１隻を喪失。ワイバーンロード隊全騎喪失といった被害を受け、撤退いたしました」
アルデが報告を終えた瞬間、皇族であるレミールが怒鳴り声を上げた。
「ふざけるな！　列強たるパーパルディア皇国の、それも皇軍主力が、何故アルタラス王国如きに敗れるのだ!?」
「お、恐れながら……今回の敗北に関しまして、生還した揚陸艦隊、及び竜母艦隊の生存者から、重大な情報を得られました」
「一体何だというのだ!?」
レミールの怒声に萎縮しながらも、アルデは生存者から聞き出した重大な内容を告げた。
「敵は……機械動力式の軍艦を、実戦に投入したそうなのです」
瞬間、大会議室内を静寂が包み込み、暫くして怒声が巻き起こる。
彼らの脳裏には、自国よりも格上である列強であり、唯一の科学文明国の名が浮かび上がった。
「馬鹿な！　何故そんなものが第三文明圏の、それも文明圏外国家であるアルタラス王国が保有しているのだ!?」
「まさか、アルタラス王国はそれ程までに、ムーと接近しているというのか！」
様々な憶測と動揺が広がる。

列強第2位の国力を持つ大国、ムー。
永世中立を謳う彼の国が、何故今になってこのような行動を起こしてきたのか。
会議に参加するメンバーの殆どがその意図を図りかねていると、これまで静かに聞いていたルディアスが手を上げ、大会議室内に静寂が戻る。
「よろしい。アルデよ、アルタラス王国は本当に、機械動力式の軍艦を使用したのだな？」
「はっ！　生還した全員が幻覚魔法に掛けられたとは考え難く、ほぼ間違いはないかと」
「で、あるか……すれば、此度の戦闘は、ムーがアルタラス王国を使った代理戦争、と考えるのが妥当であろうな」
代理戦争……その言葉に、大会議室内に緊張が走る。
列強第2位のムーが支援したアルタラス王国と、列強第3位のパーパルディア皇国の代理戦争となれば、その影響力は計り知れない。
「……レミールよ。ムーの大使を呼び出し、事の真相を確かめよ。これ以上我が国を舐めたようだ態度を取るようであれば、今後の関係についても考えねばならん」
「はっ！　承知しました」
「うむ、次にアルデよ。此度の責任は追求せぬ。しかし、これ以上我が国の威厳を貶める事は許さぬ」
「はっ！　現在、第4、第6、第7艦隊を招集しており、3個艦隊を持って、アルタラス王国を完膚なきまでに叩きます」
アルデの発言に頷くルディアスだったが、ふと何かを思い出すと、その発言に待ったをかけた。
「いや、第7艦隊はアルタラス王国ではなく、別の場所に向かわせよ」
「はっ！　別の場所……と申されますと？」
アルデが不思議そう聞き返すと、ルディアスは可笑しそうに笑みを浮かべ、告げた。
「我が国のワイバーンロードを落とし、調子に乗っている国が、東にあったな」

その言葉で、アルデはルディアスが何処を指しているのかを理解する。
そして、その意図も想像できたアルデは、頭を下げて了承したことを伝える。
「お任せください。皇軍の威信にかけて、奴らを叩きのめしてご覧に入れます」
「うむ、期待しておるぞ」
その後も会議は進んでいく。

～中央暦１６３９年１１月３０日～
パーパルディア皇国　皇都エストシラント　第１外務局

「やれやれ、こんな時間に呼び出されるとは、一体何事だろうか」
何時も通りに仕事をこなし、そろそろ帰宅しようとした所で第１外務局から呼び出しを受け、ムー大使のムーゲ他職員は、何事かと訝しんでいた。
そして、第１外務局の職員に案内されて入った部屋の中にいた人物を見て驚く。
「これはこれは、レミール様ではありませんか」
「久しいな、ムーゲ殿。まぁ、座られよ」
レミールに促され、ムーゲが席に着く。
ムーゲが座ったのを確認して、皇国側の進行係が会議の開始を宣言する。
「さて、ムーゲ殿。まずは突然の召集に協力いただき、感謝する」
「いえ、お気になさらず」
始まりは比較的平和に進められていく。
それから暫くして、レミールが本題へと内容を傾ける。
「先日、我がパーパルディア皇国は、アルタラス王国との紛争状態に突入いたしました」
「紛争、ですか……なる程、観戦武官に関する打ち合わせ、ということ

でしょうか」
ムーゲが自身の推測を口にする。
その発言に、レミールの表情が曇る。
「上辺は良いのです。既に、調べはついています。本当のことを話して貰えませぬか？」
「はぁ……？」
一体何の事だろうか、とムーゲは間の抜けた声を出した。
特に何かを隠しているわけでもなく、レミールの意図が読み取れない。
そんなムーゲの態度に、レミールの苛立ちが強まる。
「アルタラス王国は、機械動力式の軍艦を使用したと、報告が上がっています。そして、機械動力式の軍艦を建造出来るのは貴国のみ……何故だ。何故、アルタラス王国に兵器を輸出した！　何故我々の邪魔をするのだ!!」
ムーゲは今にも襲いかかってきそうなレミールの表情に萎縮すると同時に、パーパルディア皇国の斜め上の推論に戸惑う。
「お、お待ちください！　我が国が軍艦を輸出したという事実はありません！　何かの間違いでは？」
「生存者全員が！　敵は機械動力式の軍艦を使用したと報告しているのだ！　ムー以外に、誰がこんな真似を出来るというのだ!!」
「それは……はっ！」
ここでムーゲは先日、本国から送られてきた通信の内容を思い出す。
その内容は、新たに国交を結ぶ事となった転移国家、大日本帝国とグラ・バルカス帝国に関するものであった。
両国はムーを凌駕する程の科学技術を有しており、今後の交流でムーの国力が大きく向上するとまで言われ、更には祖国からの定期便で送られてきた物の中に、大日本帝国製の腕時計等も含まれていた事から、ムーゲは祖国の通信が真実であると結論付けていた。
そして、その大日本帝国が存在するのが、第三文明圏ロデニウス大陸北方であることも思い出した。

「レミール様は、大日本帝国という国をご存知ですか？」
「大日本帝国？　聞いたことのない国だな。お前達はどうだ」
レミールが皇国側の職員に尋ねるが、職員達もレミール同様に首を傾げ、そんな国は知らないと答える。
「そうか。架空の国をでっち上げてまで、我々の邪魔をしようというのだな」
「大日本帝国は存在します。ロデニウス大陸の東に位置する国で、彼らは……」
「もう良い！　そなたの話は聞くに耐えん！」
説明を遮り、レミールは席を立つ。
そして、動揺するムーゲを睨みつけながら、レミールは告げる。
「素直に関与を認め、謝罪でもすれば許してやったものを……今日はここまでだ。今後の貴国への対応は、追って通達する！」
呆気に取られるムーゲ達にそう言い放ち、レミールは大会議室を後にする。
この会議を切っ掛けに、ムーとパーパルディア皇国は急激に関係を悪化させていく。

～中央暦１６３９年１１月３０日～
パーパルディア皇国　皇都エストシラント　皇都パラディス城
王の間

「そうか。ムーは関与を否定したか」
レミールからの報告を受け、ルディアスは険しい表情を浮かべた。
同じ列強同士、良くはないが悪くもない程度には友好的に接してきたつもりであったが、それは間違いであったかと考える。
「ところで、ムー大使の言っていた、大日本帝国なる国の存在は確認できたのか？」
「現在調査中でありますが、おそらく見つからないでしょう」
「で、あるか……」

暫くの沈黙の後、ルディアスは意を決したように口を開く。
「ムーとの関係を改める。ムーに出向いている臣民を本国に帰国させよ。国内のムーの資産を凍結し、此度の邪魔をした事に対する、正式な謝罪と賠償を請求するのだ」
「はっ！　承知しました！」
命令を各所に伝えるべくレミールが退室するのを見届け、残されたルディアスは一人呟いた。
「列強同士の紛争……いや、戦争か……世界が大きく変わるな」

第１６話―窮地の出会い―

～中央暦１６３９年１１月３０日～
ロデニウス大陸北方海域　武装商船〈タルコス号〉

時は少し遡る。
万が一を想定して、アルタラス王国王女ルミエスは、大日本帝国への留学を名目に一時避難を行っていた。
「ルミエス様。後数日もすれば、ロウリア王国の王都ジン・ハークに到着します。そこで補給を済ませた後、大日本帝国へと発つ予定です」
「そうですか……」
若く美しい女性、ルミエスは重々しい表情で答えた。
本国から送られてきた魔信からは、パーパルディア皇国皇軍を退けたという情報が入っているが、同時にまだ油断できないとも聞いている。
大日本帝国の支援を受けているとはいえ、本国では民衆が今もなお、パーパルディア皇国の圧力を受けているのだ。
そんな中、王族というだけで一人逃されたルミエスは、その胸中に複雑な思いを宿していた。
「ロウリア王国へは数日間の滞在を予定しております。中にはローラ王女……失礼、ローラ女王との面会もございますので、久しぶりのご歓談が楽しみですね」
「……ええ、そうですね」
上級騎士リルセイドの言葉に、ルミエスも僅かながら笑みを浮かべる。
幼少期、大東洋諸国会議に連れて行ってもらった際にルミエスが出会った少女。
歳が近く、かつ同じ王族ということもあり、２人が仲良くなるのに時間は掛からなかった。
「彼女は立派に王族の務めを果たしているというのに、私は……」
「ルミエス様……」

一瞬浮かべた笑みが、再び暗くなってしまう。
リルセイドが声をかけようとした時、〈タルコス号〉の甲板上が騒がしくなる。
「何事だ！」
「リルセイド様！　海賊です！　海賊の襲撃です！」
「なんだと!?」
ロウリア王国の領海で海賊と遭遇したことに、リルセイドは驚きの声を上げる。
事前の調べでは、ロデニウス大陸周辺の海賊は、殆ど壊滅したと聞いていたからだ。
確かに、現在はロウリア王国海上警備軍と大日本帝国海上保安庁の努力で、海賊の数は減少している。
しかし、旧ロウリア王国海軍が消滅した際に増加した海賊の数は生半可なものではなく、現在でも少数の海賊がロデニウス大陸周辺に点在していた。
そして、〈タルコス号〉は不運にも、その生き残った海賊と遭遇してしまったのである。
「クソっ！　全員武器を取れ！　何としてでも、ルミエス様をお守りしろ！」
〈タルコス号〉は、海賊との戦闘に突入する。

～中央暦１６３９年１１月３０日～
ロデニウス大陸北方海域　大日本帝国海上保安庁　巡視船〈きさらぎ〉

先のロデニウス大戦で旧ロウリア王国海軍が消滅したことで、海賊による被害が多発するロデニウス大陸。
そんな中、大日本帝国政府はロウリア王国女王ローラの要請を受け、むつき型ヘリコプター搭載巡視船４隻を含む巡視船団を派遣していた。

巡視船〈きさらぎ〉船長の瀬戸は、ロデニウス大陸の仮設本部から送られてきた報告を見て、溜息をつく。
「北方海域で海賊か……まだまだ平和には程遠いな」
報告の内容は、朝日基地所属の無人偵察機が、ロウリア王国領海内で海賊行為を発見したというものであった。
再び溜息をこぼし、暫くして船内マイクを手に取る。
「通達する。これより本船は、海賊に襲われている民間船救助へと向かう。乗船する特警隊（特殊警備隊）は装備を整えた後、ヘリ甲板に集合せよ」
瀬戸の指示で、乗員が素早く動き出す。
〈きさらぎ〉に搭載された各種兵装が稼働し、ヘリ甲板では〈あきたか2号〉が離艦の準備を進めていく。
〈あきたか2号〉の前に船長の瀬戸と、10人の武装した特警隊員が集まる。
小隊長を務める今村（いまむら）　和義（かずよし）二等海上保安正が前に出た。
「小隊、出撃準備完了しました」
「宜しい。仮設本部からの報告によれば、海賊は既に民間船と接触し、船上で白兵戦が行われているとの事だ。時間との勝負であり、諸君には先行して民間人救助に当たってもらう。異論はあるか？」
「いえ、ありません！」
「よろしい……作戦を開始する！　〈きさらぎ〉特警隊、出撃せよ！」
「了解!!」
特警隊員を乗せ、〈あきたか2号〉は〈きさらぎ〉を飛び立った。

～中央暦1639年11月30日～
ロデニウス大陸北方海域　武装商船〈タルコス号〉

〈タルコス号〉甲板上では、近衛騎士と海賊による白兵戦が繰り広げられていた。
単騎の練度では近衛騎士に軍配が上がるものの、慣れない船上での戦闘に加え、これまでに溜まっていた疲労が祟り、徐々に追い詰めら

れていた。
「ひゃっはー！　久々の獲物だァ！」
「お頭ァ！　今回は結構な上玉ですぜ！」
「男は殺せ！　女は犯せ！　お宝は俺達の物だ！」
　更に複数の海賊が〈タルコス号〉に乗り移り、劣勢な近衛騎士を殺害していく。
「くそっ！　海賊を奥に入れるな！」
「何としても、ここで食い止めるぞ！」
　船内ではルミエスの居る部屋の前を護っていた近衛騎士達が、迫りくる海賊と戦闘を行っていた。
　狭い船内であることが災いし、大多数に囲まれるといった事は無かったが、それでも続々と流れ込んでくる海賊に、近衛騎士の限界は近かった。
「ひ、姫様……っ!!」
　若い侍女がルミエスを守るように抱きしめる。
　しかし、侍女の細い腕は小刻みに震えており、彼女も恐怖で限界なのだと分かってしまう。
「……ここまで、ですか」
　ルミエスは静かに目を閉じた。
　目的地まで後少しだというのに、こんな所で終わってしまう事に、悔しさが込み上げてくる。
（せめて、この子達だけでも……ッ）
　ルミエスは自分の身を差し出し、うら若き侍女達だけでも見逃してもらおうと覚悟を決めた時、部屋の扉が乱雑に開かれ、数人の海賊が雪崩れ込んで来る。
「コイツはまた上玉だァ！　俺達はツイてるぜ！」
　海賊達は下衆な表情を浮かべて、ルミエス達に近付いていく。
「こ、来ないでください！」
「うるせぇ！　こっちに来い！」
　強引に腕を引かれ、ルミエスは身なり良い海賊に押し倒されてしまう。

「お頭ァ！　他の女達はどうしやすかい？」
「俺はこの女で十分だ。他は好きにしろ」
　お頭と呼ばれた海賊の答えに、他の海賊達は恐怖で震える侍女達に襲い掛かった。
「いやぁぁぁッ!!」
「やめて！　彼女達に触らないでっ!!」
　ルミエスが必死に叫ぶが、海賊達は止まることなく、侍女達を押し倒していく。
「他人の前に、自分の心配をするんだな」
「い、いや！」
　お頭の言葉で、ルミエスは自分の置かれた状況を思い出し、悲鳴が零れ出る。
　そして、お頭がルミエスの衣服を引き裂き、欲望の限りを尽くそうとした、その時。
「お頭ァ！　大変でさぁ!!」
　一人の海賊が船内に飛び込んできた。
「何だ！　俺はこれからお楽しみだ！」
「んな事より！　噂の鉄鳥が現れたんでさぁ!!」
「何だと!?」
（鉄鳥？）
　聞き覚えのない言葉にルミエスが疑問を覚えている中、何処からか空気を叩くような音が聞こえ始めていた。

〜中央暦１６３９年１１月３０日〜
ロデニウス大陸北方海域　武装商船〈タルコス号〉上空　〈あきたか２号〉

「民間船側は、だいぶ劣勢のようです」
　目標の民間船と海賊船の上空に到着した〈あきたか２号〉の機内から、一人の特警隊員が戦況を分析する。

既に船内にも海賊が侵入しているのだろう、海賊と思しき人影が船内に入っていくのが見える。
「時間が惜しい。降下するぞ！　ドアガンナー、俺達を援護してくれ！」
「了解！」
〈あきたか2号〉から降下ロープが降ろされ、今村を先頭に特警隊員が降下していく。
降下する今村達に気付いた海賊が武器を手に向かってくるが、〈あきたか2号〉に搭載された12．7㎜重機関銃の掃射を受けて、倒れていく。
「船内に突入する！　2人程ついてこい！　残りは甲板上の海賊を殲滅しろ！」
迫りくる海賊を排除しながら、今村は隊員2名を連れて、船内へと突入していく。
木造船の船内は現代船ほど入り組んだ構造にはなっておらず、今村達は直ぐに海賊達の集まる部屋へと辿り着いた。
「動くな！　海上保安庁だ！」
「く、来るんじゃねぇ！　女がどうなってもいいのか!?」
今村達が突入すると、お頭を含む数人の海賊が、人質を盾にして待ち構えていた。
剣先を人質に向け、お頭が叫ぶ。
「武器を捨てろ！　さもなくば、女を殺す！」
「隊長、どうしますか？」
人質のいる状況に、特警隊員の一人が今村に確認する。
「訓練を思い出せ。人質に被害を出すな」
「……了解」
今村の答えに、特警隊員2名は銃を構え直す。
そんな今村達の様子に、海賊側が慌て出す。
「な、何をしてやがる！　さっさと武器を……」
お頭の言葉が、最後まで続くことはなかった。
今村の放った9㎜実包が寸分違わずにお頭の眉間に命中し、その命

を刈り取ったからである。
　お頭が殺されたことで、他の海賊達が人質を放り投げて襲いかかるが、何時でも撃てるように構えていた特警隊員に射殺され、全滅した。
「クリア！」
「もう大丈夫です。落ち着いてください」
　未だ恐怖心の抜けきっていない侍女達に、特警隊員らが優しく声をかける。
　彼女達の格好を見るに、何をされたかは容易に想像がつく。
「貴方達は……」
　薄く斬られた首筋を押さえながら、一人の女性が突入してきた今村達に尋ねる。
　身に着けている衣服は無残にも引き裂かれているが、その立ち振る舞いから、彼女がこの中で最も上位の存在であることがわかった。
「我々は、大日本帝国海上保安庁の者です。皆さんの救助に参りました……遅くなり、申し訳ありません」
「大日本帝国……いえ、ありがとうございます……っ」
　国名を聞いて驚いた表情を浮かべた女性だったが、直ぐに助けてくれたお礼を言い、恥ずかしそうに露出する肌を隠した。
　そんな女性に、今村は近くにあった布を拾って手渡す。
「あ、ありがとうございます……」
「姫様ぁぁぁ!!!!」
　女性がお礼を言って布を受け取った時、一人の女性騎士が部屋に駆け込んできた。
「リルセイド！　無事だったのですね！」
「はい！　姫様は……っ！　あぁ、そんな！」
　リルセイドと呼ばれた騎士は、女性の現状を見て、膝をついた。
「なんてこと……姫様、申し訳ありません。私が付いていながら、姫様の純情をお守りすることができず……」
「落ち着いて。服は破られちゃったけど、そこから先はまだ何もされていないから」
　女性の落ち着き様から、どうやら最悪の事態は回避できたようだと

安堵する今村達であったが、それ以上にリルセイドの放った言葉の方に衝撃を受けていた。
「失礼。今、その女性を姫様と呼びましたか？」
「あっ、失礼しました。まだ名乗っていませんでしたね」
すると、女性は佇まいを正し、今村達に向き直った。
その表情には、先程までの恐怖心等は微塵も感じられない。
「私は、アルタラス王国王女、ルミエスと申します」
「はっ、失礼しました！　自分は、大日本帝国海上保安庁特殊警備隊所属、今村　和義二等海上保安正であります！」
まさか目の前の女性が王族であったことに、今村達は冷や汗を流す。
王族の、それも女性の裸を見てしまった事に、外交関係の悪化が脳裏を過る。
今村達が硬直していると、甲板上で戦っていた特警隊員が部屋に入ってきた。
「隊長、〈きさらぎ〉が本海域に到着。海賊船の排除を開始しました……？　どうかしましたか？」
「い、いや。なんでもない。それより、彼女達を甲板に連れて行く。〈きさらぎ〉に受け入れ準備をさせてくれ」
「了解」
報告のために部屋を出て聞く特警隊員を見送り、今村はルミエス達に向き直る。
「これより、皆様を巡視船〈きさらぎ〉でロウリア王国首都ジン・ハークへとお送りさせていただきます」
「ありがとう、ございい……あれ？」
お礼を言いかけたルミエスが、突然膝から脱力し、その場に倒れ込んでしまう。
「ひ……姫様ぁ!!!」
リルセイドは無意識の内に叫んでいた。
今村が急いでルミエスを抱きかかえると、彼女は異常なほどの汗を流し、涎を垂らしているのがわかった。

目の焦点が定まっておらず、ガタガタと震えが止まらなくなってきている。
「毒かっ!!」
今村はルミエスの首筋の怪我を見て、海賊の剣に毒が仕込まれていたことを推測する。
そして、同時に部下に叫んだ。
「〈あきたか2号〉を降ろせ！　要救助者1名！　朝日基地の軍病院に搬送する！」
海賊の襲撃を乗り越えたルミエス達であったが、彼女達の苦難は、まだまだ続くのであった。

第17話―不穏な空気―

～中央暦1639年12月1日～
ロウリア王国　大日本帝国租借地　朝日基地　軍病院

「知らない天井……」
海賊の毒を受け、意識を失っていたルミエスは、見知らぬ部屋で目を覚ました。
白い光が天井を灯す、無機質な部屋。
「私は確か……っ!!」
激しい頭痛が彼女を襲い、思わず声を上げてしまう。
その声を聞いてか、部屋の外で待機していたリルセイドが部屋に飛び込んできた。
「姫様ぁ！　目を覚まされたのですね！　本当に良かったぁ!!」
安堵の表情を浮かべるリルセイドだが、その目元には隈が出来ている。
どうやら夜通し、ルミエスを心配して部屋の外にいたのだろう。
ルミエスがここは何処なのかと尋ねようとした時、部屋に一人の来訪者が現れた。
「失礼します……っ！　ルミエス様！　お目覚めになられたのですね！」
「ろ、ローラ様！」
来訪者……ロウリア王国現女王であるローラ・ロウリアの登場に、ルミエスは驚きの声を上げる。
まさか
このような場所で再開するとは、夢にも思わなかったのだ。
「お身体の方は大丈夫ですか？」
「は、はい。少し頭痛はしますが、他は何ともありません」
「そうですか……良かったぁ」
心底安堵した表情を浮かべるローラに、ルミエスはふと悪戯心が芽生えてしまう。

「……あいたたた、急にお腹が……」
「え……ええ!?　そんな大変！　お、お医者様を呼ばなくては！」
ルミエスの演技に、ローラが慌てて医者を呼びに行こうとすると、リルセイドが待ったをかける。
「落ち着いてください、ローラ様。これは姫様の悪戯ですよ。何時ものやつです」
「へ？　い、悪戯？」
キョトンとした表情でローラがルミエスに視線を向ける。
そこには、あまりの慌てようにお腹を抱えて笑いを堪えているルミエスの姿があった。
「も……もぅ！　ルミエス様!?　私、本当に心配しているのですよ!?」
「ご、ごめんなさい。つい……フフッ」
「もーっ!!」
その後、ローラの叫び声を聞きつけた看護師に、３人揃って厳重に注意されたのは、また別の話。
そして、ルミエスは目を覚ましたことで医者の診察を受け、後３日間の入院生活を余儀なくされるのであった。

～中央暦１６３９年１２月１日～
クワ・トイネ公国　大東洋諸国会議

第三文明圏東側の文明圏外国で行われている国際会議、大東洋諸国会議。
大きな出来事があった際に不定期で開催される会議が、クワ・トイネ公国で開かれようとしていた。
「これより、大東洋諸国会議を開催いたします」
クワ・トイネ公国の進行係が、会議の開催を宣言する。
今回、会議に出席している参加国は、大日本帝国の提唱する新陣営『大東亜共栄圏』に加盟している、又は加盟予定の国が多くを占めており、必然的に内容は大日本帝国に関する事となっていく。

「先日、アルタラス島沖合で発生した、大日本帝国とパーパルディア皇国の武力衝突に関して、それぞれの意見を聞きたい所存です」
クワ・トイネ公国のハンキが尋ねる。
すると、会議に参加する全員が挙手し、進行係に選ばれたトーパ王国の代表が発言する。
「トーパ王国です。我々は、今回の武力衝突において、大日本帝国を擁護する一存であります。アルタラス王国がパーパルディア皇国から受けた通達文を公表しており、拝見しましたが……あれは、酷いとしか言いようがありません。パーパルディア皇国側に、正義はないと感じます」
トーパ王国の擁護に、次々と大日本帝国擁護論が続く。
「シオス王国です。我々もトーパ王国と同じ考えであります。あの様に非道な通達文は、初めて見ました。大日本帝国の国民性を考えれば、武力衝突も納得でしょう」
「ロウリア王国です。大日本帝国と戦争をした我が国の意見になりますが、彼の国は無関係の一般市民への殺戮を容認しておりません。もし、パーパルディア皇国がアルタラス王国を攻め滅ぼしていた場合、国民は勿論のこと、ルミエス王女は酷い辱めを受けていたことでしょう。女王陛下と仲のよろしいルミエス王女が、皇国の手に堕ちるのを防いでくれたことに、感謝しております」
大日本帝国に非はなく、寧ろパーパルディア皇国側に非があるということで一致した各国は、
・大日本帝国と敵対せず、共に発展していく。
・大日本帝国と協力し、パーパルディア皇国の圧力に屈しないよう軍事力を増強する。
・先の武力衝突はパーパルディア皇国側に原因があり、大東洋諸国会議は連盟して抗議する。
以上の３点を主軸に、各国で声明を出すこととなった。

～中央暦１６３９年１２月２０日～

パーパルディア皇国　皇都エストシラント　第3外務局

この日、大日本帝国の使節団は、パーパルディア皇国第3外務局を訪れていた。
以前の訪問から1ヶ月以上もの間を開けてしまっていたが、果たして今回は取り合って貰えるだろうかと危惧する。
「こんにちは。大日本帝国外務省の者です。
何度も申し訳ありませんが、課長様のご都合はいかがでしょうか」
外交官の朝田が窓口の職員に声をかけると、職員は一瞬だけ朝田達を睨みつけ、そして何かを思い出したかのように直ぐに確認すると席を離れていった。
「果たして、どのような対応で来るでしょうか」
朝田の隣に立つ男性……陸軍から派遣された河本1等陸尉が、職員の反応を見てそう呟く。
「アルタラス島沖での衝突相手が我が国であると勘付いていれば、あまりいい結果にはならないだろうね」
そのような雑談を朝田達がしている中、職員の報告を受けた第3外務局局長のカイオスは、大日本帝国の名前を聞いて驚愕した。
「何？　大日本帝国だと!?　間違いないのか!?」
「は、はい。間違いなく、彼らは大日本帝国の外交官だと、言っておりました」
職員の報告に、カイオスは暫し考え込む。
大日本帝国の名前は、外務局監査室のレミールから調査するように命じられていた為に知っていた。
だが、それはムーが作り上げた架空の国家であるという認識が強かっただけに、驚きは強い。
「……わかった。私が直々に対応しよう。応接室に案内しろ」
「へ？　……っは、はい！　わかりました！」
一呆気にとられた表情をした職員を睨みつけ、職員が出ていくのを確認すると、カイオスは魔信器を使って魔信を行う。
「第3外務局のカイオスです。レミール様にお取り次ぎ願います」

～中央暦１６３９年１２月２０日～
パーパルディア皇国　皇都エストシラント　第３外務局

職員に案内され、第３外務局の待合室に通された朝田達は気を引き締めていた。
「相手がどう出るかわからない。くれぐれも慎重に、かつ舐められないようにしないとな」
「ええ、その通りです」
朝田の言葉に、補佐の篠原が頷く。
相手はこの世界でも列強に名を連ねる国。だが、文明レベルで言えば、大日本帝国よりも大きく劣る。
そんな国に舐められれば、これまで築き上げてきた信頼は地に墜ちるだろう。
暫くして、先程の職員が待合室にやってくる。
「お待たせしました。こちらへどうぞ」
職員に案内され、やがて重厚な扉の前に着く。
職員がドアノッカーを叩くと、扉の向こうから声が届いた。
「どうぞ」
「失礼します」
職員が先に入室し、そして朝田達を招き入れる。
中には数人の男達が長机を前にして、並んで着席していた。
「初めまして。大日本帝国外務省職員の朝田と申します。こちらは補佐の篠原と河本です」
「どうぞおかけください」
まるで面接のようなやり取りに釈然としない気持ちに苛まれるも、荒波を立てないよう従う。
そして、パーパルディア皇国側の自己紹介も終わり、遂に本題へと入った。
「大日本帝国と言えば先日、ムーの大使が仰っていましたよ。なんで

も、ムーを超える技術をお持ちだとか？」
「はい。一部ではありますが、我が国はムーとの貿易において、様々な工芸品を輸出しております。もし、貴国との国交が開設された暁には、ムーと同様に、各種工芸品の輸出を検討しています」
「はっ！　文明圏外の未開人如きが、五大列強に名を連ねる我がパーパルディア皇国に輸出だと？　随分と質の悪いジョークだな」
　東部島国担当課長の言葉に、パーパルディア皇国側から笑い声が零れる。
「正直に申したらどうだ？　貴様らは所詮、ムーが作り出した傀儡国家で、ムーの支援がなければ成り立ちません、とな」
「……我が国はれっきとした独立国です。決して、何処かの傀儡国家等ではありません。パーパルディア皇国にも、一度我が国に特使を派遣していただければ……」
「はっはっはっ！　第三文明圏最強のパーパルディア皇国が、文明圏外の蛮族に使者を送るだと!?　寝言は寝てから言うのだな!!」
　カイオスは東部担当部長をぎろりと睨みつけた。
「おい、言い過ぎだ。我々の言葉には、皇帝陛下の意思が入っている事を忘れるな」
「はっ……はっ！　失礼しました！」
　東部担当部長が、慌てて口を噤む。
「失礼した……貴殿らの話はよくわかりました。皇国から貴国へと人材派遣については、２ヶ月程お待ちいただきます。こちらも、色々と内部事情がありますので……」
「わかりました。それでは、２ヶ月後に再び、よろしくお願いします」
「ふっ……では、２ヶ月後が楽しみですな」
　カイオスは初めて、不気味に笑った。

～中央暦１６３９年１２月２０日深夜～
パーパルディア皇国　皇都エストシラント　皇都パラディス城
王の間

王の間では関係閣僚が集まった緊急御前会議が開かれていた。
「カイオスよ。大日本帝国に関する情報を得たとは、真か？」
「はっ！　只今資料をお配りいたします」
カイオスの指示で、全員に資料が配られる。
大日本帝国側の用意した資料をそのまま書き写しており、ルディアスは資料に目を通して一笑した。
「転移国家だと？　そんな事があり得ると思うか？」
ルディアスの質問に、閣僚全員が失笑する。
国ごと転移などあり得ないと、誰もが思っているからだ。
「しかし、転移国家とな……確か、ムーも自国は転移国家であると、宣言しておりましたな」
「なる程、自国の歴史をモデルにした国を作り上げたと……中々面白いことを考えるではないか」
再び笑いが起こる。
彼らの中では既に、大日本帝国＝ムーの傀儡国という内容が結論付けられていた。
「陛下。それでは、今後の大日本帝国との交渉は、我々外務局監査室及び、第1外務局が引き継ぎます。カイオスも、それで良いな？」
「はっ！　異論はありません」
「うむ、任せよう……して、例の計画はどうなっておる」
ルディアスの質問に、アルデが答える。
「はっ！　2ヶ月後には、皇帝陛下の下に吉報が届くことでしょう！」
「そうかそうか！　期待しておるぞ」
その後も会議はまだまだ続く。

第１８話―予期せぬ奇襲―

～中央暦１６４０年１月１５日～
???の間

大日本帝国総理大臣の今村は、本に囲まれた小さな部屋……イズルの部屋で目を覚ました（というより、気が付いた）。
ー……こんばんは……今村総理。
「イズル様。本日もお呼び下さり……っ！」
今村が感謝の言葉を述べようとして、硬直した。
イズルの様子が、何処かおかしいからである。
熱を帯びた頬に、異常な程に流れ落ちる汗。
息遣いも荒く、何かを耐えるかのようにスカートの裾を握りしめている。
心なしか、焦点が合わさっていない様にも見えた。
「だ、大丈夫ですか!?」
ーは、はい……だいじょうぶ……れす……ッ。
そう言ってイズルが立ち上がろうとした時、カクンッ！　と力が抜けて椅子から転げ落ちた。
「イズル様!!」
慌てて今村が駆け寄り、イズルを抱き上げる。
そして、服越しに伝わる熱を感じると、もしやと思い、イズルのおでこに手を置いた。
「こ、これは……ッ!?」
ー……ごめん、なさい……。
大日本帝国政府が誕生してから実に１３０年以上の間、天皇陛下や歴代総理達の夢に現れては、数々の助言を残してくれた、神の如き存在。
そんなイズルに現れた症状に、今村は混乱する。
「まさか、イズル様が風邪を引かれるとは……」
ー僕も……正直、予想外でした……。

イズル本人も想定外だったようで、辛そうな表情で必死に笑みを浮べようとしている。
「それよりも早く医者に……って、ここじゃあ呼べないじゃないか！」
そう、ここは夢の中。イズルの世界。
医者なんて、呼べるはずもないのだ。
ーそんな……ことより……今村、そーり。あなたに、伝えなくちゃ……いけないことが……。
「喋ってはいけません！　今は身体をお休めください！」
今村が必死に止めるも、イズルは止めずに口を開く。
ーいそいで……ニシノ、ミヤコから……避難……あと……みっか……キュウ。
「い、イズル様!?」
次の瞬間、今村は自室のベッドの上で目を覚ました。
恐らく、イズルが気を失ったことで、現実に引き戻されたのだろう。
「ニシノミヤコ……避難……3日……一体、何が起こるというのだ」
それから直ぐに、今村は関係閣僚を緊急招集し、イズルの発した内容の解明を急ぐのであった。

～中央暦１６４０年1月１８日～
フェン王国　ニシノミヤコ

パーパルディア皇国が攻めて来た場合、真っ先に戦場になると予測されるニシノミヤコ。
既に戦時体制となっており、王国武士団の武人約２，０００人が、常時滞在していた。
そんな中でも、日本人観光客はニシノミヤコへと足を運んでおり、賑わいを見せている。
「ん……？」
ふと、巡回警備中であった武人が何かを見つける。
ニシノミヤコ沖合から上がる赤い狼煙。

その意味を理解した武人は、即座に行動に移る。
「敵襲ーっ!!」
ピイイイッ！　ピイイイッ！　ピイイイッ！
その他にも、ニシノミヤコ常駐監視員が、応援に駆けつけた他所の武人が、西城に勤めている警備兵が、全員が警笛を鳴らす。
フェン王国出陣の時は近い。

～中央暦１６３９年１月１８日～
フェン王国　首都アマノキ　水軍基地

フェン王国水軍主力が停泊する水軍基地。
そこには、大日本帝国からやって来た１個戦隊が停泊していた。

☒大日本帝国海軍第４戦隊☒
村雨型ミサイル巡洋艦：〈長良（ながら）〉※旗艦　〈由良（ゆら）〉
磯風型ミサイル駆逐艦：〈桜風（さくらかぜ）〉〈華風（はなかぜ）〉〈藤風（ふじかぜ）〉〈荒風（あらかぜ）〉
☒フェン王国水軍新生第１艦隊☒
カーマ級装甲艦：〈剣王〉※旗艦
ラー級駆逐艦：〈火剣〉〈水剣〉〈土剣〉〈風剣〉

その他にも、アマノキ沖合には民間のフェリー等が停泊しており、日本人観光客の帰国支援を行っていた。
「長官、日本人の避難状況がかなり悪いです」
「ふむ、そうか……」
大日本帝国海軍第４戦隊司令長官の的場は、報告書に目を通して顔をしかめる。
上層部からは日本人全員を帰国させるように命令されているが、魔信が行えないフェン王国では、各地方に散らばっている日本人全員に退去命令が届いていないのが現状である。
そんな時、一人の兵士が慌ててやって来る。

「失礼します！　本国より緊急電！　フェン王国ニシノミヤコに、パーパルディア皇国軍が上陸しました！」
「なんだと!?」
まさかの報告に、的場は思わず立ち上がる。
まだ避難勧告が出されてからそれ程時間を開けずに、パーパルディア皇国が攻めてきたことに驚いていた。
「いかん！　ニシノミヤコの避難状況は!?」
「はっ！　現在、ニシノミヤコに滞在していた日本人の約３７％が避難完了。以前、避難中なのが約１２％……およそ５１％の日本人が、まだニシノミヤコに取り残されています！」
「本国に連絡！　急ぎ出港許可を求むと伝えろ！　このままでは……っ！」
的場は本国からの許可を待つ間、ニシノミヤコに取り残された日本人の無事を祈った。
しかし、現実は非情であった。
その日、フェン王国ニシノミヤコは、パーパルディア皇国第７艦隊の艦砲射撃と、パーパルディア皇国陸戦隊の侵攻を受け、陥落した。

～中央暦１６４０年１月１８日～
フェン王国　ニシノミヤコ

パーパルディア皇国皇軍の侵攻により陥落したニシノミヤコ。
そこでは、皇軍兵士が僅かな生存者の捜索を行っていた。
陸将ベルトランは、部下に向かって指示を飛ばす。
「いいか！　日本人を見つけたら殺さずに生け捕りにせよ！　それ以外は好きにして構わん！」
ベルトランの指示で、皇軍兵士の士気は上がる。
日本人はどうにも出来ないが、それ以外であれば、好きにしてよいのだ。
フェン王国人であろうと、そうでなかろうと、彼らは己の欲望を満

たすために動き出す。
そんな中、一部の皇軍兵士が一軒の建物に侵入し、中にいた一組の男女を引きずり出した。
「いやぁ！　やめてぇ！」
「やめろ！　妻は妊娠しているんだ！」
日本人ではなく、かといってフェン王国人でもない夫婦に、皇軍兵士は下衆な表情を浮かべて答える。
「妊婦と言っても、まだ使えるじゃないか」
「なっ!?」
皇軍兵士の返答に、夫婦は青ざめる。
そして、皇軍兵士の魔の手が女性に伸ばされた。
「いやぁぁぁ!!」
愛する妻の悲鳴に、夫は必死に抵抗する。
「貴様らぁぁぁ!!　我々をグラ……」
「うるせぇんだ……よっ！」
一発の銃声が鳴り響く。
そして、何かを言いかけていた夫が地面に倒れ付すのを見て、女性は限界を越えてしまった。
「いやぁぁ!!　あなたァァァ!!」
「おい！　こいつの口を塞げ！　煩くて気が散る！」
その後、この女性は大日本帝国軍に救助されるまでの間、皇軍兵士の欲望を一身に受けることとなる。

～中央暦１６４０年１月１８日～
パーパルディア皇国　皇都エストシラント　第１外務局

急遽第１外務局への出頭を命じられた朝田達は、不審に思いながらも第１外務局を訪れていた。
そして、彼らが見せつけられたのは……残酷な現実だった。
『やめろぉ！　やめてくれぇぇ!!』

『いやぁぁぁぁ!!』
『おかあさぁぁん……ぁぁ……嫌だぁぁ!!　やめ……』
映像付き魔導通信機から聞こえてくる悲鳴と絶叫。そして、鮮血が流れ、転がる遺体が増えていく地獄絵図。
「やめろ……やめろぉぉーッ!!　今すぐやめさせるんだッ!!!」
「こんな、こんなの……酷すぎる……っ！」
朝田は絶叫し、篠原は殺されていく日本人の姿に涙を流して崩れ落ちる。
河本は表情こそ変えないが、その胸中には激しい怒りが渦巻いており、今にも殴り掛かりたい衝動を必死に押し殺していた。
画面の向こう側で最後の日本人が処刑され、水晶板に映る日本人は全て動かなくなっていた。
「フェン王国の首都アマノキが落ちるまでに、我が国の要求を飲むか飲まないか、日本の王……いや、宗主国であるムーに伝えるんだな。我々は既に、ムーを相手に出来る程の国力、軍事力を手に入れた。これからはもっと差が開いていくだろう」
レミールの発言に、嘘は含まれていない。
確かに、パーパルディア皇国は早い段階でムーとの戦争を視野に入れ、相手に出来る数の戦列艦と竜母、そして最新のワイバーンオーバーロードを多数生み出し続けている。
戦列艦の数だけでも、ムーの保有する全艦艇より倍以上多いだろう。
だが、それは相手がムー単体であれば、の話ではあるのだが……。
その後、会議は終了した。

〜中央暦１６４０年１月１８日深夜〜
パーパルディア皇国　皇都エストシラント　某所

朝田達が滞在している宿屋に戻り、報告書を纏めている頃、河本は人気のない路地裏である人物と会っていた。

「お疲れ様。大変だったな」
「えぇ、あそこまでやられるとは、思っても見ませんでしたよ」
覆面を被った男の言葉に、河本は苛立ちを露わにしてぼやく。
そして、目の前の男に1枚のＳＤカードを手渡す。
「うむ、確かに。引き続き、外交官の護衛を頼むぞ」
「了解しました」
河本が返事をしたとき、近くで物音が聞こえてきた。
咄嗟に河本が拳銃を抜いて構えるが、音のした方から一匹の猫が飛び出してきた。
「なんだ、猫か……あっ、そうだ。1つ聞きたいことが……」
河本が振り返ると、そこに男の姿は無かった。
河本は呆れたように呟く。
「特戦群って……わからねぇ」
そうして、河本は朝田達の下へと戻っていく。

「どれどれ……むっ、これは……なる程な。パ皇さん、とんでもない事をやっちまったみたいだな」

第１９話―科学文明の怒り―

～中央暦１６４０年1月２０日～
列強ムー　首都オタハイト　王城

列強第2位の国力を持つ大国、ムー。
そんなムーの王城で、ムー国政府の閣僚が集まり、ある映像を閲覧していた。
そして、全員が険しい表情を浮かべている。
「なんと酷い……パーパルディア皇国とは、これ程までに野蛮だったとは……」
1人の閣僚の呟きに、その場にいる閣僚全員が頷く。
内容は、皇軍兵士が日本人観光客を無差別に処刑しているものであった。
「最早、パーパルディア皇国との関係修繕は、諦めるべきかと」
「その通りだ。既に奴等は、我々を敵視している。ここで関係修繕などしたら、国民からの突き上げが酷いぞ」
満場一致で、パーパルディア皇国との関係改善を取り止める方向へと進んでいく。
そんな中、1人の閣僚が、映像に映ったあるものを見つけた……見つけてしまった。
「す、すみません！　今のシーン、もう一度お願いします！」
映像が巻き戻される。
そして、改めて再生されたシーンに映ったある映像を見て、その場にいる全員が驚愕し、同時に怒りを露わにした。
「や、奴らめぇ！　遂に我が国の民にまで手を出しおったかぁ!!」
一時停止された映像には、皇軍兵士が日本人以外の生存者……それも、国籍問わずに陵辱の限りを尽くしているシーンが映し出されていた。
そして、その中にはムー国人と思われる女性の姿も、ハッキリと映り込んでいる。

僅か一瞬のシーンであったが、これが決定的な決め手となったのは、事実であった。
「すぐさま統括軍に出撃準備をさせろ！　奴らが誰を敵に回したのか、思い知らせてやる!!」
「神聖ミリシアル帝国に連絡を入れろ！　我が列強ムーは永世中立を破棄し、パーパルディア皇国に宣戦布告するとな!!」
「ラ・ムー様！　ご許可を!!」
全員の視線が、これまで静かにしていたラ・ムーへと注がれる。
彼は日本人観光客が処刑されている時点でかなり心を痛めていたのだが、追い打ちとばかりに自国民が被害にあっているシーンを見て、力強く頷いた。
「諸君の判断を支持する！　ムーにとって、最善と思う行動を取ってほしい！」
「「はっ!!」」
第二文明圏列強たるムーは、戦争の準備を開始する。

～中央暦１６４０年1月２０日～
グラ・バルカス帝国　帝都ラグナ　帝王府　大会議室

グラ・バルカス帝国帝王府でもまた、大日本帝国から提供された映像を閲覧していた。
「これがこの世界の列強か……はっ！　やはりレイフォルと同レベルの野蛮人ではないか！」
「いや、しかし同盟を結んだムーやイルネティア王国はかなり良心的であった。やはり、全てを一纏めにして考えてはいけないぞ」
そんな内容の言葉が飛び交う。
過激派と穏健派による派閥争いが続く中、グラルークスが手を上げたことで静まり返る。
「諸君の言い分も理解した。だが、それよりも今は、やらねばならん事があるだろうが！　シエリア！　報告せよ！」

グラルークスの怒りを宿した言葉に、その場にいるほぼ全員が青ざめる中、シエリアは落ち着いた声で報告を始める。
「はい。先日、大日本帝国外務省の友人から得た情報によりますと、当時、フェン王国に滞在していた我が帝国の臣民が、行方不明となっている事が判明いたしました」
「な、なんだと!?」
シエリアの報告に、その場にいる全員の表情が変わる。
そして、付け加えるようにハイラスが提言する。
「それだけではない。映像を少し巻き戻せ。おそらくそこに、答えは有る」
映像が巻き戻され、絶句する。
ハイラスの見つけたそれは、奇しくもムーの閣僚が見つけたのと同じシーンであった。
「ま、まさか……帝国の臣民が、あのような目に……?」
「……可能性は、高いだろうな」
悔しそうにそう呟くハイラスの発言が、大会議室内に響き渡る。
シエリアもまた同じ女性として、思わず被害を受ける女性達から目を逸らす。
それ程までに屈辱的で野蛮な行為が、映し出されているのだ。
暫しの静寂の末、グラルークスが口を開く。
「諸君。最早これは、大日本帝国だけの問題ではない。このような蛮行を放っておいて、果たして良いのだろうか?」
この言葉が切っ掛けとなり、大会議室内に怒声が巻き起こる。
「帝国軍を派遣しろ!　奴らを1人残らず殲滅するのだ!!」
「奴らをレイフォルの二の舞にしてやれ!!」
熱気に包まれる大会議室を一望したグラルークスは満足そうに頷き、シエリアへと視線を向けて指示を出した。
「大日本帝国とムーに通達せよ。我がグラ・バルカス帝国は本日を持って、パーパルディア皇国に対する懲罰戦争を開始する、とな」
「はっ!　承知いたしました!」
異界の大帝国たるグラ・バルカス帝国は、戦争の準備を開始する。

～中央暦１６４０年1月２０日深夜～
大日本帝国　帝都東京都　首相官邸

『間もなく、今村総理の緊急記者会見が開かれます』
大日本帝国に大使館を置く各国の大使達は、大使館内に設置されたテレビを食い入るように見つめている。
民間人を虐殺された大日本帝国が、一体どのような行動を起こすのか……注目が集まる。
「総理、入られます！」
遂に、今村が姿を表した。
無数のシャッター音と共にフラッシュがたかれる中、今村は国旗にお辞儀をして、演台へと上る。
今村の表情は険しく、笑顔など微塵も見せないその姿に、ざわついた空気が一瞬で静寂へと変わる。
今村はゆっくりと話し始める。
「皆様もご存知の通り、先日、フェン王国ニシノミヤコが、パーパルディア皇国の侵攻を受け、陥落いたしました。ここにおいて、逃げ遅れた日本人観光客約２００名が捕らえられ、交渉の余地もなく、あろう事かパーパルディア皇国の非道な論理で、虐殺されました」
沈鬱な表情で俯く今村に、少しだけシャッターが切られる。
そして、今村が再び顔を上げた時、一層険しい怒りの形相を見せ、告げた。
「私は……私達は、このような蛮行を、断じて許すことはできません！
今回の虐殺の首謀者には！　必ず報いを受けてもらいます！　そして!!」
ひと呼吸おいてから、今村は声高らかに宣言する。
「我が大日本帝国は今日、この時を持って！　パーパルディア皇国との開戦に踏み切る事を、決定いたしました!!」
シャッター音が鳴り響く。

ロデニウス大戦から僅か5ヶ月で、大日本帝国は新たな戦いへと身を投じる事となった。
「また、今戦争に関しまして、我が大日本帝国のみならず、同盟国であるムーとグラ・バルカス帝国が、我が陣営にて参戦するとの声明がありました事を、加えて報告させていただきます」
今村の発言に、記者達は一瞬だけ沈黙し、そして再び無数のシャッターが切られる。
この世界で確認されている科学文明国家。
その全ての牙が、パーパルディア皇国へ向けられようとしていた。
地球世界の覇者たる大日本帝国は、戦争の準備を開始する。

第２０話―開戦！フィルアデス大戦―

～中央暦１６４０年１月２１日～
パーパルディア皇国　皇都エストシラント　第１外務局

第１外務局局長のエルトは、変わらぬ日常を送っていた。
部下の持ってくる報告書を読み、必要に応じて印を押す。
そんな作業を繰り返し、そろそろ食事にしようと筆を置いた時、第１外務局次長のハンスが血相を変え、執務室に飛び込んできた。
「何事ですか？」
ハンスの様子を怪訝に思いながらもエルトが尋ねると、ハンスは呼吸を整えながら口を開く。
「ら、ラジオを……ゲホッ……ラジオをお点けください！」
「え、えぇ……」
あまりの剣幕に、エルトは言われるままラジオの電源を入れる。
電源が入ると、ラジオは神聖ミリシアル帝国が放送しているニュース番組を流し始める。
『……繰り返しお伝えします。本日未明、第二文明圏の列強ムーが永世中立を破棄し、列強パーパルディア皇国に宣戦布告を行ったと、外務省から発表されました。また、元列強であるレイフォルを単艦で滅ぼしたとされる新興国、グラ・バルカス帝国と、先のアルタラス島沖事変とも呼ばれる海戦で、パーパルディア皇国の主力艦隊を退けた新興国、大日本帝国が、同時にパーパルディア皇国へと宣戦布告した事が判明しています』
「何ですって!?」
あまりの内容に、エルトは大声を上げる。
ムーの場合、既にほぼ国交断絶状態であり、近いうちに戦争状態に入るのでは？　というのが、第１外務局や皇軍の見解である。
また、大日本帝国に関しても、既に日本人観光客を処刑してしまっている為、驚きこそするも、ここまで取り乱しはしない。
だが、グラ・バルカス帝国に関しては話が別である。

「な、何故グラ・バルカス帝国が我が国に戦争を仕掛けてくるの!? 距離のある我が国より、まずは中央世界やムーを狙うべきじゃ……はっ!!」

ここで、エルトの脳裏に1つの可能性が浮かび上がる。

もしかしたら、グラ・バルカス帝国も大日本帝国同様に、ムーの支援を受けているのかもしれない。

だからこそ、無名の新興国にも関わらず、列強レイフォルを打倒出来たのではないだろうか。

だが、幾らムーの兵器を購入したところで、単艦で首都を壊滅させることができるのか……。

(不味い! 情報が足りなさすぎる!)

ここに来て、エルトは自分の持つ情報が不足していることに気が付く。

「大日本帝国とグラ・バルカス帝国の情報を再度集め直しなさい! 荒唐無稽な内容でも構いません! 出来るだけ多く集めるのです!

私はこれから、レミール様の下へ向かいます!」

エルトは外套を手に取り、レミールのいる部屋へと歩いていく。

そして、誰もいなくなった執務室内で、ラジオの放送のみが流れていく。

『ここで、ムーを経由して、大日本帝国から提供された映像をお送りします。ですが……非常にショッキングな内容となっておりますので、お子様や心臓の弱い方のご視聴は、特にご注意ください』

〜中央暦1640年1月21日〜

パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇宮パラディス城

『いやぁぁぁぁッ!!!』

『やめろ……やめろぉぉーッ!! 今すぐやめさせるんだッ!!!』

部屋の中に、痛ましい悲鳴と男の止めようとする声が響き渡る。

皇帝ルディアスを始め、皇族レミールや皇軍司令長官アルデといっ

た、パーパルディア皇国の最重要人物達。
しかし、この場にいる全員の表情は暗い。
『……ご、ご覧に頂けたでしょうか。今流された映像が、パーパルディア皇国が大日本帝国の民間人に行ったとされるものになっております。ですが、これは……ッ』
神聖ミリシアル帝国の女性アナウンサーの声に、怯えの感情が含まれている。
モザイク処理がなされていたとはいえ、音声を聞いただけでどれだけの悲劇が行われたのか、想像できてしまったからだ。
女性アナウンサーに変わり、男性アナウンサーが原稿を読み上げる。
『神聖ミリシアル帝国政府は、先の映像が本物かどうかを厳密に調査し、もし真実であった場合、今回の3ヶ国による宣戦布告に正当性ありとして、本戦争への不介入を検討するとの情報が入ってきています。今後の詳しい内容については、情報が入り次第お伝えします。それでは次のニュースです……』
「どういうことだッ!!」
次のニュースへと流れた瞬間、レミールが勢いよく机を叩き、叫んだ。
「何故、あの映像が漏洩しているのだッ!!」
「そ、それが……我々にもさっぱりでして……」
「わかりません、では済まされんぞ!!」
レミールの怒声が響き渡る。その表情には、焦りが浮かんでいた。
パーパルディア皇国では技術的に映像付き魔導通信機（所謂テレビ）はまだ普及していないが、神聖ミリシアル帝国ではカラー映像付きの魔導通信機が一般にも普及している。
先程の音声を聞く限り、映像には朝田達を前に要求を突き付けるレミールの姿も映っていた可能性があった。
その事を考えるだけで、レミールは背筋に嫌な汗が流れるのを感じた。
「最早、我が国単独でムーとその属国を相手にする必要が出ましたが

……それがどうしたというのですか。既に我がパーパルディア皇国の軍事力は、ムーを超えています。恐れることはありません！」
アルデが力強く発言する。
現在のパーパルディア皇国皇軍は対ムー戦を想定して増強されており、その戦力は陸軍だけでも２００万人に達しようとしていた。
また、海軍でも魔導戦列艦や竜母を増産しており、戦闘艦だけで見たとしても、フィシャヌス級魔導戦列艦約１，８００隻、ワイバーンロード搭載竜母約１００隻を揃えていた。（なお、これは主力艦隊に配備されている艦のみを計算しており、監査軍や守備艦隊を含めるともっと多い）
その他にも、超フィシャヌス級魔導戦列艦やワイバーンオーバーロード搭載竜母の建造も随時行っている。
竜騎士団もワイバーンロードからワイバーンオーバーロードへと更新が行われ、既に大規模陸軍基地の竜騎士団は全てワイバーンオーバーロードへと更新されている（海軍や辺境部隊では未だにワイバーンロードが主戦力であるが）。
「そ、そうだな……いや、その通りだ」
「これ程の数を用意してあるのだ。例え神聖ミリシアル帝国が相手でも、十分に渡り合える筈だ！」
次第に勢いを取り戻していく参加者達を、不安そうに見つめる人物が２名。
ロデニウス大陸で入手した書物から、大日本帝国がムーの属国では無いのではと疑い始めるカイオスと、グラ・バルカス帝国の参戦を受けて再調査を命じたエルトの２名は、不安を胸の内に隠して同調する。
「アルデよ。皇軍の今後の予定を申してみよ」
「はっ！　先ず始めに、我が皇軍はフェン王国ニシノミヤコに駐屯する全軍と、増援として派遣する２個艦隊の計３個艦隊を持って、フェン王国の首都アマノキを落とします。そして、フェン王国で戦力の再編成を行った後、大日本帝国へと侵攻いたします」
「ムーやグラ・バルカス帝国への対応は？」

「そちらも抜かりなく。既に2個艦隊をアルタラス王国へ派遣する準備を行わせております。アルタラス王国を陥落させ、その土地の住人を肉壁として使用することで、敵を疲弊させた後に我が皇軍主力を持って、敵を殲滅いたします」

アルデの説明に、ルディアスは満足そうに頷き、立ち上がった。

「パーパルディア皇国皇帝ルディアスの名の下に、フェン王国、アルタラス王国、そして大日本帝国への侵攻を、許可する!!」

「はっ!!」

皇帝ルディアスの名の下に、フェン王国、アルタラス王国、大日本帝国への侵攻が、始まろうとしていた。

第２１話―フェン王国沖海戦―

～中央暦１６４０年1月２８日～
フェン王国　首都アマノキ沖合　大日本帝国海軍第４戦隊

パーパルディア皇国と戦争状態に突入した大日本帝国は、先ずはじめにフェン王国内のパーパルディア皇国軍の殲滅を行おうとしていた。

「司令、陸軍第１２旅団の揚陸作業が完了しました。これより、我が第４戦隊はフェン王国水軍と合同で、パーパルディア艦隊との交戦海域へと向かいます」

「あぁ、わかった……だが、これはちと厳しいかもな」

的場は本国から送られてきた敵の予想戦力の数値を見て、小さく唸る。

味方戦力
・ミサイル巡洋艦　２隻
・ミサイル駆逐艦　４隻
・装甲艦（重巡相当）　１隻
・旧式駆逐艦　４隻

敵予想戦力
・魔導戦列艦　約６５０隻
・竜母　約４０隻
・揚陸艦　約３００隻

「弾数が足りないだろ。増援の話は聞いているか？」

「いえ、何も。本国の方では、フェン王国以外にも多方面に部隊を動かしているそうですので、おそらく増援は無いかと」

「不味いな……」

的場達の胸内に僅かな不安を残し、大日本帝国海軍第４戦隊とフェ

ン王国水軍第１艦隊は、パーパルディア皇国艦隊へ向け、出撃した。

～中央暦１６４０年１月２８日～
フェン王国沖合　パーパルディア皇国海軍第７艦隊

「素晴らしい……そうは思わんかね」
パーパルディア皇国海軍第７艦隊副司令長官のムスタは、眼前に広がる光景に感銘の声を上げた。
第７艦隊の他、増援として送られてきた第４艦隊と第８艦隊の艦艇群。
総数は約９００隻とかなり多く、戦闘可能な魔導戦列艦だけを見ても６００隻を超えている。
これ程の数が揃えば、ムー相手でも勝てるだろうという自信があった。
「艦長、我が皇国は強い！　それは何故かね？」
「はっ！　それは一重に、総合力が高いからです！」
「うむ、実に模範的な解答だ。だが、我が海軍ではこう答えるのだ」

それは、最強の竜母艦隊があるからだッ!!

「……とな。制空権を制する者が、制海権も制地権も制するのだ……最も、これは受け売りだがな」
「なる程、実に先進的な考え方であります！」
艦長の言葉に気分を良くしたムスタが竜母艦隊へと視線を向けた時……。
「ん？　……なんだ、あれは」
ムスタは高速で迫りくる槍状の何かを見つけた。
その何かは一度上昇すると、先頭を航行する竜母〈メズズ〉目掛けて突っ込んでいく。
刹那、巨大な爆発が〈メズズ〉を包み込む。

「な、何だ!?」
「何かが〈メズズ〉に命中したぞ！」
「敵の攻撃か!?」
　突然の出来事にムスタ達が狼狽する間にも、先ほどと同じなにかが竜母へと突き刺さっていく。
「竜母〈ガズム〉〈レントン〉轟沈!!」
「馬鹿な……パーパルディア皇国海軍最強の竜母艦隊が、こんなあっさりと……ッ!!」
　次の瞬間、ムスタの乗艦する竜母〈メノール〉に、大日本帝国海軍ミサイル駆逐艦〈桜風〉の放った１０式対艦誘導弾が命中し、ムスタの意識を刈り取った。

「竜母艦隊、全滅ッ!!」
「今のは一体何なんだ!?」
　虎の子の竜母艦隊が敵と会敵する前に全滅するという事態に、動揺が広がる。
　今回、３個艦隊の総司令長官に任命されたレギルドもまた、己の目を信じられないでいた。
「ゆ、誘導魔光弾だと!?　何故フェン王国如きが、古代兵器を保有しているのだ!?!!」
「レギルド司令！　我々はどうすれば……」
　副官の言葉でレギルドは我に返り、一度深く深呼吸をする。
　ここでトップが動揺すれば、その下で動く兵士達にも悪影響が出てしまう。
　それだけは避けねばならなかった。
「おほん……落ち着くのだ。確かに敵が誘導魔光弾を保有していた事には驚いたが、だがそれ程数はないのだろう。現に、狙われたのは竜母のみであり、魔導戦列艦の被害はゼロだ」
「い、言われてみれば……」
　竜母が全滅したことは痛いが、それでも魔導戦列艦約６５０隻は無傷で残っている。

例え誘導魔光弾がまだ残っていたとしても、これ程の大艦隊を撃破する数はないだろう。
まだ勝機はある。
そして、遂に待ちかねた報告が飛び込んでくる。
「レギルド司令！　前方に艦影多数！　敵艦隊と思われます！」
「来たか!!」
部下の示す方角を見ると、確かに艦影のようなものが見えてくる。
それらはパーパルディア皇国の魔導戦列艦よりも大きく、まるで要塞が浮かんでいるのではと錯覚させられる。
しかし、その数はたったの１１隻と、圧倒的に少ない。
例え、単艦性能が高くとも、物量差でゴリ押し出来るだろう。
「全艦突撃！　敵艦隊を包囲し、殲滅せよ!!　直掩のワイバーンロードも全て向かわせろ!!」
レギルドの命令を受け、既に上空へ上がっていたワイバーンロード２００騎が、敵艦隊に向かっていく。
それに続くように、風神の涙を帆いっぱいに受けた魔導戦列艦が、約１６ｋｔの速度で前進する。
レギルドは勝利を確信していた。

～中央暦１６４０年１月２８日～
フェン王国沖合　大日本帝国海軍第４戦隊

竜母艦隊に先制攻撃を与えた大日本帝国海軍第４戦隊は、フェン王国水軍第１艦隊に合わせて３０ｋｔの速度で前進していた。
「敵艦隊を視認！　また、敵航空目標２００、向かってきます！」
「対空戦闘！　６式、撃ちぃ方始め！」
的場の指示で、第４戦隊所属艦艇から次々に６式対空誘導弾が発射されていく。
時速３５０㎞程度の速さで飛ぶワイバーンロードでは６式対空誘導弾を回避することなど出来る筈もなく、次々に命中してはその数を

減らしていく。
「やはり数が多いな……敵艦隊の様子はどうだ!?」
「はっ！　敵艦隊、こちらを包囲する動きを見せています！　敵艦隊との距離、約１５，０００!!」
「敵航空目標、約３０がフェン王国艦隊に向かう！」
「いかん！　そちらを優先して攻撃しろ！」
　直ぐに的場が指示を飛ばすが、少しばかり遅かった。
　一応、フェン王国艦隊にも対空能力は備わっているが、まだ練度が低いこともあり、１３騎を撃墜したところで導力火炎弾の発射を許してしまった。
　大半の導力火炎弾が海上に着弾する中、１発が駆逐艦〈水剣〉に被弾する。
「〈水剣〉被弾！　火災発生！」
「これ以上撃たせるな！　短ＳＡＭ、撃ちぃ方始め!!」
　その後、直ぐにフェン王国艦隊へと向かったワイバーンロード全てを撃墜することに成功したが、今度は第４戦隊へとワイバーンロードが殺到する。
　だが、相手が悪かった。
「ＣＩＷＳ、ＡＡＷオート！　機関砲、撃ち続けろ！」
　主砲や短ＳＡＭの防空圏を突破したワイバーンロードは、ＣＩＷＳと３５㎜機関砲の弾幕に絡め取られ、全滅した。
「敵機、全機撃墜！」
「これからが本番だ！　対水上戦闘！　主砲、撃ちぃ方始め!!」
　続けて、〈長良〉の主砲が魔導戦列艦へと向けられ、火を吹く。
　更に距離を縮められ、現在の相対距離は８㎞と近付いているが、それは逆に、大日本帝国のみならずフェン王国艦隊でもほぼ必中を出せる距離となっていた。
「我々も続けぇ！　祖国を護るのは、我々フェン王国水軍だ!!」
「「おぉぉーッ!!」」
　〈長良〉や他の大日本帝国艦艇に続くように、フェン王国艦隊も攻撃を開始した。

２０．３㎝砲弾が、１２．７㎝砲弾が、３５㎜機関砲弾が、２５㎜機関砲弾が、１２．７㎜機銃弾が、パーパルディア艦隊へと殺到する。
文字通り、持てる力全てを使った攻撃に、パーパルディア艦隊は急激にその数を減らしていく。
だが、それも長くは続かなかった。
「〈由良〉、給弾作業に入ります！　また、〈華風〉は残弾が少なく、この後の指示を求めています！」
「〈剣王〉が先行し過ぎです！　このままでは、敵艦隊の砲撃に晒される危険が!!」
「司令ッ!!」
艦長の悲鳴に近い声に、的場は答えられずにいた。
敵の数は少なくなったとはいえ、それでもかなりの数が未だに残っている。
ここで取り逃せば、フェン王国首都アマノキは壊滅的被害を受けてしまう可能性があった。
的場は悩む。
（どうすればいい。ラムアタックでも仕掛けるか……いや、現代艦の装甲でそれは不可能だ。それに、それでは部下にも被害が……）
こうしている間にも、味方から次々に報告が上がっていく。
乗艦する〈長良〉も弾薬が残り僅かとなり、これ以上の交戦は出来ないと全軍に撤退を指示しようとした、その時だった。
「レーダーに艦影確認！　これは……ッ!?　クワ・トイネ艦隊ですッ!!」
「な、何ぃぃッ!!?」
予想外の報告に、動揺が走る。
何故クワ・トイネ公国の艦隊がこの海域にいるのだろうか。
クワ・トイネ艦隊から通信が入る。
『こちらは、ロデニウス連合艦隊である。大日本帝国の要請により、我が艦隊はパーパルディア艦隊との戦闘に突入する』
「ろ、ロデニウス連合艦隊？」
的場がレーダー員に視線を向けると、レーダー員は直ぐ様訂正す

る。
「し、失礼しました！　確かに、クワ・トイネ公国の他にも、クイラ王国、ロウリア王国の艦艇も確認できます！」
「そ、そうか……いや、これは好機だ！　ロデニウス連合艦隊に通達！　敵航空戦力は殲滅した。心置きなく攻撃してほしいと伝えろ。全艦、後の事は気にせず、残りの砲弾を全て叩きこめ!!」
「了解ッ!!」
大日本帝国海軍第４戦隊全艦艇は、攻撃の勢いを強めていく。

～クワ・トイネ公国海軍第１艦隊～
「お前ら！　〈サナイク〉の初陣だ！　ド派手な戦果を挙げてやれ!!」
「了解ッ!!!」
遂に配備された戦艦〈サナイク〉の３５．６cm連装砲４基８門が火を吹く。

～クイラ王国海軍混成艦隊～
「野郎ども！　パーパルディアの奴等に、俺達の底力をぶつけるんだ!!」
「応ッ!!!」
軽装甲艦、駆逐艦から必殺の酸素魚雷が発射され、パーパルディア艦隊目掛けて突き進む。

～ロウリア王国海上警備軍竜母機動部隊～
「ワイバーン隊、全騎発艦せよッ！　敵艦隊を殲滅するッ!!」
「オォォーッ!!!」
竜母４隻から次々にワイバーンが発艦していき、竜母と直掩を失ったパーパルディア艦隊に殺到する。

突然のロデニウス大陸国家の乱入は、パーパルディア艦隊に大きな衝撃を与えた。
「ロデニウス連合艦隊だとッ!?　まさかムーは、ロデニウスの蛮族共

まで味方につけたというのか!?」
「司令！　我が方の損耗率が８０％を超えます！　揚陸艦隊の方も……このままではッ!!」
目の前で魔導戦列艦が、ワイバーンの導力火炎弾を受けて炎上するのを見て、レギルドは決断を下す。
「て、撤退だ……全軍撤退ッ!!　この戦、我々の……」
「敵騎直上ーッ!!!」
艦隊に撤退を命令しようとした時、見張り員の叫び声で空を見上げる。
そこには、導力火炎弾の発射体制を取るワイバーンの姿があった。
次の瞬間、放たれた導力火炎弾が艦隊総旗艦〈ガルシア〉へと命中し、レギルドは意識を永遠に手放した。
パーパルディア皇国と大日本帝国、フェン王国の間で始まった海戦は、ロデニウス連合艦隊の介入により、パーパルディア皇国艦隊全滅という結果で、幕を閉じた。
３個艦隊所属の戦列艦隊、竜母艦隊、揚陸艦隊全てを失ったパーパルディア皇国であったが、彼等の苦難は、まだ始まったばかりである。

第２２話―フェン王国の戦い―

～中央暦１６４０年１月２８日～
フェン王国　ゴトク平野　大日本帝国陸軍第１２旅団第１戦闘団

ニシノミヤコから首都アマノキまでの間に、ゴトク平野と呼ばれる平野がある。
地質の問題から大地は荒れ果て、草原の荒野となっている。
大日本帝国陸軍第１２旅団第１戦闘団は、パーパルディア皇国皇軍陸戦隊と対峙していた。
９６式戦車１０両を中心とし、１個特科中隊、２個普通科中隊、対戦車ヘリ３機が、作戦の開始を今か今かと待っている。
「後方の特科中隊、展開完了！」
「対戦車ヘリ小隊、離陸を開始しました！」
各部隊から送られてくる報告を整理しながら、第１戦闘団を指揮する天野は腕時計を確認する。
予定通りであれば、海軍第４戦隊と敵艦隊が交戦状態に入った頃だろう。
「まもなく我が方の偽装陣地に、敵軍が到達します！」
天野は一度深呼吸をし、命令を出す。
「作戦を開始する！　特科中隊、射撃を開始せよ！」
「特科中隊、射撃開始！　繰り返す、射撃開始！」

～中央暦１６４０年１月２８日～
フェン王国　ゴトク平野　パーパルディア皇国皇軍陸戦隊

大日本帝国陸軍第１２旅団第１戦闘団が行動を開始した頃、パーパルディア皇国皇軍陸戦隊は味方の戦列艦が砲撃位置に着くのを待っていた。
眼前に展開されている敵陣地を、ベルトランは艦砲射撃の後に襲撃

することを決めたのである。
ベルトランは陸戦策士であるヨウシに尋ねる。
「艦砲射撃の準備は出来たのか？」
「はい。陸戦支援艦隊全艦、準備完了とのことです」
ヨウシの答えを聞いて、ベルトランは頷く。
陸戦支援の魔導戦列艦４０隻……航空支援のワイバーンロード１２騎……陸戦の要であるリントヴルム３０頭……開発に成功した最新鋭の牽引式魔導砲……そして、厳しい訓練と実戦を乗り越えてきた精強な皇軍陸戦隊約３，０００人。
これ程の戦力があれば、例え相手がムー……いや、神聖ミリシアル帝国であっても、負ける気はしなかった。
「……ん？　何の音だ？」
ベルトランが足を止める。
瞬間、彼の目の前が大きく爆発し、土煙が巻き上がった。
「うわぁぁッ!!?」
突然の爆発に吹き飛ばされるベルトランだったが、爆発点がそこそこ離れていた為に軽症で済んでいた。
しかし、爆発点の近くにいた兵士達は軒並み消滅し、消滅を免れた兵士達も手足が千切れ飛び、地獄絵図が広がっていた。
現実離れした光景を前に、ベルトランの理解が追いつけない。
「ぐっ……い、一体何が……ッ!!?」
原因を確認しようとした時、再び大地が爆発する。
それも１回に留まらず、何度も爆発してはその場にあった土と、不運にもその場にいた兵士達を吹き飛ばしていく。
「し、将軍……」
「ッ！　ヨウシかッ！　お前も無事で……ッ!!」
声をかけられ、副官の無事を喜ぼうとしたベルトランだったが、片腕の無くなったヨウシの姿を見て言葉を失う。
「将軍、これは敵の攻撃です……ッ！　直ぐに迎撃準備を！」
「あ、あぁ！　その通りだ……誰か！　直掩のワイバーンロード隊と陸戦支援艦隊に魔信を送れ！」

ヨウシの言葉で我に返ったベルトランが指示を飛ばす。
敵の奇襲で陸戦隊に大きな被害が出ているが、それでもまだ精強なワイバーンロードと魔導戦列艦が残っている。
そう考えたベルトランであったが、突如として派手な炸裂音が幾つも鳴り響く。
「なっ!?!!」
ベルトランが音のした方……上空を見ると、これから敵の正体を掴みに行こうとしていたワイバーンロード１２騎が、バラバラの肉片となって雨のように落ちていく所であった。
更に……。
「将軍！　艦隊がッ!!」
「ッ!!!!」
今度は陸戦支援の為に接近していた魔導戦列艦から、火の手が上がった。
最新の対魔弾鉄鋼装甲が施された魔導戦列艦が、いとも簡単に沈められていく。
「〜ッ!?!!　将軍！　何かが１０体、こちらに向かってきます!!」
「……今度は何だ」
既に精神が疲弊して叫ぶ気力すら残っていないベルトランが、銃兵隊で一番目の良い兵士の指差す方へと視線を向ける。
地平線の先、土埃を上げて筒の付いた異物が１０体、陸戦隊に近付くのが見えた。
次の瞬間、１０体いる異物の筒が魔導砲のような煙を吐き出した。
大日本帝国陸軍の有する９６式戦車の１２０㎜滑空砲から発射された徹甲榴弾が、全弾それぞれの狙った魔導戦列艦に命中し、装甲を喰い破って撃沈させる。
陸戦支援艦隊もやられてばかりではいられず、各自の判断で艦砲射撃を開始するも、射程圏外にいる９６式戦車に届くことはなく、大地を耕すに終わる。
後方の射撃陣地からも９６式自走１７５㎜榴弾砲の砲撃が行われ、僅か数分の内に陸戦支援艦隊は全滅した。

更に、陸戦隊の後方に回り込んだ１０式対戦車攻撃ヘリ３機が攻撃に加わり、陸戦隊を中央へと押し込んでいく。
リントヴルム隊、魔導砲部隊が全滅した上に大多数の皇軍兵士を喪失し、頼みのワイバーンロード隊と陸戦支援艦隊は全滅。
これにより、ベルトランの戦意は完全に砕かれる事となった。
「降伏だ……降伏の合図を出せ！」
兵士が隊旗を反対に付け替えて、左旋回に振り始めた。
これは第三文明圏での、降伏を示す合図であった。
……だが、彼等は不幸であった。
第三文明圏での降伏の合図を大規模魔法発動の準備と解釈した天野の指示で、一斉に攻撃が再開されたのだ。
１２０㎜榴弾が、１７５㎜榴弾が、対戦車ロケット弾　が、残り少ない陸戦隊へと降り注ぐ。
「そ、そんな……降伏したのに!!　くそッ！　蛮族共がぁぁぁッ!!!」
怨嗟の叫びを上げるベルトランも、９６式戦車の放った１２０㎜榴弾の直撃を受け、四肢を引き裂かれて絶命した。
パーパルディア皇国皇軍陸戦隊は、フェン王国ゴトク平野にて、大日本帝国陸軍第１２旅団第１戦闘団との戦闘に敗れ、全滅した。

～中央暦１６４０年１月２８日～
フェン王国　ニシノミヤコ　大日本帝国陸軍第１２旅団第２戦闘団

第１戦闘団がパーパルディア皇国皇軍陸戦隊を殲滅したのと同時刻、大日本帝国陸軍第１２旅団第２戦闘団がニシノミヤコへと突入していた。
フェン王国近衛武士団１００名を同行させた混成部隊が、ニシノミヤコ守備隊に襲いかかる。
「こちら、ニシノミヤコ守備隊！　陸戦隊、応答せよ！」

ニシノミヤコ守備隊の皇軍兵士が魔信に呼びかけるが、反応がない。
そうしている間にも、第２戦闘団所属の普通科隊員が守備隊の拠点にする施設を制圧していく。
『こちら０２、西門クリア！』
『こちら０５、監視塔の制圧、完了しました！　これより、０３の支援に回ります！』
無線で流れる報告を聞きながら、第１小隊（０１）はとある建物の前へとやって来た。
第１小隊１０名に加え、近衛武士３名の混成部隊は、建物の裏手に回り込むと互いを見合って頷く。
「情報では、ここに囚われた民間人が居るらしい。早急に敵を始末し、救出するぞ」
「了ッ」
「よし、行くぞッ」
小隊長の野方の号令と同時に、全員が即座に動き出した。
バリケードで塞がれた扉を蹴り開け、近衛武士を先頭に突入していく。
１階の制圧を完了し、２階へと続く階段を登ったところで、敵のマスケット銃による射撃に見舞われた。
「ぐわッ！」
「頭を下げろ！　負傷者を下へ！」
右腕を撃たれた近衛武士を下げていく中、野方はそっと頭を上げる。
薄暗くてよく見えないが、敵は弾込め作業に入っているようで、敵の焦る声が聞こえてくる。
「隊長、人質の姿は確認できません。おそらく、人質は奥の部屋かと」
「そうか……よし、フラッシュだ。全員目と耳を塞げ……ッ！」
そう言って野方は閃光手榴弾のピンを抜き、敵陣目掛けて投げ入れた。
「ば、爆弾だ！」

転がってきたそれを見た皇軍兵士が叫び、距離を取ろうとするが、それよりも先に閃光手榴弾が炸裂する。
薄暗さに目を慣らしていた皇軍兵士達は、一度に視力と聴力を奪われたことで混乱し、隊列が乱れてしまう。
「今だ、総員吶喊ッ!!」
「了解!! かかれぇぇぇ!!!」
その隙きを逃さずに野方が吶喊を命じると、第1小隊は待ってましたと言わんばかりの雄叫びを上げ、2階へと駆け上がっていく。
小隊員が銃先に装着した銃剣で皇軍兵士を突き刺し、近衛武士が素早い剣捌きで首を斬り落とす。
皇軍兵士は装填作業中であったこともあり反応が遅れてしまい、僅か数分で第1小隊によって制圧された。
「隊長! おそらくこの扉の先に民間人が!」
「よし、本部に応援を要請しろ。川崎とキシカさんは付いてきてくれ。他は周囲の警戒を怠るな」
「了解ッ!」
女性の小隊員と近衛武士を連れ、野方は囚われた民間人の居る部屋へと入っていく。
そして、部屋の中の惨状に目を疑った。
「こ、こいつは……」
「酷い……」
「これが本当に、人間のすることなのか?」
部屋の中には十数名もの女性の遺体が、折り重なるように一箇所に積み上げれていた。
衣類を剥かれ、事後処理も行われていないであろう被害者達の惨状に、川崎が思わず口元を抑え膝を折る。
「うぐっ……ッ」
「……キシカさん、すまないが川崎を外に連れて行ってあげてくれ。ここは私一人で十分だ」
「は、はい……」
キシカに支えられて部屋を出ていく川崎を見送ると、野方は近くの

壁に拳を叩きつけた。
叩きつけた拳から血が流れ落ちるのも気にせずに唇を噛み締め、憎悪に満ちた眼を皇軍兵士の亡骸に向ける。
「パーパルディア……この報い、必ず受けてもらうぞ……ッ!!」
野方は被害者達の遺体に手を合わせ、部下に指示を出そうと振り返る。
その時だった。
「……」
「ッ!?」
微かに聞こえてきた声とも言えぬうめき声に、野方は即座に振り返る。
視線の先には被害者達の遺体……その中の一人が、僅かに身を震わせたのだ。
「ッ！　おい！　聞こえるか!?」
慌てて駆け寄った野方は、慎重に女性の身体を抱き起こす。
女性はうっすらと目を開けるも、すぐにまた目を閉じてしまう。
「お、おい！　しっかりしろ！　もう大丈夫だ！　もう……大丈夫だから……」
気付けば野方は、涙を流しながら女性の身体を抱きしめていた。
生存者がいた……この絶望的な状況下の中、それは野方のみならず多くの将兵に希望を与えることになる。
数時間後、ニシノミヤコ守備隊が全滅したことで、ニシノミヤコ攻防戦は大日本帝国・フェン王国連合軍の勝利に終わった。
そして、野方ら第1小隊の保護した女性、セシリア・ローランドや他7名もの被害者達は、精密検査の為に大日本帝国本土の病院へと搬送されるのだった。
戦争はまだ、始まったばかりである。

第２３話―アルタラス島沖海戦―

～中央暦１６４０年１月２８日～
アルタラス王国沖合　大日本帝国海軍第４艦隊

フェン王国沖合で海戦が始まった頃、アルタラス王国北方海域でもまた、海戦が始まろうとしていた。
本国から派遣された補給艦隊によって補給を完了させた第４艦隊は、行動を開始する。
「〈白龍〉航空隊は直ちに発艦ッ！　敵竜母艦隊を攻撃せよッ!!」
高嶋は命令を飛ばしながら、パーパルディア艦隊のいる方角を睨みつける。
既に戦争状態へと突入した敵国艦隊相手に容赦はせず、先制攻撃として航空隊による敵航空戦力の撃滅を行おうとしていた。
〈白龍〉に搭載された９９式艦上戦闘攻撃機〈陣風〉１５機が、艦隊の上空で編隊を組んでパーパルディア艦隊へと向かって行く。
「司令。どうやらあちらも、攻撃隊を送り出すようです」
荻原の視線の先、大日本帝国から見れば旧式だが、この世界の基準で見れば列強に数えられてもおかしくない艦艇群の姿があった。
そして、その中の空母１隻から、レシプロ式の航空機が次々に発艦していく。
「あれって、確か正規の艦隊じゃないわよね」
「はい。うちとの技術交流で来ていた、グラ・バルカス帝国の実験艦隊です」
「はぁ……あの国もよくやるわ」
そんな話をしながら、高嶋達はグラ・バルカス艦隊を眺めている。

☒グラ・バルカス帝国海軍東遣実験艦隊☒
ヘルクレス級戦艦：〈ヘルクレス〉※旗艦
ペガスス級航空母艦：〈サダルバリ〉
タウルス級重巡洋艦：〈エレクトラ〉

レオ級巡洋艦：４隻
エクレウス級駆逐艦：８隻

「お手並み拝見、といきましょうか」
最後にそう呟き、高嶋は艦隊指示に戻っていく。

～中央暦１６４０年１月２８日～
アルタラス王国北方海域　パーパルディア皇国海軍第５艦隊

喪失した艦艇の補充を終えた第５艦隊と、第６艦隊の連合艦隊は、アルタラス王国を目指して進軍していた。
艦隊司令長官のノドルスは、隊列を組んで進む艦隊を見て、不安げな表情を浮かべる。
「果たして、２個艦隊で勝てるだろうか」
ノドルスの呟きに、副官が答える。
「ご安心ください。今回の戦力は、先の事変とは比べ物になりません。例え、ムーの機械動力船が相手であったとしても、この数をもってすれば、鎧袖一触であります！」
「だと良いのだがな……ッ!?」
副官の言葉に懐疑的なノドルスであったが、突如として鳴り響く警報に意識を切り替える。
「何事だ!!」
「ぜ、前方より槍状の何かが突っ込んできます！」
見張り員の指差す方へ視線を向けると、確かに槍状の物体が、信じられない速度でこちらに向かっていた。
ノドルスは直ぐに指示を飛ばす。
「直掩のワイバーンロードに迎撃させろ!!　竜母艦隊は直ちに全ワイバーンロードを発艦！　急げッ!!」
命令を受けて、直掩に上がっていたワイバーンロード１００騎が迎撃に向かう。

しかし、ワイバーンロードが導力火炎弾の発射体制に入る前に、槍状の物体は直掩をすり抜けていってしまった。
『な、なんて速さだッ!!』
『こちら直掩隊！　迎撃間に合わず、突破されたッ!!』
「何たることだッ!!」
パーパルディア皇国のワイバーンロードが追いつけずに突破された事実に、ノドルスは近くの壁を殴りつけた。
槍状の物体は真っ直ぐ竜母艦隊へと向かい、衝突する。
「竜母〈アガノス〉轟沈！　あぁ……〈マストロイア〉が沈みます！」
続けざまに竜母撃沈の報告が上がり、ノドルスら艦隊司令部に大きな衝撃を与えた。
「まさか……竜母のみを狙って攻撃しているのか!?」
「そんなッ!?　あり得ない！　蛮族如きが、そのような超技術を持つなど……あッ!!」
司令部が混乱している間に、最後の竜母が沈んでいく。
これで、パーパルディア艦隊の航空戦力は直掩の１００騎のみとなってしまった。
「ノドルス司令！　残存するワイバーンロード全騎を、攻撃の来た方へ差し向けましょう！　そちらに必ず、敵がいる筈です！」
「う、うむ……確かにその通りだ。直掩隊に通達「敵騎来襲ーッ!!」ッ!?」
ワイバーンロードを差し向けようとした時、見張り員が空を指差しながら叫んだ。
ノドルス達も空を見上げると、そこには７０機近い飛行機械が、こちらに迫っているのが見える。
その内、１８機の飛行機械が直掩のワイバーンロードに向かっていく。
『な、何だコイツらは!?』
『速い!!　ワイバーンロードが追いつけないぞ！』
『た、助けてくれぇぇぇーッ!!!』
これまで文明圏外国家相手にその実力を見せつけていたワイバー

ンロードが、僅か１８機の飛行機械を前に、劣勢となっていく。
信じられない光景にノドルスは唖然とするが、まだ敵が残っている事を思い出す。
残りの５０機近い飛行機械が、艦隊に向かって降下してくる。
「た、対空戦闘！　急げーッ!!」
すぐさま艦隊に対空射撃を行わせようと叫ぶが、艦隊の動きは遅い。
そもそも、パーパルディア皇国の艦艇には、マトモな対空兵器が搭載されていない。
これは、ワイバーンロードが上空を守る限り、艦隊の脅威にならないだろうという、パーパルディア皇国海軍の慢心であった。
水兵がマスケット銃を引っ張り出して射撃を行うも、高速で動き回る飛行機械相手は掠りすらしない。
やがて、１機の飛行機械の下に取り付けられた爆弾が、魔導戦列艦に向かって投下される。
爆撃を受けた魔導戦列艦は、対魔弾鉄鋼式装甲を食い破られ、艦内から爆発の炎を上げ、沈んでいく。
「戦列艦〈コンナ〉〈ハンズジャー〉轟沈!!　せ、戦列艦〈ソンナン〉〈インキッチ〉も轟沈!!」
次々に撃沈報告がされる中、まるで戦いにすらなっていない現状に、ノドルスは酷い目眩を感じる。
これは現実なのか……本当に、敵はムーなのか……そればかりが脳裏を過る。
「敵飛行機械、引いていきます！」
ようやく攻撃が終わり、敵飛行機械が撤退していく。
だが、こちらの被害は甚大であった。
竜母艦隊全滅……竜騎士団全滅……戦列艦隊４分の１が轟沈……。
艦隊に、これ以上の継戦能力は無かった。
「撤退だ！　全艦撤退せよ!!　急げ!!」
「司令！　前方に敵艦隊ですッ!!」
命令を伝えて直ぐに、見張り員から最悪の報告が入る。

水平線上には、黒煙を上げながらこちらへ向かってくる艦隊が見えた。
機械動力船相手では、風神の涙でしか満足な速度を得られないパーパルディア艦隊は逃げられない。
ノドルスは決意する。
「戦列艦隊は敵艦隊に向かって前進ッ!!　揚陸艦隊の撤退を支援する!!」
ノドルスは戦列艦隊を犠牲にして、揚陸艦隊を逃がすことを決断した。
可能であれば、敵に一矢報いる事も視野に入れ、指示を出す。
「風神の涙、最大出力!!　敵艦隊に突撃せよ!!」
風神の涙で起こされる風を帆いっぱいに受け、パーパルディア艦隊戦列艦隊は突撃を開始する。

～中央暦１６４０年１月２８日～
アルタラス王国北方海域　グラ・バルカス帝国海軍実験艦隊　旗艦〈ヘルクレス〉

「この程度の敵に、帝国の臣民が……」
戦艦〈ヘルクレス〉に乗艦する艦隊司令のノレスは、眼前に展開するパーパルディア艦隊の戦列艦を見て、小さく呟いた。
彼は本国の懲罰艦隊が到着するまでの間、大日本帝国と共同でパーパルディア艦隊を撃退せよと命じられていた。
既にパーパルディア皇国がどのような蛮行を行ったかは知らされており、艦隊の士気は高い。
正規の艦隊ではないが、大日本帝国から供与された新装備の存在が、彼等を後押しする。
「断じて許さん……ッ対艦戦闘！　主砲、撃ち方始めぇ!!」
〈ヘルクレス〉の４１㎝砲４基８門が、パーパルディア艦隊に向けて火を吹く。

８発の４１cm砲弾はパーパルディア艦隊上空に達すると爆発し、無数の子弾となって降り注いた。
瞬く間に数十隻の戦列艦が爆発し、深海へと沈んでいく。
「なる程、対空砲弾の応用か……大日本帝国も、中々面白いことを考えたものだ」
大日本帝国製対地広域砲弾。
装甲目標にこそ効果は薄いが、非装甲目標に対しては絶大な効果を発揮するこの砲弾は、装甲化されているとはいえ、戦列艦を粉砕するには十分な威力を持っていた。
〈ヘルクレス〉に続き、大日本帝国海軍の航空戦艦〈扶桑〉も砲撃を開始する。
戦艦とはいえ、たった2隻の艦艇による砲撃で、パーパルディア艦隊は3分の1を喪失した。
「敵艦隊、撤退の動きを見せています！」
「駆逐艦隊は敵艦隊の退路を塞げ！　1隻たりとも逃すな!!」
ノレスは敵艦隊の殲滅を指示する。
それは大日本帝国側も同じなのか、〈扶桑〉の後部飛行甲板から複数のヘリコプターが発艦し、後方の敵艦隊へと回り込んでは搭載されている機関砲やロケット弾を用いて、殲滅戦へと移行している。
「勝ったな……巡洋艦隊は漂流者の救助に当たれ。冷えていることだろう、温かいスープも振る舞うように」
「宜しいのですか？」
「あぁ。我々は奴等とは違って、文明的だからな」
その後、パーパルディア皇国海軍第5、第6艦隊は日グ連合艦隊と交戦し、撤退に成功した僅かな揚陸艦を除き、全滅した。
後に、アルタラス島沖海戦と呼ばれたこの海戦は、初の転移国家同士の合同作戦として、歴史に刻まれることとなった。